川西町埋蔵文化財調査報告書第18集

K-868

下小松古墳群(2)

小林三郎編

山形県川西町

下小松古墳群 (2)

小 林 三 郎 編

山形県川西町

序

“緑と愛と丘のあるまち”川西町は、山形県の南部、置賜地方の中央にある人口約２万人の町です。本町の地形は、置賜盆地の一角をなす平野部と、梅峰山系より派生する緩やかな丘陵地帯から成って、本書で報告されます下小松古墳群は、この丘陵端に築かれた東北有数の一大古墳群であります。

昭和60年に下小松古墳群において最初の学術的な発掘調査を行なってから、早14年の月日が流れました。当時、山形県の古代史観の変更を余儀なくした発見も、現在では定説となり多くの人々に認識されるようになりました。

下小松古墳群を取り巻く環境も年々変化していることから、古墳群の用地は保存を前提に大部分を町有化いたしました。また、周囲の自然環境の調査なども行いながら、今後の具体的な保存とそれを前提とした活用を計るべく、平成11年２月には国指定史跡への申請を行なったところでもあります。

本書は、平成７年度より平成10年度まで調査した鷹待場支群の４基の古墳の発掘調査を報告するものです。本書が今後の文化財保護活動や研究の一助として広く活用していただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、いずれの調査においても小林三郎教授をはじめとする明治大学考古学研究室の皆様にはひとかたならぬご指導とご協力をいただきました。また、共にご協力いただきました関係各位に感謝申し上げ序といたします。

平成11年３月

川西町長

高　橋　和　男

例　　言

1．本書は山形県東置賜郡川西町大字下小松にある下小松古墳群のうち、鷹待場支群Ｔ－41(第106)号墳・Ｔ－42(第186)号墳・Ｔ－９号墳・Ｔ－１号墳の発掘調査報告、ならびに下小松古墳群分布調査の報告書である。

2．発掘調査は、1995年から1998年にかけて明治大学と川西町教育委員会によって行なわれた。

3．本書の執筆は下記のとおりに分担執筆し、小林三郎が全体を編集した。

第１章　斉藤　敏明（川西町教育委員会）
第２章　斉藤　敏明（川西町教育委員会）
第３章　新井　　悟（明治大学講師）
第４章　柳下恵理子（明治大学大学院博士前期課程）
まとめ　小林　三郎（明治大学教授）

4．出土遺物の保存処理については、福島県立博物館・松田隆嗣氏、株式会社京都科学の協力を得た。

なお、本書をまとめるにあたって以下の諸君の協力を得た。記して謝意を表したい。

古屋紀之・遠竹陽一郎・伝田郁夫・斎藤達也・福田健太・芳賀秀和・細田賢史
坂本竜二・高江挙史・菊地　豊・田中則仁・佐藤祐樹・平田　健・大鹿響子
大島有紀子・立岩可奈子

T－41（第106）号墳調査団構成

1	遺跡名	下小松古墳群鷹待場支群T－41（第106）号墳
2	所在地	山形県東置賜郡川西町大字下小松字舞台山1933　他
3	調査期間	第2次調査　1995年7月20日～8月12日
4	調査主体	川西町教育委員会・明治大学考古学研究室
5	調査担当	川西町教育委員会・明治大学考古学研究室
6	調査総括	小林三郎（明治大学教授）
7	主任調査員	新井　悟（明治大学大学院博士後期課程）
8	副主任調査員	山本美野里・髙橋幸治・田村隆太郎（明治大学大学院博士前期課程）
9	調査員	古屋紀之・遠竹陽一郎・岸美由紀・笠井崇吉・藤崎教行・梶藤智之 大山みゆき・吉田　愛・中野淳子・下田香緒里・浅見恵理・志賀　究 鶴高憲仁・藤原憲芳・深谷大一朗（明治大学生）
10	作業協力	鈴木仙助・米野五郎
11	事務局長	情野正弘（川西町教育委員会社会教育課長）
12	事務局員	藤田宥宣（川西町教育委員会文化遺跡係長） 斉藤敏明（川西町教育委員会文化財専門員）
13	調査協力	川西町文化財保護協会

T－42（第186）号墳調査団構成

1	遺跡名	下小松古墳群鷹待場支群T－42（第186）号墳
2	所在地	山形県東置賜郡川西町大字下小松字舞台山1931
3	調査期間	第2次調査　1996年7月22日～8月9日
4	調査主体	川西町教育委員会・明治大学考古学研究室
5	調査担当	川西町教育委員会・明治大学考古学研究室
6	調査総括	小林三郎（明治大学教授）
7	主任調査員	新井　悟（明治大学大学院博士後期課程）

8	副主任調査員	田村隆太郎・遠竹陽一郎（明治大学大学院博士前期課程）
9	調査員	藤崎教行・梶藤智之・浅見恵理・塩路久美子・吉田英史・深谷大一朗 遠藤啓介・小杉山大輔・色川順子・門脇正法
10	作業協力	鈴木仙助
11	事務局長	佐藤　肇（川西町教育委員会社会教育課長）
12	事務局員	藤田宥宣（川西町教育委員会文化遺跡係長） 斉藤敏明（川西町教育委員会文化財専門員）
13	調査協力	川西町文化財保護協会

T－9号墳調査団構成

1	遺跡名	下小松古墳群鷹待場支群T－9号墳
2	所在地	山形県東置賜郡川西町大字下小松字舞台山1927
3	調査期間	1997年8月18日～9月5日
4	調査主体	川西町教育委員会・明治大学考古学研究室
5	調査担当	川西町教育委員会・明治大学考古学研究室
6	調査総括	小林三郎（明治大学教授）
7	主任調査員	新井　悟（明治大学大学院博士後期課程）
8	副主任調査員	遠竹陽一郎・古屋紀之・梶藤智之（明治大学大学院博士前期課程）
9	調査員	富田健司・時信武史・深谷大一朗・小松正毅・軒　陽一・柳田　信 恩田貴康・色川順子・高嶋章至・細田賢史・田邨知浩（明治大学生）
10	作業協力	鈴木仙助
11	事務局長	佐藤　肇（川西町教育委員会社会教育課長）
12	事務局員	藤田宥宣（川西町教育委員会文化遺跡係長） 斉藤敏明（川西町教育委員会文化財専門員）
13	調査協力	川西町文化財保護協会

T－1号墳調査団構成

1	遺跡名	下小松古墳群鷹待場支群T－1号墳
2	所在地	川西町大字下小松字薬師沢1943
3	調査期間	1998年7月26日～8月10日
4	調査主体	川西町教育委員会・明治大学考古学研究室
5	調査担当	川西町教育委員会・明治大学考古学研究室
6	調査総括	小林三郎（明治大学教授）
7	主任調査員	新井　悟（明治大学文学部講師）
8	副主任調査員	遠竹陽一郎・古屋紀之・梶藤智之・柳下恵理子（明治大学大学院博士前期課程）
9	調査員	富田健司・時信武史・芳賀秀和・菊地　豊・坂本竜二・高江挙史・ 田中則仁・佐藤祐樹・平田　健（明治大学生）
10	作業協力	鈴木仙助・小方瑞樹
11	事務局長	竹田利雄（川西町教育委員会社会教育課長）
12	事務局員	藤田宥宣（川西町教育委員会文化遺跡係長） 斉藤敏明（川西町教育委員会文化財専門員）
13	調査協力	川西町文化財保護協会

下小松古墳群分布調査団構成

1	調査期間	1998年11月4日～11月6日、1998年12月16日～17日
2	主任調査員	新井　悟（明治大学文学部講師）
3	調査員	柳下恵理子（明治大学大学院博士前期課程） 坂本竜二（明治大学生） 藤田宥宣（川西町教育委員会文化遺跡係長） 斉藤敏明（川西町教育委員会文化財専門員）
4	調査協力	鈴木仙助　八巻理枝
5	事務局長	竹田利雄（川西町教育委員会社会教育課長）

山形県川西町下小松古墳群(2)　目　次

序

例　言

第1章　下小松古墳群の概観

第1節　周辺の地理的環境 …… 15

第2節　周辺の歴史的環境 …… 17

第2章　鷹待場支群の調査経過 …… 19

第3章　古墳の調査

第1節　鷹待場支群T－41（第106）号墳 …… 23

第2節　鷹待場支群T－42（第186）号墳 …… 34

第3節　鷹待場支群T－9号墳 …… 45

第4節　鷹待場支群T－1号墳 …… 61

第4章　下小松古墳群分布調査

第1節　下小松古墳群分布調査報告 …… 73

第2節　古墳台帳

1　小森山支群

2　鷹待場支群

3　薬師沢支群

第5章　ま と め …… 125

挿図目次

第1図　下小松古墳群各支群の位置
第2図　川西町の位置
第3図　米沢盆地の古墳分布
第4図　T－41（第106）号墳墳丘測量図
第5図　T－41（第106）号墳トレンチ配置図
第6図　T－41（第106）号墳墳頂調査区平面図
第7図　T－41（第106）号墳セクション図
第8図　T－41（第106）号墳主体部平面図及びエレベーション図
第9図　T－41（第106）号墳主体部副葬品出土状況図
第10図　T－41（第106）号墳出土遺物実測図
第11図　T－42（第186）号墳墳丘測量図
第12図　T－42（第186）号墳トレンチ配置図
第13図　T－42（第186）号墳セクション図（1）
第14図　T－42（第186）号墳セクション図（2）
第15図　T－42（第186）号墳セクション図（3）
第16図　T－42（第186）号墳セクション図（4）
第17図　T－42（第186）号墳セクション図（5）
第18図　T－9号墳墳丘周辺地形測量図及びエレベーション図
第19図　T－9号墳墳丘測量図
第20図　T－9号墳トレンチ配置図
第21図　T－9号墳セクション図（1）
第22図　T－9号墳セクション図（2）
第23図　T－9号墳セクション図（3）
第24図　T－9号墳主体部平面図及びエレベーション図
第25図　T－9号墳主体部副葬品出土状況図
第26図　T－9号墳出土遺物実測図

第27図　T－1号墳墳丘周辺地形測量図
第28図　T－1号墳トレンチ配置図及び墳丘エレベーション図
第29図　T－1号墳セクション図（1）
第30図　T－1号墳墳頂平面図及び主軸セクション図
第31図　T－1号墳主体部平面図及びエレベーション図
第32図　T－1号墳セクション図（2）
第33図　T－1号墳主体部副葬品出土状況図
第34図　T－1号墳出土遺物実測図

表　目　次

第1表　下小松古墳群墳形構成表

附　　図

附図1　下小松古墳群古墳分布図
附図2　下小松古墳群墳丘類型分布図

写真図版目次

Pl．1　鷹待場支群T－41（第106）号墳

1．墳丘遠景（東より）

2．墳丘（西より）

Pl．2　鷹待場支群T－41（第106）号墳

1．西側周溝（南より）

2．東側墳裾（南より）

Pl．3　鷹待場支群T－41（第106）号墳

1．拡張区北壁セクション（南より）

2．墳頂調査区セクション（南より）

Pl．4　鷹待場支群T－41（第106）号墳

1．主体部検出状況（東より）

2．主体部完掘状況（西より）

Pl．5　鷹待場支群T－41（第106）号墳

1．主体部完掘状況（西より）

2．主体部副葬品出土状況（西より）

Pl．6　鷹待場支群T－42（第186）号墳

1．墳丘（北より）

2．1トレンチ南壁セクション（北より）

Pl．7　鷹待場支群T－42（第186）号墳

1．M調査区（南より）

2．N調査区北壁セクション（南より）

Pl．8　鷹待場支群T－42（第186）号墳

1．墳頂東西セクション（南より）

2．墳頂東西セクション西寄部分（南より）

Pl．9　鷹待場支群T－9号墳

1．墳丘（東より）

2．墳丘（西より）
Pl．10　鷹待場支群T－9号墳
1．墳丘（南東より）
2．1トレンチ南壁セクション（北より）
Pl．11　鷹待場支群T－9号墳
1．2トレンチ東壁セクション（南西より）
2．3トレンチ南壁セクション（北東より）
Pl．12　鷹待場支群T－9号墳
1．4トレンチ北東壁セクション（南より）
2．5トレンチ北壁セクション（南西より）
Pl．13　鷹待場支群T－9号墳
1．主体部南北セクション（東より）
2．主体部南北セクション（西より）
Pl．14　鷹待場支群T－9号墳
1．主体部東西セクション（南東より）
2．主体部完掘状況（西より）
Pl．15　鷹待場支群T－9号墳
1．主体部副葬品出土状況・拡大1（東より）
2．主体部副葬品出土状況・拡大1（西より）
Pl．16　鷹待場支群T－9号墳
1．主体部副葬品出土状況・拡大2（東より）
2．主体部副葬品出土状況・拡大2（西より）
Pl．17　鷹待場支群T－1号墳
1．墳丘（南より）
2．墳丘斜面（南東より）
Pl．18　鷹待場支群T－1号墳
1．1トレンチ西壁セクション（北東より）
2．2トレンチ南壁セクション（北より）
Pl．19　鷹待場支群T－1号墳

1．3トレンチ東壁セクション（南東より）
2．4トレンチ南壁セクション（北西より）
PL．20　鷹待場支群T－1号墳
1．墓壙検出状況1（南より）
2．墓壙検出状況2（南西より）
PL．21　鷹待場支群T－1号墳
1．主体部e－e′セクション（南より）
2．主体部f－f′セクション（北より）
PL．22　鷹待場支群T－1号墳
1．主体部完掘状況（南西より）
2．主体部副葬品出土状況1（南西より）
PL．23　鷹待場支群T－1号墳
1．主体部副葬品出土状況2（南西より）
2．大刀出土状況（北西より）
PL．24　鷹待場支群T－41（第106）号墳
1．出土遺物
PL．25　鷹待場支群T－9号墳
1．出土遺物1
2．出土遺物2
PL．26　鷹待場支群T－1号墳
1．出土遺物

山形県川西町
下小松古墳群(2)

第1章　下小松古墳群の概観

第1節　周辺の地理的環境

山形県の南部に位置する置賜盆地は、西から南を標高2,000m前後の朝日、飯豊、吾妻の各連峰に、東を奥羽脊梁山脈、北を白鷹丘陵に囲まれた標高平均220m程の盆地である。この盆地は、縦貫する最上川（松川）の上流域である米沢盆地とその下流にあたる長井盆地にしばしば呼び分けられ、米沢盆地は南北約24km、東西約18kmの倒立卵形を呈する盆地であり、米沢市、南陽市、東置賜郡高畠町、同郡川西町の2市2町にまたがる。

現在、盆地の人口の集中している米沢市の中心部から隣接する都市までの一般道を経由しての距離は、それぞれ峠を隔てて山形市まで約50km、福島市まで約47km、福島県会津若松市まで約80km、宮城県白石市まで約80kmをはかる。

下小松古墳群は、米沢盆地の西縁、南の山岳部から派生する丘陵地帯が長井盆地との境を形成しながら緩やかに北へ延びる通称眺山丘陵の東面に築かれた古墳群である。最上川支流の犬川流域にあたり、この流域には、沖積部に前方後方墳である天神森古墳の存在が知られる。

下小松古墳群内のそれぞれの古墳は、西置賜郡飯豊町との町境をなし南北へ延びる丘陵主脈から東側に派生した尾根に築かれ、その地形的なまとまりから、南から北に小森山支群、鷹待場支群、薬師沢支群の3支群に分けることができる。

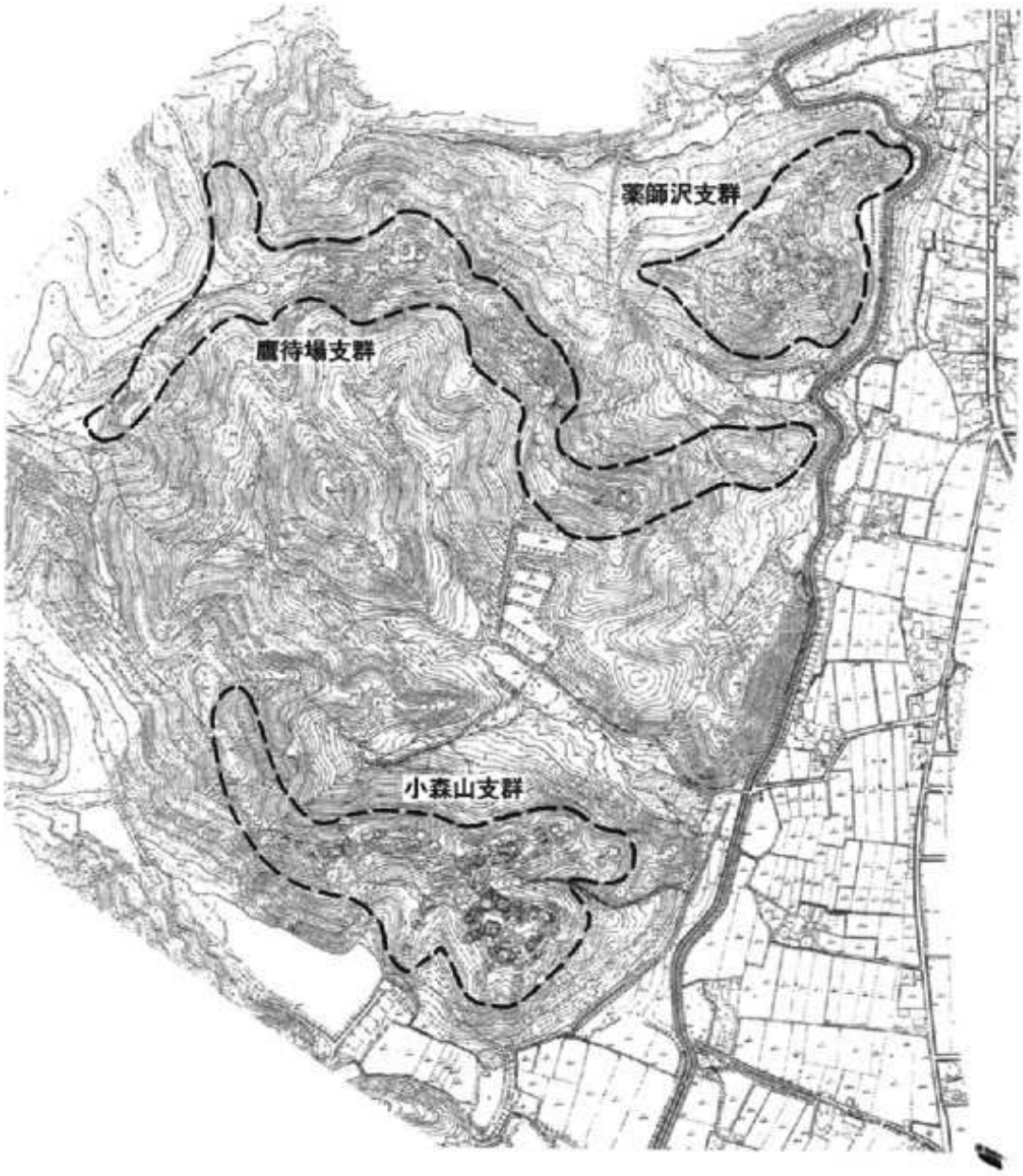
小森山支群が展開する尾根は主脈から派生した尾根が先端で台地状に広がり、古墳は主脈に近い痩せ尾根上の部分と台地状の部分に占地するものに大きく分けられ、台地状の部分については痩せ尾根の延長上にあたるK－36（第61）号墳周辺と派生した台地部分であるK－68（第40）号墳周辺に地形上区分することができる。標高は最も高い地点（小森山支群K－7（第98）号墳頂）で約274mをはかる。

鷹待場支群は、かつて中間支群と呼ばれた経緯があるように、丘陵主脈上から古墳群の中央を蛇行しながら東へ延びる比較的痩せた尾根に展開する。主脈上の鷹待場支群T－37号墳付近が古墳群全体の中で最も高く標高約280mをはかる。小森山支群と鷹待場支群は主脈を経由して尾根伝いに回遊することができる。

薬師沢支群は、主脈とは谷を隔てた、独立した小丘陵地の稜線から東南斜面に広がり、

3支群のうちでは最も地形的にまとまりがある。最高所はY－1号墳頂の約264mである。

殆どの古墳が東の展望が優れた場所に位置し、米沢盆地を挟んで遠くには蔵王連峰、奥羽山脈、吾妻連峰を望むことができる。



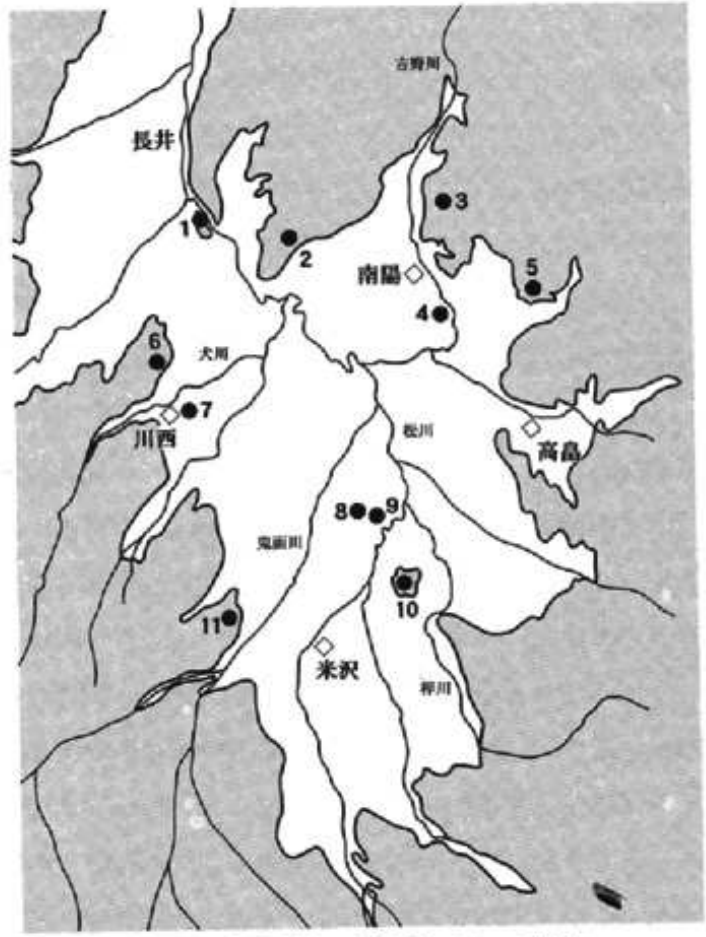
第1図　下小松古墳群各支群の位置

第2節　周辺の歴史的環境

下小松古墳群のある米沢盆地は、現在までのところ、古墳の変遷を追うことができる日本海側最北の地域ということができる。ただし、日本海側最北の古墳としては、隣接する山形盆地の古墳が挙げられ、近年にも新たな古墳が発見されるなど、今後状況が変化する可能性はある。

まず、米沢盆地の古墳を概観する。古墳時代の前期には、平野部に比較的大型の古墳が築造される。盆地のほぼ中央、米沢市域の松川左岸には宝領塚古墳（前方後方墳、約80m）が、盆地西部、川西町域の犬川右岸には天神森古墳（前方後方墳、約76m）が、南陽市域にあたる盆地北部、吉野川右岸には稲荷森古墳（前方後円墳、約96m）がそれぞれ築

第2図　川西町の位置



第3図　米沢盆地の古墳分布（4～6世紀）

1. 河井山古墳群　2. 梨郷古墳群　経塚山古墳群　愛宕山古墳群　天王山古墳群　3. 諏生田山古墳群　4. 稲荷森古墳群　5. 松沢古墳群　6. 下小松古墳群　7. 天神森古墳　8. 宝領塚古墳　9. 八幡塚古墳　10. 戸塚山古墳群　11. 成島古墳群

かれる。また、盆地を南に望む南陽市上野の丘陵端部には蒲生田山古墳群の3号墳、4号墳（ともに前方後方墳、約29m）が築かれ、周濠内より二重口縁の底部穿孔壺が出土している。

古墳時代中期に築造されたと考えられるものには、下小松古墳群の鷹待場支群と薬師沢支群の古墳の外、盆地中央の独立丘陵上に築かれた戸塚山139号墳（前方後円墳、約54m）を主墳とする戸塚山山頂のグループ、西縁の丘陵地帯に成島1号墳（前方後円墳、60m）などがある。

後期には、下小松古墳群K－36（第61）号墳など下小松古墳群小森山支群が継続して築造され、盆地北部の南陽市梨郷地区の丘陵中にも、古墳との確証は得られていないものの前方後方形を呈するものなどあわせて32基の墳丘の存在が指摘されている。

この後、7世紀代になると、盆地東部で横穴式石室を持つ古墳が盛んに造られ続け、その傾向は8世紀になっても継続する。

これらの古墳築造の基盤となる集落遺跡については、米沢盆地において集落全体の様相を把握できるようなものはほとんどない。部分的な調査では、米沢市域の比丘尼平遺跡で、古墳時代前期の土師器を出土する竪穴式住居と方形周溝墓が確認されている。他の地域では南陽市沢田遺跡、諏訪前遺跡、高畠町南原遺跡などで概期の土師器が出土している。中期の遺跡としては米沢市大清水遺跡などが知られ、後期の遺跡になると米沢市上新田遺跡、高畠町南原遺跡がある。

盆地西部の川西町域においては従来ほとんど調査例がなかったが、近年の調査によって数例の概期の遺構が確認されている。最上川左岸の河岸段丘上には、前期から中期の住居跡が確認された治兵衛館遺跡があり、眺山丘陵の東端部、犬川左岸の段丘上には後期の住居跡が検出されたカノウ壇遺跡がある。

また、これまで古墳時代の遺構が殆ど確認されていなかった西置賜郡でも長井盆地の北部で古墳時代前期のものと見られる遺跡が調査されている。3基の方形周溝墓が確認された白鷹町黒藤館遺跡、12軒の竪穴式住居が確認された同町廻り屋遺跡などである。

これらに続く奈良平安時代の遺跡として、米沢盆地では置賜郡衙の比定地として従来より数ヶ所の名が挙げられている。米沢市大浦遺跡、南陽市大字郡山、下小松古墳群眼下の沖積地にある川西町道伝遺跡などがそれで、近年の調査で筏地業を施した建物跡が確認された川西町太夫小屋Ⅰ遺跡も同様の遺跡と考えられる。

第2章　鷹待場支群の調査経過

1995年までの経過

川西町では、1983（昭和58）年の分布確認調査以来、下小松古墳群の調査を継続して行なってきた。分布調査で確認された墳丘のうち、小森山支群のものが古墳か否かを確認するために行なった1985（昭和60）年のK－36（第61）号墳の調査を第一段階、その後1988（昭和63）年まで鷹待場支群、薬師沢支群の墳丘について同様の確認調査を行なったのを第二段階とすると、明治大学の協力を得て古墳群の築造開始時期とその後の群形成過程の所見を得ることを主な目的として調査を行なった1990（平成2）年以降の小森山支群のK－7（第98）号墳、K－68（第40）号墳の調査を第三段階とすることができる。ここまでは1995（平成7）年に発刊した既報告にまとめられている。

この第三段階の調査までで得られた主な所見をまとめると以下の通りである。

・下小松古墳群の小森山支群、鷹待場支群、薬師沢支群の3支群は古墳時代の墳墓である。
・鷹待場支群の古墳には二重口縁の底部穿孔壺形土器を伴うもの（T－42（第186）号墳）があり、5世紀前半までの年代を与えられる。
・小森山支群の古墳は、鷹待場支群の古墳（T－41（第106）号墳、T－42（第186）号墳）より後出するもので6世紀に盛行する。
・小森山支群では、埋葬主体が大規模な墓壙を持たない箱型木棺で互いに切り合う複数埋葬のK－36（第61）号墳から、大規模な墓壙を持つ複数埋葬のK－68（第40）号墳と大規模な墓壙を持ち単数埋葬であるが埋葬部の位置状況から複数埋葬が想定されたと考えられるK－7（第98）号墳への推移が伺え、いずれも6世紀代に属すると考えられる。

また、この他にも、発掘調査が及んだ古墳においては埴輪を一切持たないことや古墳築造に際して墳丘・埋葬主体ともに石材が使用されないこと、墳丘の盛り土が最小限に押さえられていることが特徴的な事柄として指摘できるようになった。さらに、大規模な墓壙を伴う2例では、墓壙内の空間へ土砂が落ち込んだ痕跡が、現地表面でも凹みとして確認できるという今後墳丘観察をする上で重要な所見も得られている。

1995年以降の経過

このような中で、第三段階の調査の当初の目的を完遂するためには、鷹待場支群、薬師沢支群の発掘調査が必要になった。鷹待場支群中には小森山支群に先行するものが確実に含まれることから、次段階の調査は鷹待場支群を対象に行なうこととした。

当時の鷹待場支群の状況としては、1988（昭和63）年までに古墳の確認調査としてT－40（第105）号墳、T－41（第106）号墳、T－42（第186）号墳で墳丘の測量と部分的な発掘を行ない、T－42（第186）号墳では二重口縁を持つ底部穿孔壺形土器片が出土していた。また、T－41（第106）号墳では墳頂の調査区で埋葬主体に関わると思われる土質の違いが観察されていた。さらに、丘陵中の踏査によって既報告に記載されていない2基の前方後円墳の存在が指摘されていた。T－1号墳のある尾根から南に下った緩斜面に占地するT－9号墳と、主脈上で西置賜郡飯豊町との境にあたるT－37号墳である。

今回報告する鷹待場支群の調査は、1995（平成7）年にT－41（第106）号墳、1996（平成8）年にT－42（第186）号墳、1997（平成9）年にT－9号墳、1998（平成10）年に第T－1号墳と、毎年夏に1基づつ行なったものである。ここでは経過を記し、個々の調査の報告は第3章に詳しいので参照されたい。

T－41（第106）号墳とT－42（第186）号墳は、支群中で著しく規模が大きく、また立地条件も良い古墳である。ともに尾根筋を大きくカットして墳丘を造り出している点でも共通している。また、前述した通り、T－42（第186）号墳からは、かつて底部穿孔の壺形土器を出土している。築造開始時期を追求するために、まずこれらの古墳の再調査を行なった。

T－41（第106）号墳の調査では、長大な割竹形木棺が墳丘の築造過程で安置される特徴的な埋葬主体が検出され、大刀やガラス小玉などの出土を見た。期待した土器資料については小片のみの出土で、これまで確認していた資料を補完することはできなかったが、古墳の築造年代は、主体部の構造や副葬品から5世紀前半と判断した。

T－42（第186）号墳の調査は埋葬主体の確認ができない困難な調査であった。しかし地山が整形され盛土が確実になされていること、後世の遺構が一切確認されていないこと、以前の調査で土師器が出土していることから、古墳を意識して墳丘が構築されたことは間違いないと考えている。

これらの突出した2古墳の調査ののち、鷹待場支群中の残る古墳で注目すべきは新に確

認された2基の前方後円墳であった。とりわけ丘陵主脈上に位置するT－37号墳の性格を解明すべきとの意見を尊重し、次期調査対象とすべく地権者と事前協議を行なった。しかしながら最終的に調査に対する同意を得られないという経過があり、1997（平成9）年の調査はもう一方の前方後円墳であるT－9号墳を対象とすることになった。

T－9号墳は、尾根筋から落ちた、いわば“山寄せ”の前方後円墳である。全長20m弱と規模は小さいながら、多数の前方後円墳が造られた小森山支群との時間的な関係を解く鍵になると考えられた。

調査によって得られた所見は、T－9号墳は出土した鉄鏃の特徴から5世紀後半の築造と判断できることである。このことにより、下小松古墳群中での前方後円墳が、先行して古墳が築かれていた鷹待場支群の最終段階に出現し、それとほぼ同時に墓域を小森山支群に移して盛行期を迎えるという経過が浮かび上がった。

1998（平成10）年の調査では、T－9号墳の上方の尾根筋に展開する一群の調査を行なうことで、鷹待場支群の形成過程がより明確になるものと考えられた。対象としたのはT－1号墳である。箱形木棺直葬の埋葬主体で大刀や鋤先などが副葬されていた。結論として、T－1号墳が、T－41（第106）号墳とT－9号墳の間に築造されたものと考えて問題は生じなかった。

第3章　古墳の調査

本章で報告する4基の古墳は、1995年から1998年までの間に行なわれた、明治大学と川西町教育委員会の合同調査によるものである。

このうち、T－41（第106）号墳・T－42（第186）号墳はかつて1986年に川西町教育委員会によって調査された。その報告は1987年に『山形県川西町下小松墳丘群鷹待場支群第105・106・186号墳調査報告書』（川西町教育委員会）として刊行されている。また、1990年から開始された明治大学と川西町教育委員会の合同調査において、小森山支群の調査を終了した段階に刊行された大塚初重・小林三郎編1995年『山形県川西町下小松古墳群(1)』（東京堂出版）にこの2基の古墳の報告は記述を改めて再録されている。以下、古墳の報告をするにあたって前回の調査所見の引用をするにあたっては、後者の報告書を使用する（以下には『下小松古墳群(1)』と呼称する）。

第1節　鷹待場支群T－41（第106）号墳

T－41（第106）号墳は、1986年5月19日～9月18日に川西町教育委員会によって第1次調査がおこなわれ、1995年7月20日～8月12日に明治大学と川西町教育委員会との合同による第2次調査が行なわれた。本報告は、この第2次調査の報告である。

調査の目的

本古墳は、第1次調査時に墳頂平坦面の調査区において主体部に関係する土層の落ち込みを確認しながらも、主体部そのもの自体は調査されなかった経緯があった。

出土した土器から鷹待場支群のなかでも古い様相をしめすと考えられる古墳の主体部の構造およびその副葬品の内容を把握することが、支群の形成開始時期についての考察に必要と考え、第2次調査を計画、実施した。

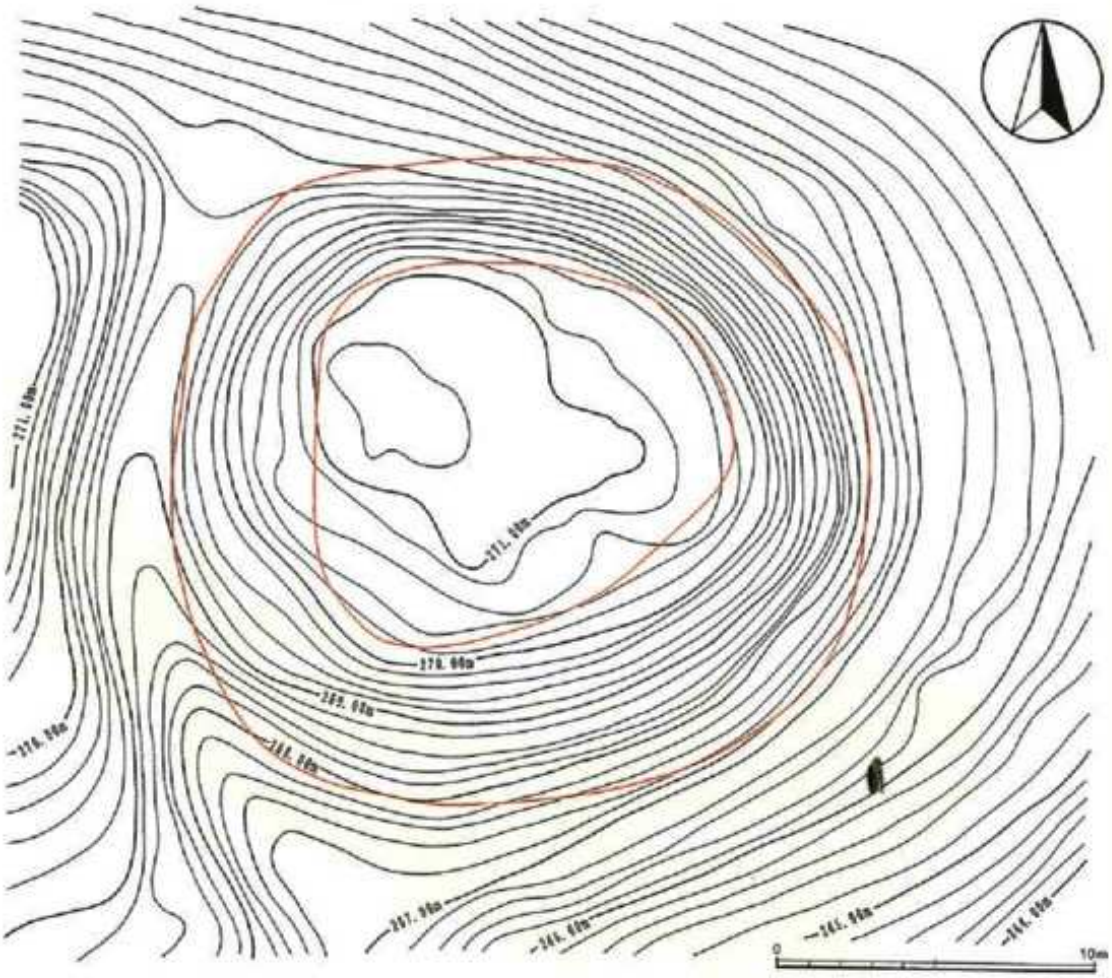
付　　記

『下小松古墳群(1)』において、T－41（第106）号墳出土として第46図の1･2に赤彩壺

頸部・底部穿孔壺の実測図をのせた。これは編集のミスで、T－42（第186）号墳出土の赤彩壺頸部・底部穿孔壺を誤ったものである。したがって、表現が多少違うが、第46図の1・2と第50図の1・2は同一のものである。図としては第50図を採用されたい。出土した古墳はT－42（第186）号墳である。無用の混乱をおこしたことをお詫びいたします。

立　　地

鷹待場支群の古墳は基本的に尾根筋に分布している。T－37号墳の立地する地点がほぼ尾根の最高所である。そこから尾根の主脈が東にゆるやかに上下にうねりながら伸びていき、置賜盆地との境界近くで急激に尾根が下降する、その傾斜変換点の標高268 m付近に立地する方墳がT－41（第106）号墳である。本古墳の西側には、T－40（第105）号墳



第4図　T－41(第106)号墳墳丘測量図

が近接する。

墳　　丘

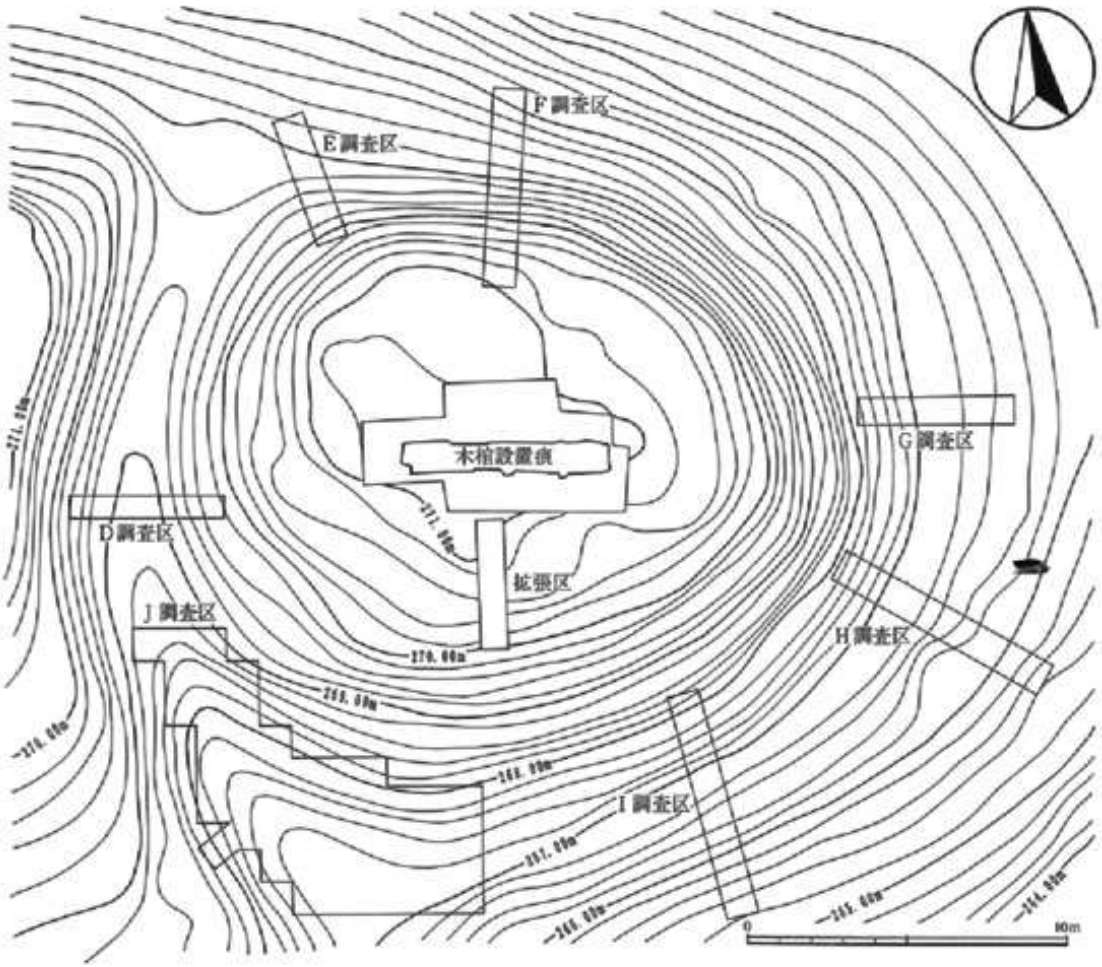
第2次調査においては、墳丘の調査は行なっていない。したがって、墳丘に規模については『下小松古墳群(1)』の所見のままである。以下にそれを再録しておく。

墳丘規模　　南　北　19.5 m　　東　西　24 m

墳丘高　3.8 m

※『下小松古墳群(1)』において墳丘の高さを1.4 mとしたが、これは誤りであり、上の数値に訂正をしておく。

本古墳のほとんどの部分が地山を削りだすことによって整形されており、周溝底から標



第5図　T－41(第106)号墳トレンチ配置図

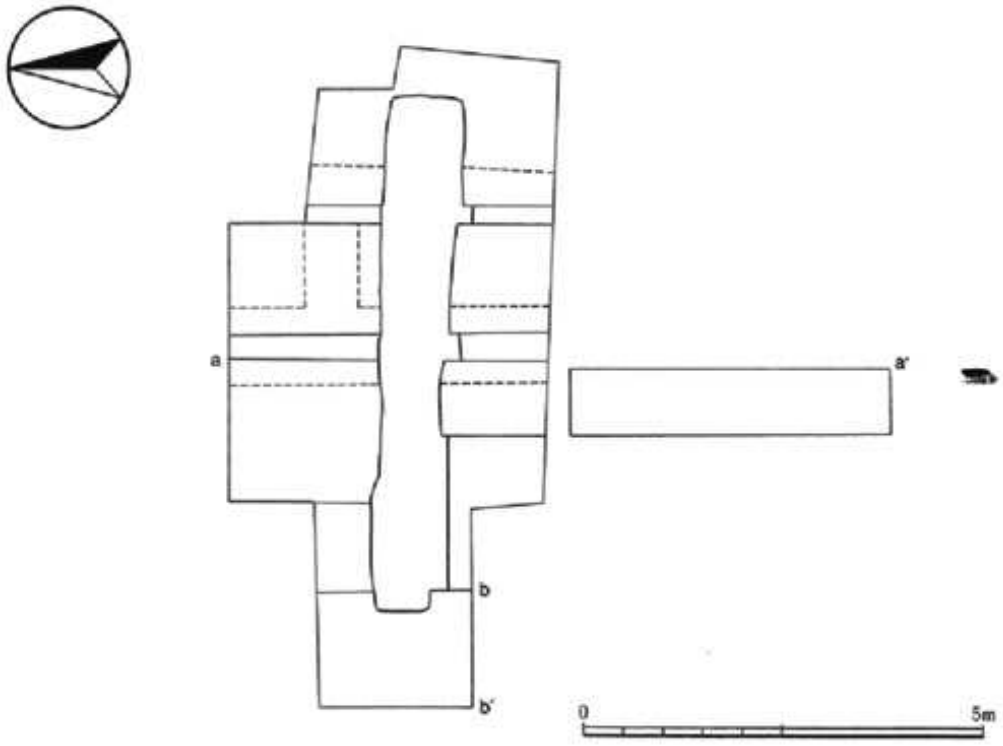
高270.00 mまでのおよそ1.5 mが地山整形部分である。したがって、地山整形部分の頂部より墳頂までの約1.4 mが盛土であるが、この部分の構造は主体部の構造と密接に関わっているので、後述する。

墳丘の形態は、方墳である。墳丘斜面は無段である。

主　体　部

『下小松古墳群(1)』においては、本古墳の主体部の構造について、盛土を施して墳丘を形成したのちに墓壙を掘り込んでいるように記述した。しかし、第2次調査の結果、主体部は木棺直葬であった。また、その木棺の設置方法も、地山もしくは盛土の掘り込みによって墓壙を穿つ形式のものではなく、地山整形後に盛土の施工と同時に木棺を設置するものであった。以下には、盛土の工程とともに木棺の設置法を述べ、木棺の痕跡およびそこから推定される木棺の構造について記述をすすめる。

地山の削りだしによって、南北19.5 m、東西24 m、高さ約2.0 mの方台形の基台部分を



第6図　T－41(第106)号墳墳頂調査区平面図

造ったあと、そこから盛土を開始する（第7図)。墳頂発掘区a－a'セクションは墳丘盛土部分及び主体部を南北に横断したものであるが、その所見によると、墳頂平坦面のほぼ中央が浅くくぼんでいる。のちの木棺設置部分を意識しての掘り込みとかんがえられる。したがって、盛土を開始する前段階においては、地山を整形した方台形の頂部を平坦に整え、その中央の木棺設置予定部分を木棺の形状にあわせて浅く掘りくぼめていることが推測される。 墳丘盛土の開始は、この方台形の頂部平坦面の周縁からである。発掘調査によって確認さたのは、南側の周縁部分の盛土である。これをみると、13･12･11層を連続的に盛ることによって土手状の施設を形成しているようである。墳頂平坦面の周縁を調査したのはこの部分だけである。おそらく、この盛土開始段階には、方台形の頂部平坦面の周縁を全周するように土手状の盛土を施した姿が想定される。なお、この土手状の施設の良好な例は、後述するT－42（第186）号墳において検出されている。

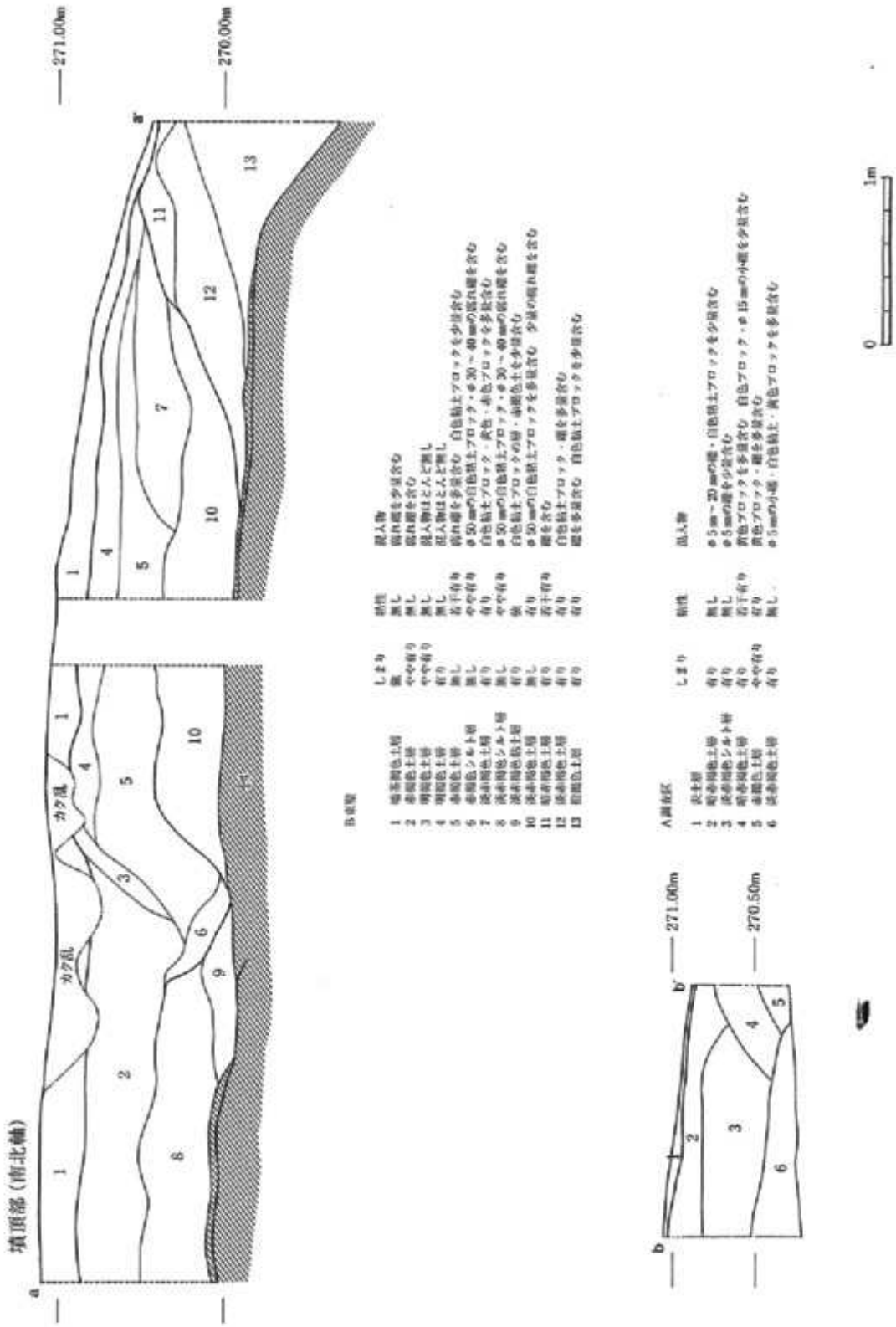
次の段階では、土手状の盛土によって囲まれた内側の凹部に盛土を行なっていく様子がセクション図に表れている。南側からは10層を、北側からは9･8層を上端のレベルを揃えて盛土している。

この段階で注目すべきことは、8･9層の南端と10層の北端とが連続してU字形のくぼみを呈していることである。この各層の端部が連続したU字形の曲面にそって炭化物が検出された。木棺の遺存物である。したがって、8･9層および10層は木棺の身の部分を設置するのための盛土であり、これとその上部の7･6･5･4･3･2･1層との間には作業の工程としては連続ではなく、中断が考えられる。そしてこの中断時点が意味するのは、埋葬とそれに伴うなんらかの儀式とするのが妥当であろう。8･9層および10層の上端のレベルがほぼ水平であるのもそのための平坦面を意識してのことである可能性がある。

ただし、8･9層の南端と10層の北端が連続したU字形の曲面をなすことについては、単純に盛土の仕方によってそのように仕上がっているのか、盛土後に削ることでそのように仕上げたのか、両論が想定される。調査の所見からは、そのどちらかを支持できるような痕跡はつかめなかった。今後の課題であるが、おそらく後者のほうが妥当であろう。

次の段階では、木棺に蓋をし、7･6･5･4･3･2･1層を順次いれていくことによって埋め戻しが行なわれていくと同時に、墳丘の整形の仕上げがおこなわれていった。

セクション図にあらわれた、6･5･3･2層は、木棺の腐朽による土層の落ち込みである。



第7図　T－41(第106)号墳セクション図

木棺の痕跡

このようにして、墳丘の形成過程で設置された木棺の形状はどのようなものであったか、以下に木棺の痕跡の残存状況を記述して、その形態の推定を行なう（第8図）。

8·9層の上面を精査することによって確認できた木棺の設置痕の規模は、主軸方位が東西方向をとり、長軸が約6.65 m、短軸は東端より西へ約1.7 mのところが最大で約1.17 m、西端より約0.8 mのところで約1.0 mである。これを上端とし、落ち込んだ土層を除去することによって認識できた木棺設置痕の底部を下端とすると、下端の規模は長軸が約6.4 m、短軸は東側の上端計測箇所で約0.36 m、西側の上端計測箇所で約0.34 mである。断面形は西端をのぞくすべての箇所で浅いU字形を呈している。

木棺の遺存と考えられる炭化材は、木棺設置痕下端の東端から約0.17 mところから西端から約0.6 mのところまでに分布する。また依存した炭化材の木目を観察すると、木棺設置痕下端の東端から約1.7 mのところと、木棺設置痕下端の西端から約2.3 mのところとに、主軸に直交する木目をもつ板材が存在する以外はすべて主軸に並行している。

またわずかに観察しえた、木棺設置痕内の落ち込みの長軸セクションをみると西端では9·8層が詰め込まれているかのような状態にありそれ以外の土層と区別される。さらにこの部分の短軸のエレベーションをみると他の部分とは異なり、逆台形を呈している。したがって、木棺はこの部分には到達していないと考えるのが適当だろう。

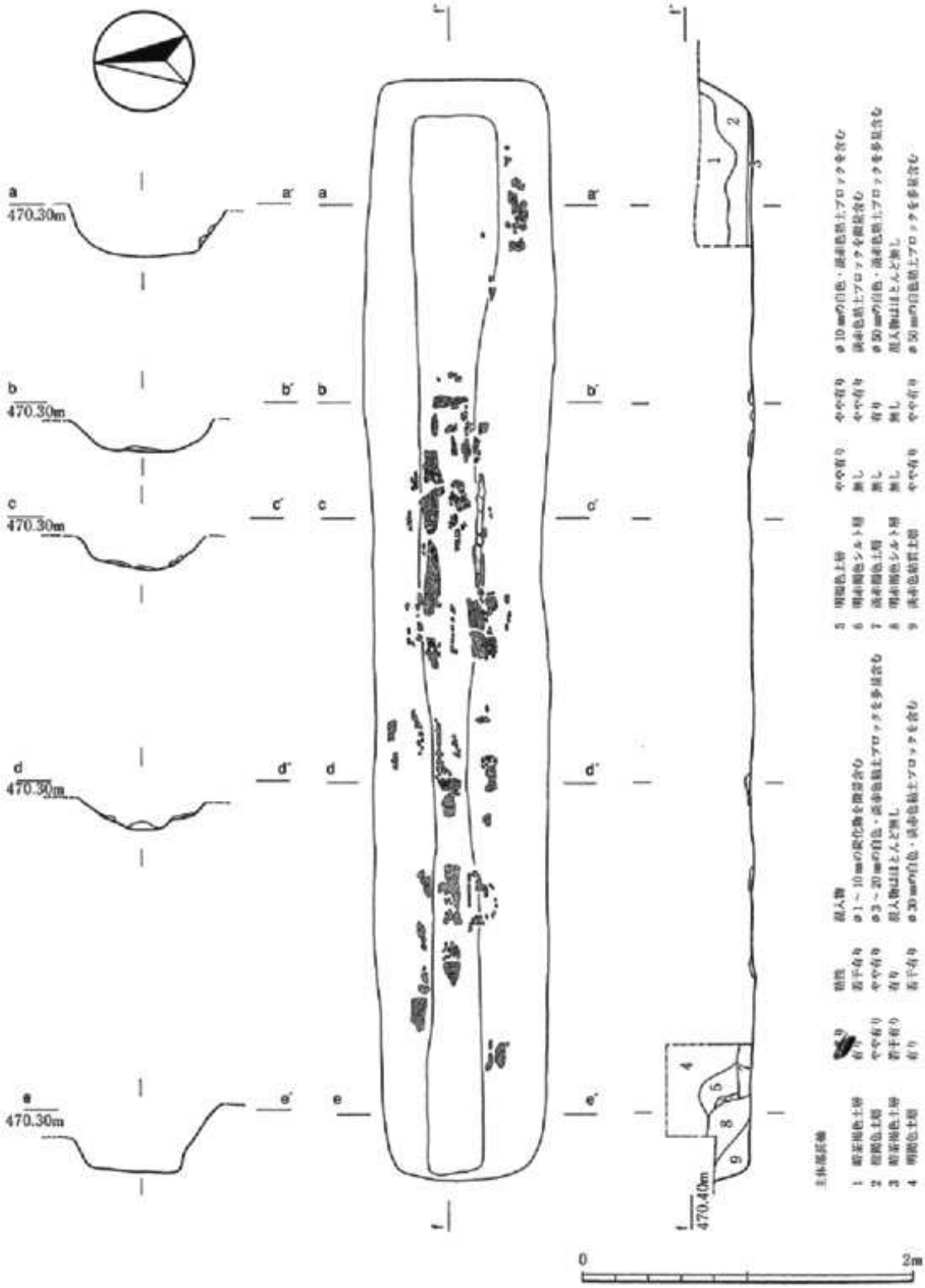
これらの状況を参考に木棺の形態を復原推定すると、長軸は、木棺設置痕の東下端から炭化材分布範囲の西限まで計測すると約5.78 mである。また木棺の外形の幅はすくなくとも東側で1.17 m以上、西側で1.0 m以上となる。木棺の種類についてこれ以上推測できる資料は検出できなかったが、おそらく割竹形もしくは舟形の木棺であったろう。

また、2箇所の主軸に直交する板材の存在から木棺内部には、仕切り板が存在していただろうということが推測可能である。仕切り板間の距離は約2.4 mである。

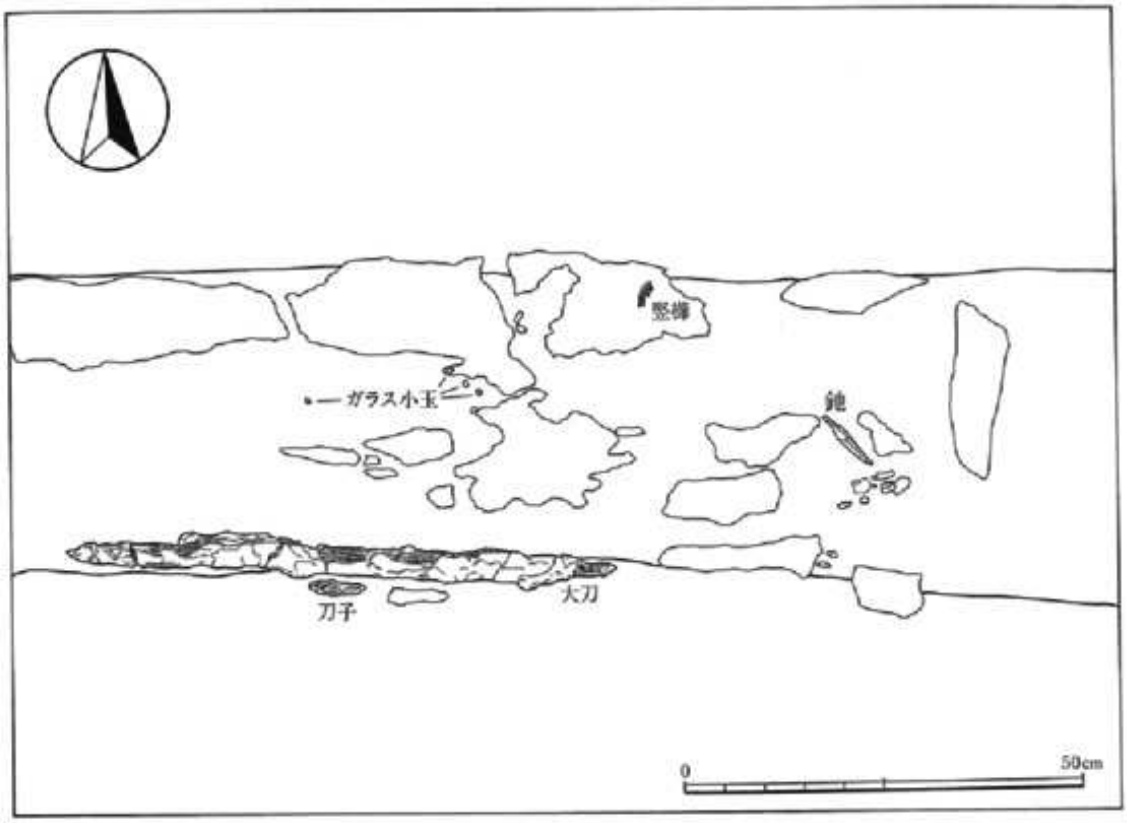
木棺の主軸方位は、N－91°－Eであり、頭位は、木棺の幅から考えると東方向と考えられる。

副葬品の出土状況

副葬品は、木棺の仕切り板によって囲われた空間内から出土した（第9図）。それ以外の場所からは出土しなかった。また、副葬品と炭化材との間には数ミリの土が介在するのみ



第8図　T－41(第106)号墳主体部平面図及びエレベーション図



第9図　T－41(第106)号墳主体部副葬品出土状況図

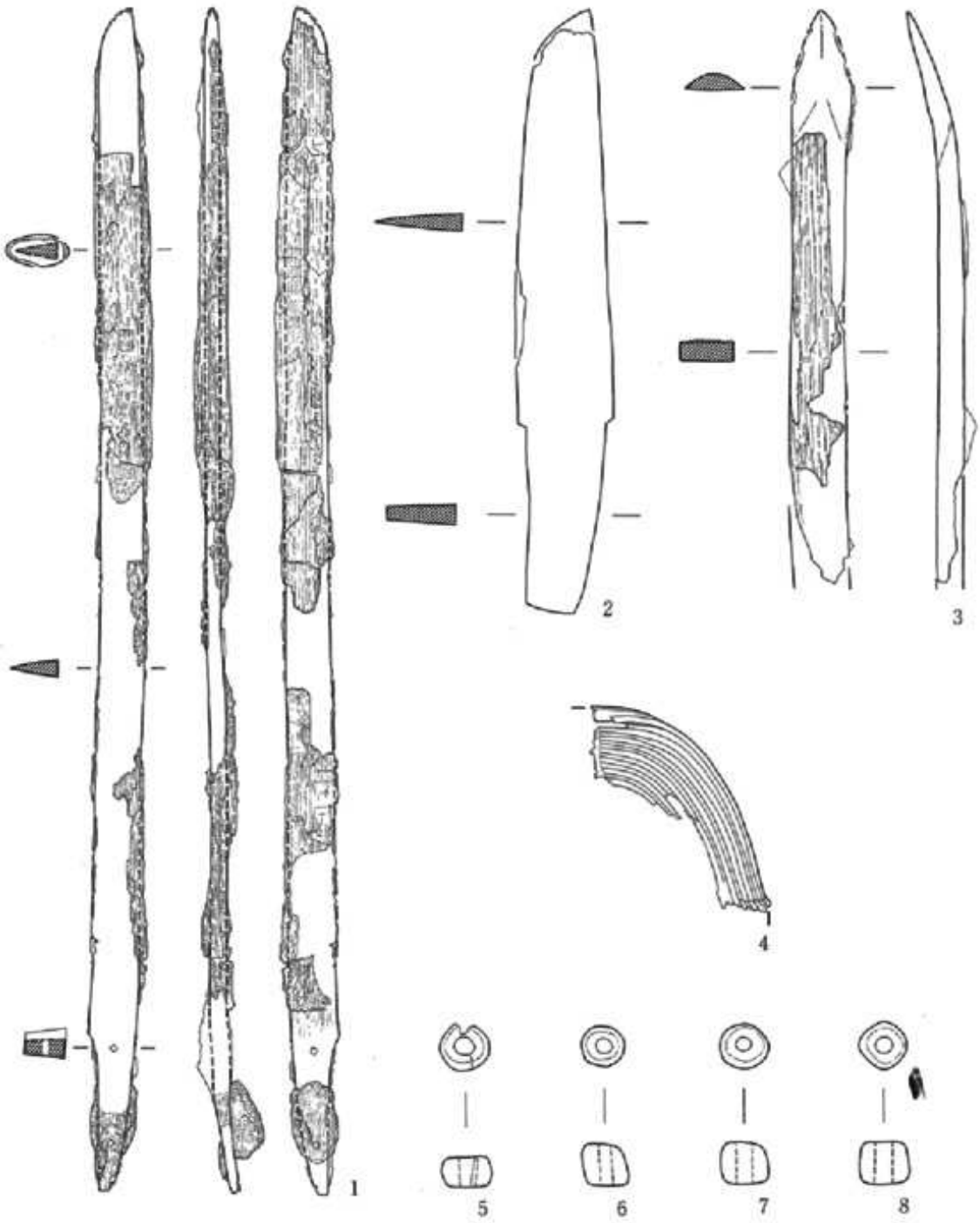
であるので、副葬品はすべて棺内遺物であろうと推測される。木棺の腐朽がいちじるく、土層の落ち込みなどを考慮すると遺物のすべてが原位置を保っているとは言い難い。ただし盗掘などの後世の撹乱行為が主体部まで到達していないことから、はなはだしい原位置からのズレはないと考えられる。

大刀と刀子は木棺下底部の南側から主軸に並行して出土した。大刀の鞘に接して刀子があった。ガラス小玉は4点出土したが、そのうち1点は2片に割れていた。1点のみが他のものから約0.7mはなれて出土したがその他の3点は集中していて、木棺設置痕のほぼ中央から出土した。また下底部の北側から竪櫛が1点、ガラス小玉の集中地点から北に約0.9mのところから出土した。これらの周囲には、ごく微量の赤色顔料の散布がみられた。

副　葬　品（第10図）

T－41（第106）号墳からは以下のものが出土した。

大刀－1　　竪櫛－1　　刀子－1　　ガラス小玉－4　　鉇－1



第10図　T－41(第106)号墳出土遺物実測図（1、S＝1/4　2～8、S＝1/1)

大刀[1]は残存長78.4㎝、重量733ｇで、鉾先先端がわずかに欠けている。等親は長さ59.4㎝、幅2.5㎝、背の厚さ0.9㎝の平造りである。茎は長さ9.0㎝だが、歪んでおり旧状を留めない。関は撫角関で、茎尻はいわゆる隅切尻とは反対側を切った形状を為している。断面形は刃側が狭い台形を為す。目釘孔は錆や木質により肉眼では観察出来ないが、X線写真にかすかに痕跡が見られる。鞘の木質が残っており、部分的に鞘本来の表面が残っている箇所がある。表面の残っている所には刃と直交する方向に、幅6㎜前後の帯状の筋が見られ、鞘木の上に帯状の有機質を巻いていた可能性がある。茎にも木質が残っているが、柄の旧状を知るには至らない。瘤状の木質は柄木にしては厚みがあるように思え、不明とせざるをえない。

刀子は残存長8.4㎝、重量5ｇ、刀身部は先端を欠き、長さ5.7㎝、関部は斜めに切り込まれた両関で、幅1.35㎝、茎部は長さ2.7㎝、幅は関付近で1.1㎝、茎尻で0.7㎝、刃側が狭い台形の断面を為している。

鉇は、残存長8.2㎝、重量4ｇ、先端から1.9㎝の所まで刃が造られている。刃は使い減りのためか左側が丸みが無く直線的である。柄部は幅0.8㎝、断面長方形で、上面に木質が残っており、部分的に朱が見られる。尻の部分は欠損し、さらに右方向に捻れている。

竪櫛はU字状に撓めた部分の¼ほどが残っている。表面に塗られた漆の皮膜だけが残り、中は空洞になっている。幅5㎜の中に、7、8本の筋が見られる。

ガラス小玉は4個出土した。法量は5が径0.7㎝、高さ0.4㎝、6が0.7㎝、0.6㎝、7が0.7㎝、0.6㎝、8が0.7㎝、0.6㎝である。色は全て青色である。

(1) 大刀の部分名称は、臼杵勲「古墳時代の鉄刀について」『日本古代文化研究』創刊号1984を参考とした。

時　　期

T－41（第106）号墳は、木棺の形状及び副葬品のセットから、5世紀前半～中葉の築造と考えられる。

第2節　鷹待場支群T－42（第186）号墳

T－42（第186）号墳は、1986年5月19日～9月18日に川西町教育委員会によって第1次調査がおこなわれ、1996年7月22日～8月9日に明治大学と川西町教育委員会との合同による第2次調査が行なわれた。本報告はこの第2次調査の報告である。

調査の目的

本古墳は、鷹待場支群のなかでは、T－41（第106）号墳と並ぶ最大規模の墳丘をもっている。しかし、第1次調査においては、本古墳の主体部が検出されなかった。また第1次調査において、墳丘の裾付近から底部穿孔壺（焼成前穿孔）が出土した。このことからT－41（第106）号墳と年代的に近接する可能性があり、また鷹待場支群の形成開始年代をしるうえで重要な所見が得られることが予測された。調査は主体部および第1次調査では不十分であった墳丘規模の確認を目的に計画、実施された。

立　　地

T－37号墳の立地する地点から、東にのびる尾根がやや南に方向を転換する地点にひとつの尾根の高まりがみられる。T－42（第186）号墳はこの尾根の変換点の高まりに立地し、付近には小規模な墳丘をもつT－19・20・21・22・23号墳がある。鷹待場支群中のひとつの古墳集中地点の盟主墳的な存在である。

墳　　丘

第1次調査において確認された墳丘の規模は以下のとおりである。第2次調査においては、墳丘の高さを除いて、墳丘の平面の規模という点においての所見の変更はなかった。

墳丘規模　南　北　　23 m　　東　西　22 m

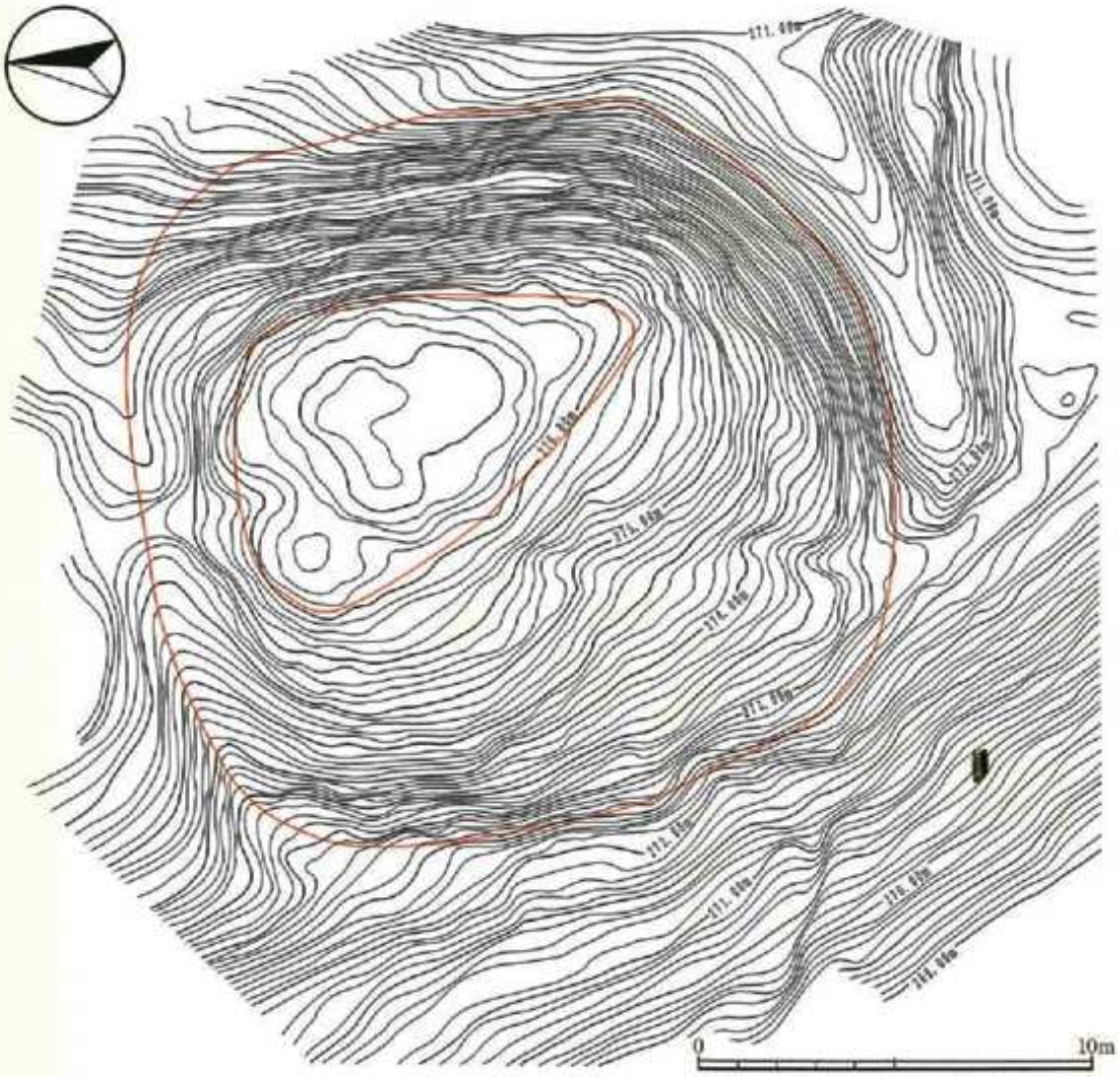
墳丘高　約5.15 m　（第2次調査のM調査区で確認された墳裾を基点として計測）

墳丘の形態は方墳である。墳丘斜面は無段である。

本古墳の墳丘において特筆すべき事項は、その盛土方法である。いままで、下小松古墳群の古墳の調査において部分的に観察され、そこから推定していた土手状の施設を使った

盛土方法が本古墳においては明瞭に観察された。したがって、そこから記述をはじめる。

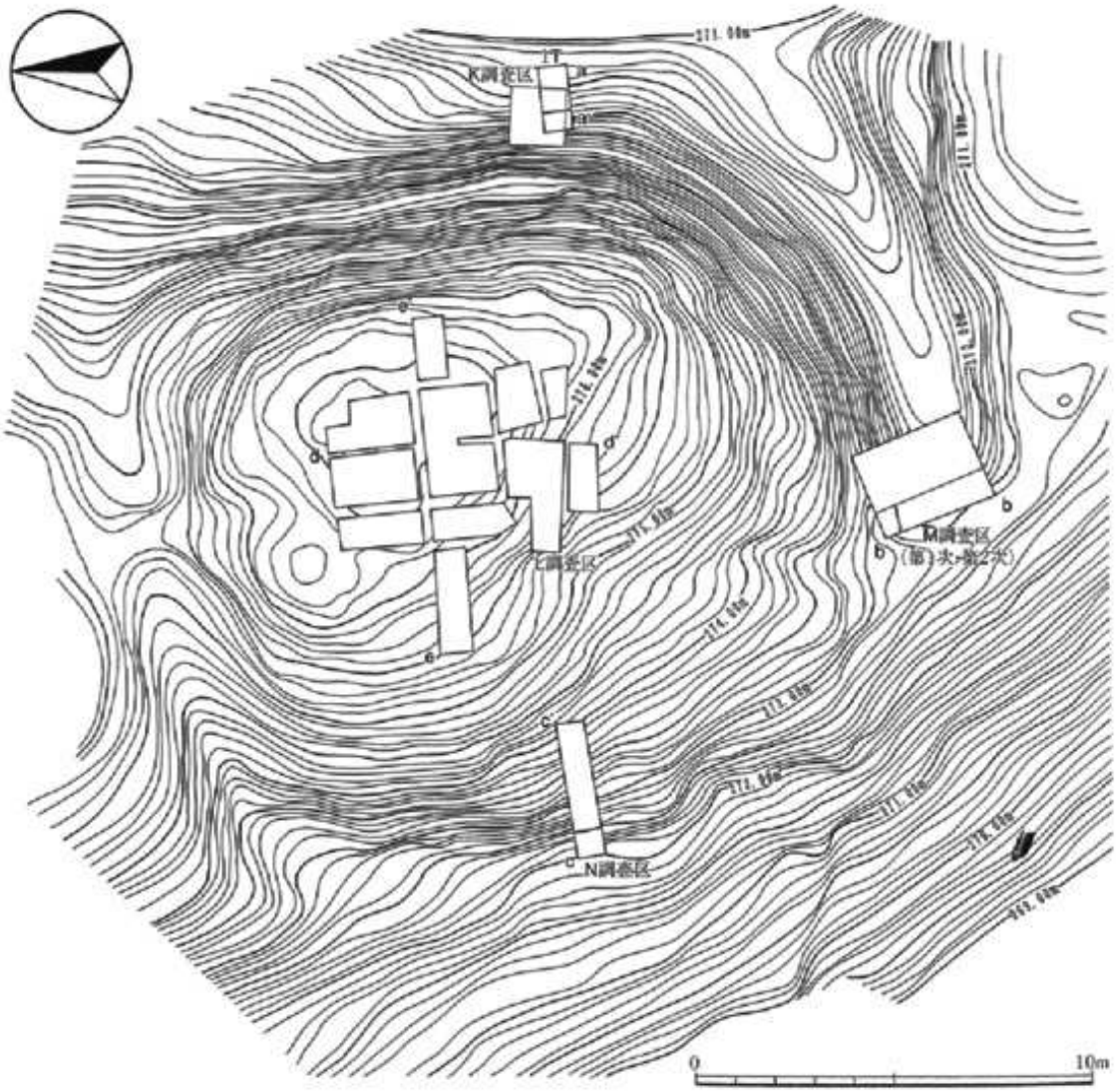
最初に第1次調査の調査区と第2次調査の調査区との関係を説明する。第1次調査においては墳頂にL調査区を設定したのみであった。そのため、墳頂平坦面の中心部分が未調査であった。第2次調査においては墳頂平坦面の東側の縁辺にほぼ並行するラインを基準にして、この墳頂平坦面に墳頂調査区を設定した。また調査の経過のなかでL調査区周辺に主体部の存在が予想されたので、この周囲にも調査区を設定した。また、第1次調査における墳丘裾部の認定に一部疑問があったので、かつてのK調査区に近接して1トレンチを設定し、N・M調査区は再発掘をおこなって、第1次調査での掘り下げ面をさらに半裁



第11図　T－42(第186)号墳墳丘測量図

してセクションの確認をおこなった。1トレンチに関しては第1次調査のK調査区とかなり重なり合ってしまったが、セクションから墳丘裾の確認をおこなえた。

墳頂平坦面の東西方向のセクションを観察すると、土手状の施設の存在が明瞭である(第17図)。墳頂平坦面の西側をみると、最初に盛土がなされているのは墳頂平坦面の周縁部分であることがわかる。59・58・57層によって小規模な高まりをつくり、さらに56層を盛ることによってこの高まりの規模を大型化させている。おそらくこの部分から西側は地山が急激に下降することから、次の55・54・53・52・51・50・49・48・47・46・45・44・43・42・41層の高まりを形成するための準備のための作業であろう。そして西側に55～



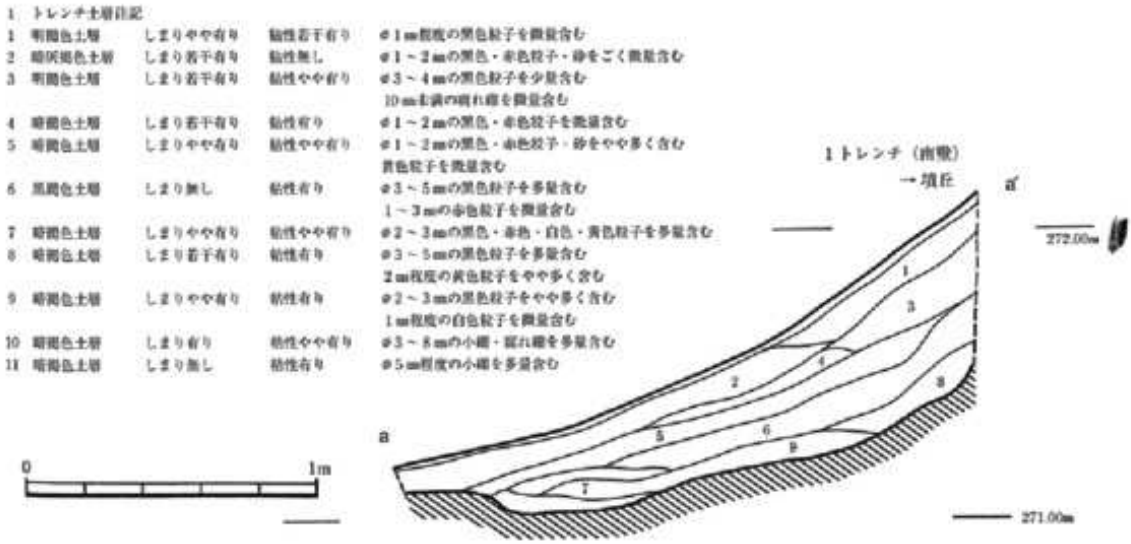
第12図　T－42(第186)号墳トレンチ配置図

41層によって形成された土手状の施設がつくられた段階では、東側の縁辺にも同様の土手状施設がつくられている。それが66・65・64・63・62・61層である。さらに北側にも同様な施設がつくられているのがわかる（第16図)。このようにして方墳の頂部の4辺のうち東西北の3辺に土手状の施設がつくらていることがわかる。ただし、南側にはこのような施設が調査区内ではみとめられなかった。南側から土を搬入したためと考えるのも一案であろうが、南北方向のセクションをみると土層のながれは北から南へとなっている。また南側は尾根筋の地形からみても下降方向であって、盛土を搬入するには適していない。

いずれにしてもこのように、土手状施設によって囲まれた内側の凹部に盛土を施し、その内部を充填していく工法をとって、墳丘を築造していることが看取される。

墳裾の確認のために設定した1トレンチでは、地山を浅く掘りくぼめて、盛土をおこなっているのが判明した。おそらくこの浅いくぼみは地割り線の一部であろう。3層以下が盛土である。

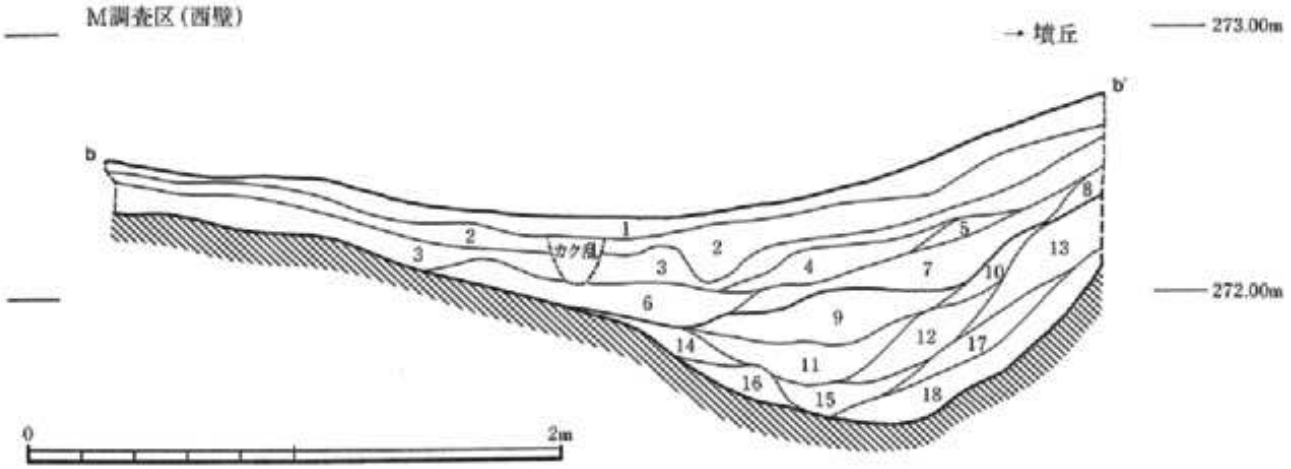
N調査区では、墳丘の崩落が著しかった。明らかに墳丘の盛土であると確認できるのは、38・37・36・35・34・33・32・31・30・29・28・27・26・25・24層である。この場合、38層の下端に木製の杭状のものが打ち込まれたのが炭化したものが検出されたが、38層までを盛土とするのであれば、この木杭は盛土の下端部に打ち込まれていたことになり、盛土の流れ止めの機能を果たしたのであろうか。今後の課題とするところである。墳裾自体は



1　トレンチ土層注記

1	明褐色土層	しまりやや有り	粘性若干有り	φ1m程度の黒色粒子を微量含む
2	暗灰褐色土層	しまり若干有り	粘性無し	φ1～2mmの黒色・赤色粒子・砂をごく微量含む
3	明褐色土層	しまり若干有り	粘性やや有り	φ3～4mmの黒色粒子を少量含む 10cm未満の暗れ褐を微量含む
4	暗褐色土層	しまり若干有り	粘性有り	φ1～2mmの黒色・赤色粒子を微量含む
5	暗褐色土層	しまりやや有り	粘性やや有り	φ1～2mmの黒色・赤色粒子・砂をやや多く含む 黄色粒子を微量含む
6	黒褐色土層	しまり無し	粘性有り	φ3～5mmの黒色粒子を多量含む 1～3mmの赤色粒子を微量含む
7	暗褐色土層	しまりやや有り	粘性やや有り	φ2～3mmの黒色・赤色・白色・黄色粒子を多量含む
8	暗褐色土層	しまり若干有り	粘性有り	φ3～5mmの黒色粒子を多量含む 2mm程度の黄色粒子をやや多く含む
9	暗褐色土層	しまりやや有り	粘性有り	φ2～3mmの黒色粒子をやや多く含む 1mm程度の白色粒子を微量含む
10	暗褐色土層	しまり有り	粘性やや有り	φ3～5mmの小礫・暗れ褐を多量含む
11	暗褐色土層	しまり無し	粘性有り	φ5mm程度の小礫を多量含む

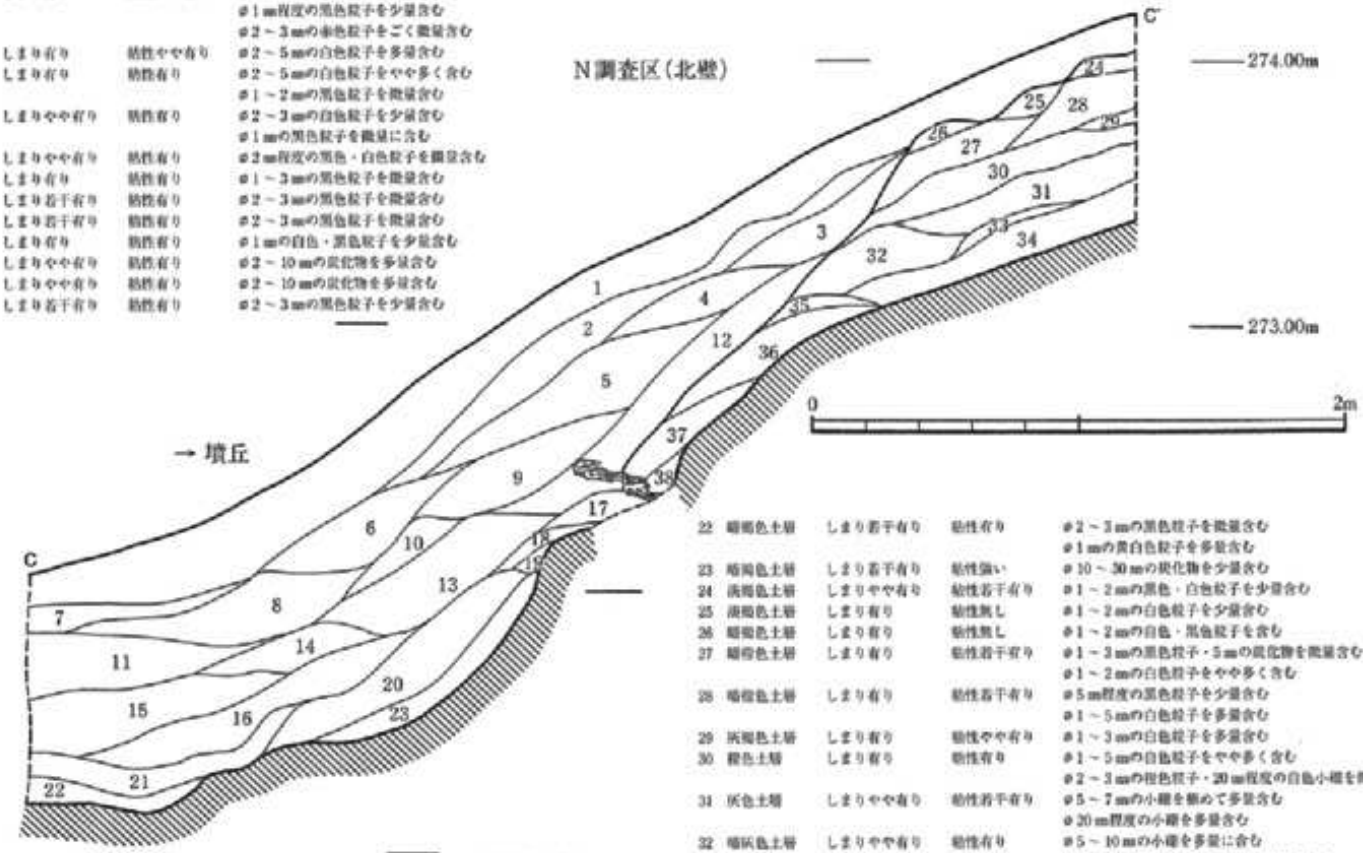
第13図　T－42(第186)号墳セクション図（1）



M調査区土層注記

1	表土層			
2	明黄褐色土層	しまり若干有り	粘性無し	φ2mm程度の白色・褐色粒子多量含む
3	明橙褐色土層	しまりやや有り	粘性無し	φ1～3mmの白色・褐色粒子多量含む
4	橙褐色土層	しまりやや有り	粘性若干有り	φ1～2mmの白色・褐色粒子多量含む
5	橙褐色土層	しまりやや有り	粘性若干有り	φ1～2mmの白色・褐色粒子多量含む 4層より堅め
6	黄褐色土層	しまり有り	粘性無し	φ1～10mmの白色粒子少量含む
7	橙褐色土層	しまり有り	粘性若干有り	φ1～3mmの白色粒子・炭化粒子少量含む
8	暗黄褐色土層	しまり有り	粘性無し	φ2mm程度の白色粒子含む
9	暗橙褐色土層	しまりやや有り	粘性やや有り	φ2mm程度の白色・赤色粒子少量含む φ1mm程度の炭化粒子多量含む
10	明黄褐色土層	しまりやや有り	粘性若干有り	φ2mm程度の白色・赤色粒子少量含む φ1mm程度の炭化粒子を少量含む
11	黒褐色土層	しまり無し	粘性有り	φ1～10mmの炭化粒子を多量含む φ3～20mmの焼れ礫を少量含む
12	暗橙褐色土層	しまり若干有り	粘性やや有り	φ1～5mmの炭化粒子を多量含む φ3mm程度の白色焼れ礫の粒子を多量含む
13	濃橙褐色土層	しまりやや有り	粘性やや有り	φ1～5mmの炭化粒子を少量含む φ3mmの程度の白色焼れ礫の粒子を多量含む
14	暗褐色土層	しまりやや有り	粘性若干有り	φ1～4mmの白色・黄色・褐色焼れ礫の粒子を多量に含む
15	暗褐色土層	しまり無し	粘性有り	焼れ礫とその粒子・炭化粒子を少量含む
16	暗橙褐色土層	しまり若干有り	粘性やや有り	φ1～5mmの白色焼れ礫の粒子を多量含む 炭化粒子少量含む
17	明橙褐色土層	しまりやや有り	粘性若干有り	φ1mm程度の焼れ礫の粒子を少量含む
18	暗褐色土層	しまり有り	粘性やや有り	φ1～3mmの焼れ礫の粒子を多量含む 部分的に木炭を炭化物含む

第14図　T－42(第186)号墳セクション図（2）



N録型区土層注記

1	表土層および現による攪乱			
2	褐色土層	しまり有り	粘性やや有り	φ2～5mmの白色粒子を多量含む 黒色粒子微量含む
3	褐色土層	しまり有り	粘性やや有り	φ2～5mmの白色粒子を多量含む φ1mm程度の黒色粒子を少量含む φ2～3mmの赤色粒子をごく微量含む
4	褐色土層	しまり有り	粘性やや有り	φ2～5mmの白色粒子を多量含む
5	褐色土層	しまり有り	粘性有り	φ2～5mmの白色粒子をやや多く含む φ1～2mmの黒色粒子を微量含む
6	褐色土層	しまりやや有り	粘性有り	φ2～3mmの白色粒子を少量含む φ1mmの黒色粒子を微量に含む
7	茶褐色土層	しまりやや有り	粘性有り	φ2mm程度の黒色・白色粒子を微量含む
8	褐色土層	しまり有り	粘性有り	φ1～3mmの黒色粒子を微量含む
9	暗褐色土層	しまり若干有り	粘性有り	φ2～3mmの黒色粒子を微量含む
10	暗褐色土層	しまり若干有り	粘性有り	φ2～3mmの黒色粒子を微量含む
11	暗褐色土層	しまり有り	粘性有り	φ1mmの白色・黒色粒子を少量含む
12	暗褐色土層	しまりやや有り	粘性有り	φ2～10mmの炭化物を多量含む
13	暗褐色土層	しまりやや有り	粘性有り	φ2～10mmの炭化物を多量含む
14	暗褐色土層	しまり若干有り	粘性有り	φ2～3mmの黒色粒子を少量含む
15	暗褐色土層	しまり若干有り	粘性有り	φ2～5mmの炭化物を多く含む φ2～3mmの橙色粒子を少量含む
16	暗褐色土層	しまり無し	粘性有り	φ5～10mmの炭化物を多量含む
17	暗褐色土層	しまり若干有り	粘性有り	φ3～20mmの炭化物を多量含む
18	暗橙色土層	しまりやや有り	粘性有り	φ20～30mmの白色粘土ブロックを少量含む φ1～3mmの白色粒子を多量に含む
19	淡橙色土層	しまり若干有り	粘性強い	
20	明褐色土層	しまり無し	粘性有り	φ1～2mmの黒色・白色粒子を微量含む
21	暗褐色土層	しまり無し	粘性有り	φ1mm程度の炭化物を極めて多量に含む
22	暗褐色土層	しまり若干有り	粘性有り	φ2～3mmの黒色粒子を微量含む φ1mmの黄白色粒子を多量含む
23	暗褐色土層	しまり若干有り	粘性強い	φ10～30mmの炭化物を少量含む
24	淡褐色土層	しまりやや有り	粘性若干有り	φ1～2mmの黒色・白色粒子を少量含む
25	淡褐色土層	しまり有り	粘性無し	φ1～2mmの白色粒子を少量含む
26	暗褐色土層	しまり有り	粘性無し	φ1～2mmの白色・黒色粒子を含む
27	暗橙色土層	しまり有り	粘性若干有り	φ1～3mmの黒色粒子・5mmの炭化物を微量含む φ1～2mmの白色粒子をやや多く含む
28	暗橙色土層	しまり有り	粘性若干有り	φ5mm程度の黒色粒子を少量含む φ1～5mmの白色粒子を多量含む
29	灰褐色土層	しまり有り	粘性やや有り	φ1～3mmの白色粒子を多量含む
30	橙色土層	しまり有り	粘性有り	φ1～5mmの白色粒子をやや多く含む φ2～3mmの橙色粒子・20mm程度の白色小礫を微量含む
31	灰色土層	しまりやや有り	粘性若干有り	φ5～7mmの小礫を極めて多量含む φ20mm程度の小礫を多量含む
32	暗灰色土層	しまりやや有り	粘性有り	φ5～10mmの小礫を多量に含む やや上部に30mm程度の礫の偏りがみられる
33	灰褐色土層	しまり有り	粘性有り	φ1～3mmの白色粒子を少量含む φ10mmの小礫を微量含む
34	橙色土層	しまりやや有り	粘性有り	φ1mmの白色粒子を微量含む
35	灰褐色土層	しまりやや有り	粘性有り	φ1～2mmの白色粒子をごく微量含む
36	橙色土層	しまり有り	粘性有り	φ1～2mmの白色粒子を少量含む
37	暗褐色土層	しまり有り	粘性有り	φ3～10mmの炭化物を多量含む φ1～2mmの白色粒子を少量含む
38	暗褐色土層	しまり無し	粘性有り	φ1～2mmの黒褐色粒子を少量含む

第15図　T－42(第186)号墳セクション図(3)

標高271.40 m付近にもとめるのが妥当である。

M調査区では、地山を掘り込んで墳裾を整形しているのがみてとれた。したがって、18層も含んでそれ以上のものはすべて崩落土である。第1次調査において問題とされたブリッジの存在は、古墳築造当初からのものではなく、後世の山道に関わる造作であろう。

1トレンチ・N・M調査区で確認された墳裾のレベルは、1トレンチでは標高271.10 m、N調査区では標高271.40 m, M調査区では標高271.50 mである。N調査区とM調査区とはほぼ等しく0.10 mの誤差である。またこの2者の平均値から1トレンチの墳裾のレベルは0.35 mの開きがある。自然地形の傾斜を考慮するとほぼ妥当であろうと判断した。

主　体　部

第1次調査では、本古墳の主体部は検出されなかった。第2次調査では、L調査区周辺の精査と墳頂平坦面中央部の調査を行なったが、主体部は検出されなかった。またそれにかかわるとみられる副葬品の一部もまた出土しなかった。これに関しては調査団内でいくつかの意見がでた。今後の参考のため、その要旨を記しておく。

1　主体部はかつて存在したが、墳丘の崩落・流れによって消滅した。

2　墳頂平坦面の未調査部分に主体部が存在する。

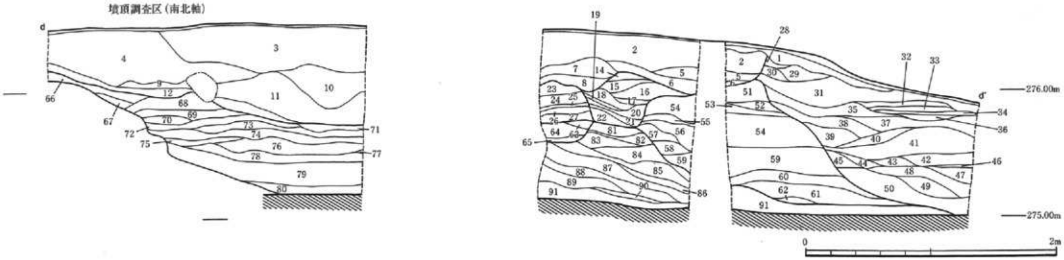
3　墳頂の調査区で認められた土手状施設によって囲まれた凹部の中央付近（凹部に最初の盛土がされている場所）に木棺や遺構を伴わない簡素な埋葬がされた。

4　もともと、埋葬がされなかった。

このように記述すると、T－42（第186）号墳がそもそも古墳であるのかという批判もでてくるであろう。それについては、次の2点を掲げてT－42（第186）号墳が古墳であるという立場を保持したい。

1　2トレンチの墳丘崩落土からは、微量ではあるが土師器が出土している。

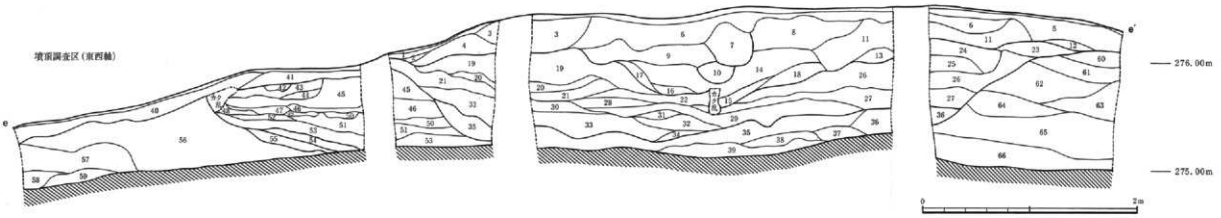
2　古墳時代よりも後世の遺物はまったく出土していない。また、この墳丘を利用したとみられるような痕跡（柱穴・焼土・石造物）は認められなかった。



墳頂南北土層注記

1	明褐色土層	しまり有り	粘性無し	φ1㎜の小礫を含む
2	明褐色土層	しまり有り	粘性若干有り	φ5㎜の白色・青色粒子を少量含む
3	暗褐色土層	しまり有り	粘性若干有り	φ1～8㎜の白色粘土を少量含む　φ2～3㎜の黒色粒子を少量含む
4	黄白色シルト層	しまりやや有り	粘性若干有り	茶褐色ブロックを極めて多量含む　φ5～10㎜の灰色粒子を少量含む　φ3～10㎜の白色粘土粒子を多量含む
5	茶褐色土層	しまりやや有り	粘性若干有り	φ5㎜の白色粒子を少量含む
6	茶褐色土層	しまり有り	粘性若干有り	φ1～3㎜の白色・青色粒子を少量含む
7	白色シルト層	しまり有り	粘性無し	φ5～20㎜の白色・橙色粒子を多量含む
8	白色シルト層	しまり有り	粘性有り	φ5～20㎜の白色・橙色粒子を中量含む
9	茶褐色土層	しまり有り	粘性有り	黄白色シルトを少量含む　φ2㎜程度の白色粒子を微量含む
10	褐色土層	しまり有り	粘性やや有り	φ3～10㎜の灰色粒子を少量含む　φ3～5㎜の桃色粒子を微量含む
11	褐色土層	しまりやや有り	粘性若干有り	φ3～10㎜の白色粘土粒子を多量含む　φ3～10㎜の灰色粒子を少量含む　φ3～5㎜の桃色粒子を微量含む
12	茶褐色土層	しまり有り	粘性有り	φ2～5㎜の白色粘土粒子・灰色粒子・φ4㎜程度の黒色粒子を少量含む
13	黄白色シルト層	しまりやや有り	粘性やや有り	φ3～5㎜の灰色粘土粒子をやや多く含む　φ3～5㎜の白色粘土粒子・φ10㎜程度の茶褐色粒子を少量含む
14	明茶褐色土層	しまり有り	粘性若干有り	φ3㎜程度の白色・青色粒子を少量含む
15	明褐色シルト層	しまりやや有り	粘性無し	φ1～5㎜の白色粒子を含む
16	黄色シルト層	しまり若干有り	粘性無し	φ1～5㎜の白色粒子を含む
17	茶褐色シルト層	しまり若干有り	粘性無し	φ1～5㎜の白色粒子を含む
18	茶褐色シルト層	しまりやや有り	粘性無し	φ1～5㎜の白色粒子を少量含む
19	明茶褐色シルト層	しまりやや有り	粘性無し	φ1～5㎜の白色粒子を含む
20	橙色シルト層	しまりやや有り	粘性無し	φ1～5㎜の白色粒子を含む
21	明褐色シルト層	しまり若干有り	粘性無し	φ1～5㎜の白色粒子を含む
22	明褐色シルト層	しまりやや有り	粘性無し	φ1～5㎜の白色粒子を含む
23	白色シルト層	しまり有り	粘性無し	橙色～青色粘土ブロックで形成される層
24	白色シルト層	しまり有り	粘性無し	φ10㎜程度の青色・白色・橙色粘土ブロックを中量含む　炭化粒子を少量含む
25	淡赤色シルト層	しまり有り	粘性無し	φ10㎜程度の青色・白色・橙色粘土ブロックを中量含む　炭化粒子を少量含む
26	白色シルト層	しまりやや有り	粘性無し	φ10㎜程度の青色・白色・橙色粘土ブロック・炭化粒子を少量含む
27	淡黄色層	しまり若干有り	粘性無し	φ10㎜程度の青色・白色・橙色粘土ブロック・炭化粒子を少量含む　淡赤色部分有り
28	明白褐色土層	しまり有り	粘性無し	φ20㎜の茶色・白色粘土ブロックを含む
29	淡赤褐色土層	しまりやや有り	粘性無し	白色シルト、粘土ブロック・炭化粒子を含む
30	淡赤褐色土層	しまりやや有り	粘性無し	粘土ブロック・炭化粒子を含む
31	淡黄色シルト層	しまりやや有り	粘性やや有り	φ30㎜の粘土ブロックを多量含む
32	茶褐色土層	しまり有り	粘性やや有り	φ50㎜の白色・茶色粘土を多量含む
33	淡赤色シルト層	しまり有り	粘性やや有り	φ5㎜の白色粒子・炭化粒子を含む
34	白色シルト層	しまりやや有り	粘性無し	φ5㎜の白色粒子を含む
35	淡茶褐色土層	しまり有り	粘性やや有り	φ30㎜の粘土ブロックを多量含む
36	白色シルト層	しまり若干有り	粘性無し	φ10～20㎜の粘土ブロックを含む
37	淡赤色シルト層	しまり若干有り	粘性無し	φ10㎜程度の粘土ブロック・φ10㎜の炭化粒子を少量含む
38	淡赤色シルト層	しまり有り	粘性無し	φ50㎜の粘土ブロック・φ5㎜の炭化粒子を含む
39	橙色シルト層	しまり若干有り	粘性無し	φ2㎜の炭化粒子を少量含む
40	茶褐色土層	しまり有り	粘性やや有り	φ50㎜の粘土ブロックを多量含む
41	淡橙色シルト層	しまりやや有り	粘性無し	φ5㎜の炭化粒子・φ10㎜程度の灰色ブロックを中量含む
42	淡赤色土層	しまり有り	粘性無し	φ20㎜の粘土ブロックを多量含む　φ2㎜炭化粒子を少量含む
43	淡赤色土層	しまり有り	粘性やや有り	φ20㎜の粘土ブロックを多量含む
44	淡橙色シルト層	しまりやや有り	粘性無し	φ20㎜の粘土ブロック・φ2㎜の炭化粒子を少量含む
45	淡赤色シルト層	しまりやや有り	粘性無し	φ2㎜の炭化粒子を含む
46	白色シルト層	しまり若干有り	粘性無し	φ10㎜の灰色ブロックを少量含む
47	淡赤色土層	しまりやや有り	粘性無し	φ5㎜の炭化粒子を少量含む
48	黄褐色シルト層	しまりやや有り	粘性無し	φ10㎜の炭化粒子を含む
49	黄茶褐色シルト層	シルトやや有り	粘性無し	φ2㎜の炭化粒子を微量含む
50	淡赤色土層	しまり有り	粘性やや有り	φ50㎜程度の粘土ブロックを多量含む
51	淡橙色シルト層	しまり有り	粘性無し	φ20㎜の粘土ブロックを多量含む
52	淡赤色シルト層	しまりやや有り	粘性無し	φ50㎜の粘土ブロックを多量含む　φ1㎜の炭化粒子を少量含む
53	橙色シルト層	しまりやや有り	粘性無し	φ50㎜の粘土ブロックを多量含む　φ1㎜の炭化粒子を少量含む
54	褐色シルト層	しまり若干有り	粘性無し	φ40㎜の白色ブロックを多量含む　φ20㎜橙色ブロックを少量含む
55	淡赤色シルト層	少量若干有り	粘性無し	φ30㎜の白色・橙色ブロックを含む
56	褐色シルト層	しまり若干有り	粘性無し	φ60㎜の白色・橙色ブロックを多量含む
57	白色シルト層	しまり若干あり	粘性無し	φ10～50㎜の白色・橙色ブロックを多量含む
58	淡赤色シルト層	しまり若干有り	粘性無し	φ10～50㎜の白色・橙色粘土ブロックを含む
59	白色シルト層	しまり無し	粘性無し	φ10㎜の青色粒子を少量含む
60	茶褐色土層	しまり有り	粘性やや有り	φ50㎜程度の赤色粘土ブロックを多量含む
61	淡赤色シルト層	しまり若干有り	粘性若干有り	φ30㎜の粘土ブロックを中量含む
62	淡赤色シルト層	しまり有り	粘性有り	φ50㎜程度の赤色粘土ブロックを多量含む
63	淡赤色シルト層	しまり若干有り	粘性無し	φ20㎜程度の白色・橙色粘土ブロックを含む　炭化粒子を含む
64	赤色シルト層	しまりやや有り	粘性無し	φ5㎜程度の橙色粘土を少量含む　炭化粒子を含む
65	淡赤色シルト層	しまり若干有り	粘性無し	φ20㎜程度の橙色粘土ブロックを含む　炭化粒子を含む
66	黄白色シルト層	しまり無し	粘性若干有り	赤白色シルトを部分的に含む　φ2～3㎜の白色粘土粒子を少量含む　φ5㎜程度の灰色粒子を少量含む
67	暗黄白色シルト層	しまりやや有り	粘性有り	φ2～3㎜の白色粘土粒子・灰色粒子を少量含む
68	黄白色シルト層	しまり若干有り	粘性若干有り	φ5～10㎜の灰色粒子を多量含む　φ2～3㎜の白色粒子を少量含む　φ10㎜以上の茶褐色ブロックを多量含む
69	茶褐色土層	しまりやや有り	粘性やや有り	φ5～8㎜の灰色粒子・φ2～3㎜の白色粘土粒子・黄白色シルトを多量含む
70	赤白色シルト層	しまり無し	粘性無し	φ2～5㎜の白色粒子を少量含む　φ5㎜程度の茶色粒子を微量含む
71	白色粘土層	しまり有り	粘性有り	茶褐色土を部分的に含む　周囲は暗赤色を呈す
72	暗赤色粘土層	しまり有り	粘性有り	φ2～3㎜の白色粒子をやや多く含む　φ2㎜程度の黒色粒子を微量含む　茶褐色土がブロック状に混入
73	茶褐色粘質土層	しまり有り	粘性有り	φ5～10㎜の白色粘土粒子を多量含む　φ2～3㎜の黒色粒子を微量含む
74	茶白色シルト層	しまり若干有り	粘性若干有り	φ10㎜程度の灰色粒子・φ20㎜の程度の茶褐色ブロックを多量含む　φ20㎜程度の白色粘土ブロックを含む
75	茶褐色粘質土層	しまり有り	粘土有り	φ5～8㎜の灰色粒子を少量含む　φ5㎜程度の白色粘土粒子を微量含む
76	黄白色シルト層	しまり有り	粘性若干有り	φ5～10㎜の灰色粒子を多量含む　茶褐色ブロックをやや多く含む
77	赤白色シルト層	しまり無し	[illegible]性有り	φ1～2㎜の白色粒子を微量含む　黄白色シルトを少量含む　茶褐色土を部分的に少量含む
78	黄白色シルト層	しまり有り	粘性若干有り	φ5～10㎜の灰色粒子を多量含む　茶褐色ブロックを多量含む
79	黄白色シルト層	しまり有り	粘性若干有り	φ5～10㎜の灰色粒子を多量含む　茶褐色ブロックを極めて多量含む
80	暗茶褐色粘質土層	しまり有り	粘性有り	φ30～80㎜の茶色・白色粘土をブロック状に含む　黄白色・黄白色シルトを多量含む
81	淡赤色シルト層	しまり無し	粘性無し	炭化粒子・φ5㎜程度の青色粘土ブロックを少量含む
82	白色シルト層	しまり無し	粘土無し	炭化粒子・φ5㎜程度の青色粘土ブロックを少量含む
83	淡赤色シルト層	しまり無し	粘性無し	炭化粒子・φ5㎜程度の青色粘土ブロックを少量含む
84	白色シルト層	しまり無し	粘性無し	φ10㎜の青色粒子を少量含む
85	淡赤色シルト層	しまり若干有り	粘性無し	φ10㎜の青色・橙色粒子を少量含む
86	淡黄色シルト層	しまり若干有り	粘性無し	φ5㎜の青色粒子を少量含む
87	淡赤色シルト層	しまり若干有り	粘性無し	φ5㎜の橙色粒子を少量含む
88	白色シルト層	しまり若干有り	粘性無し	φ15㎜の橙色粒子を少量含む
89	淡赤色シルト層	しまり無し	粘性無し	φ10㎜の青色・白色・橙色粘土ブロックを多量含む
90	白色シルト層	しまり無し	粘性無し	φ15㎜の橙色粒子を少量含む
91	赤色土層	しまり若干有り	粘性やや有り	粘土ブロックを極めて多量含む

第16図　T－42(第186)号墳セクション図（4）



1	表土層			
2	明黄色土層			
3	褐色土層	しまり有り	粘性若干あり	φ 5mm程度の白色・青色粒子を少量含む
4	白色シルト層	しまりやや有り	粘性無し	φ 10mm程色粒子を少量含む
5	褐色土層			炭土に近い
6	明黄色土層	しまり有り	粘性無し	φ 5mmの白色・青色粒子少量含む
7	暗茶褐色土層	しまり有り	粘性若干有り	φ 5mmの白色・青色粒子少量含む
8	暗黄色土層	しまり有り	粘性若干有り	φ 2～4mmの白色・青色粒子を少量含む
9	茶褐色土層	しまり有り	粘性若干有り	φ 2～4mmの白色・青色粒子を含む
10	明茶褐色土層	しまり若干あり	粘性若干有り	混入物は非常に少ない
11	暗茶褐色土層	しまり有り	粘性やや有り	φ 2～4mmの白色・青色粒子を少量含む
12	明茶褐色シルト層	しまりやや有り	粘性若干有り	φ 5mmの白色粒子を含む
13	茶褐色土層	しまり有り	粘性若干有り	φ 1～3mmの白色・青色粒子を少量含む
14	明茶褐色土層	しまり有り	粘性若干有り	φ 3～20mmの白色・青色・粒色粒子を少量含む
15	明黄色土層	しまり若干あり	粘性若干有り	φ 2～3mmの白色・青色粒子を少量含む
16	淡黄色シルト層	しまり若干有り	粘性無し	φ 2～5mmの白色・青色・粒色粒子を少量含む
17	淡黄色シルト層	しまり若干有り	粘性無し	φ 3mm程度の青色粒子・φ 3～30mmの白色粒色粒子を多量含む
18	明黄色土層	しまり若干あり	粘性若干有り	φ 2mm程度の白色・黄色粒子少量含む
19	淡黄褐色シルト層	しまりやや有り	粘性無し	φ 2～20mmの白色・青色・粒色粒子を多量含む
20	淡黄褐色シルト層	しまりやや有り	粘性無し	φ 2～10mmの白色・青色・粒色粒子を多量含む
21	白色シルト層	しまりやや有り	粘性無し	φ 2～5mmの白色・青色・粒子を多量含む
22	粘土ブロック層	白色・粒色粘土ブロックにより形成される層		
23	白色シルト層	しまり無し	粘性無し	φ 30mmの粒色粒子・φ 5mmの白色粒子を多量に含む
24	明褐色シルト層	しまり若干有り	粘性若干有り	φ 20mmの白色・粒色粒子を多量に含む
25	茶褐色シルト層	しまり有り	粘性若干有り	φ 10mmの白色・粒色粒子を中量含む
26	白色シルト層	しまり無し	粘性無し	φ 3～20mmの白色・青色・粒色粒子を含む
27	淡赤色シルト層	しまり無し	粘性無し	φ 60mmの粒色粒子を多量含む
28	褐色土層	しまり有り	粘性若干有り	φ 30mmの粒色粒子・φ 10mmの白色粒子多量含む
29	白色シルト層	しまり無し	粘性無し	φ 20青色粒子・多粒子少量含む
30	淡赤色シルト層	しまりやや有り	粘性無し	φ 30mm程度の粒色粒子含む
31	淡赤色シルト層	しまり無し	粘性無し	混入物は極めて少ない
32	白色シルト層	しまり無し	粘性無し	φ 3mm程度の青色粒子・炭化粒子少量含む
33	赤色シルト層	しまり無し	粘性無し	粒色ブロックを多量含む
34	粒色～赤色ブロックにより形成される層			
35	白色シルト層	しまり無し	粘性無し	φ 10mmの白色・粒色ブロックを多量含む
36	白色シルト層	しまりやや有り	粘性無し	粒色ブロック・青色粒子を少量含む
37	白色シルト層	しまりやや有り	粘性無し	粒色・白色ブロックを多量含む
38	白色シルト層	しまり若干有り	粘性無し	白色・青色・粒子を少量含む
39	白色シルト層	しまりやや有り	粘性無し	粒色ブロックを極めて多く含む
40	白色シルト層	しまり有り	粘性無し	炭土に近い
41	黄白色シルト層	しまりやや有り	粘性無し	φ 20mm程度の粘土ブロック・小礫を少量含む
42	淡黄色シルト層	しまりやや有り	粘性無し	φ 50mm程度の灰色ブロック・粘土ブロックを少量含む
43	粒褐色土層	しまりやや有り	粘性やや有り	φ 50mmの粘土ブロック・φ 5mmの白色ブロック・炭化粒子を多量含む
44	淡粒色シルト層	しまり若干有り	粘性若干有り	φ 20mmの灰色ブロック・粘土ブロック・炭化粒子を含む
45	淡黄色シルト層	しまり無し	粘性無し	φ 10mmの青色ブロック・φ 50mmの粒色ブロックを含む
46	淡粒色シルト層	しまり若干あり	粘性若干有り	φ 20mmの灰色ブロック・粘土ブロック・炭化粒子を含む
47	白色シルト層	しまり若干有り	粘性無し	φ 20mmの灰色ブロック・粘土ブロック・炭化粒子を少量含む
48	淡黄色シルト層	しまり若干有り	粘性無し	φ 5mmの黒色・青色・粒色粒子を少量含む
49	淡赤色土層	しまり有り	粘性やや有り	φ 50mmの粘土ブロックを多量含む
				φ 1mm程度の炭化粒子を微量含む
50	淡粒色シルト層	しまり若干有り	粘性若干有り	φ 5mm程度の炭化粒子・灰色ブロックを少量含む
51	白色シルト層	少量若干有り	粘性無し	φ 5mmの黒色・青色・粒色粒子を少量含む
52	黄白色シルト層	しまり若干有り	粘性無し	φ 5mmの黒色・青色・粒色粒子を少量含む
53	白色シルト層	しまり若干有り	粘性無し	φ 5mmの青色粒子・黒色ブロックを多量含む
54	褐色土層	しまり有り	粘性無し	φ 50mm程度の粘土ブロックと施山と同一した層
55	淡粒色土層	しまり有り	粘性無し	φ 30mm程度の粘土ブロックを多量含む
56	茶褐色土層	しまり有り	粘性やや有り	多量の粘土ブロックの中に施山と同一の土が混在した層
57	淡茶褐色土層	しまり有り	粘性やや有り	多量の粘土ブロックの中に施山と同一の土が混在した層
58	淡茶褐色土層	しまり有り	粘性若干有り	多量の粘土ブロックの中に施山と同一の土が混在した層
				57層より粘土ブロックの割合がおおい
59	茶褐色土層	しまり有り	粘性若干有り	粘土ブロックを極めて多量に含む
60	暗粒色シルト層	しまりやや有り	粘性無し	粒色ブロック・φ 5mmの白色粒子を含む
61	淡粒色シルト層	しまりやや有り	粘性無し	粒色ブロック・φ 5mmの白色粒子を含む　礫を多量含む
62	明黄色シルト層	しまりやや有り	粘性無し	粒色ブロック・φ 5mmの白色粒子を含む
63	明黄色シルト層	しまりやや有り	粘性無し	粒色粒子・φ 5mmの白色粒子を含む
64	明黄色シルト層	しまりやや有り	粘性無し	粒色粒子・φ 5mmの白色粒子を多量含む
65	明黄色シルト層	しまりやや有り	粘性無し	粒色粒子・φ 5mmの白色粒子を含む
66	淡黄色粘質土層	しまりやや有り	粘性有り	礫を少量含む

第17図　T－42(第186)号墳セクション図 (5)

第3節　鷹待場支群T－9号墳

T－9号墳の調査は、1997年8月18日～9月5日に明治大学と川西町教育委員会とによって行われた。

調査の目的

T－9号墳は、鷹待場支群に2基ある前方後円墳のうち最も形の整った前方後円墳である。また、その立地の上からも特異な存在である。鷹待場支群における前方後円墳の出現が小森山支群のそれと時間的にどのような関係にあるのかという点もまた問題であった。

このような複数の問題群に対する資料を得るために、T－9号墳の調査が計画、実施された。

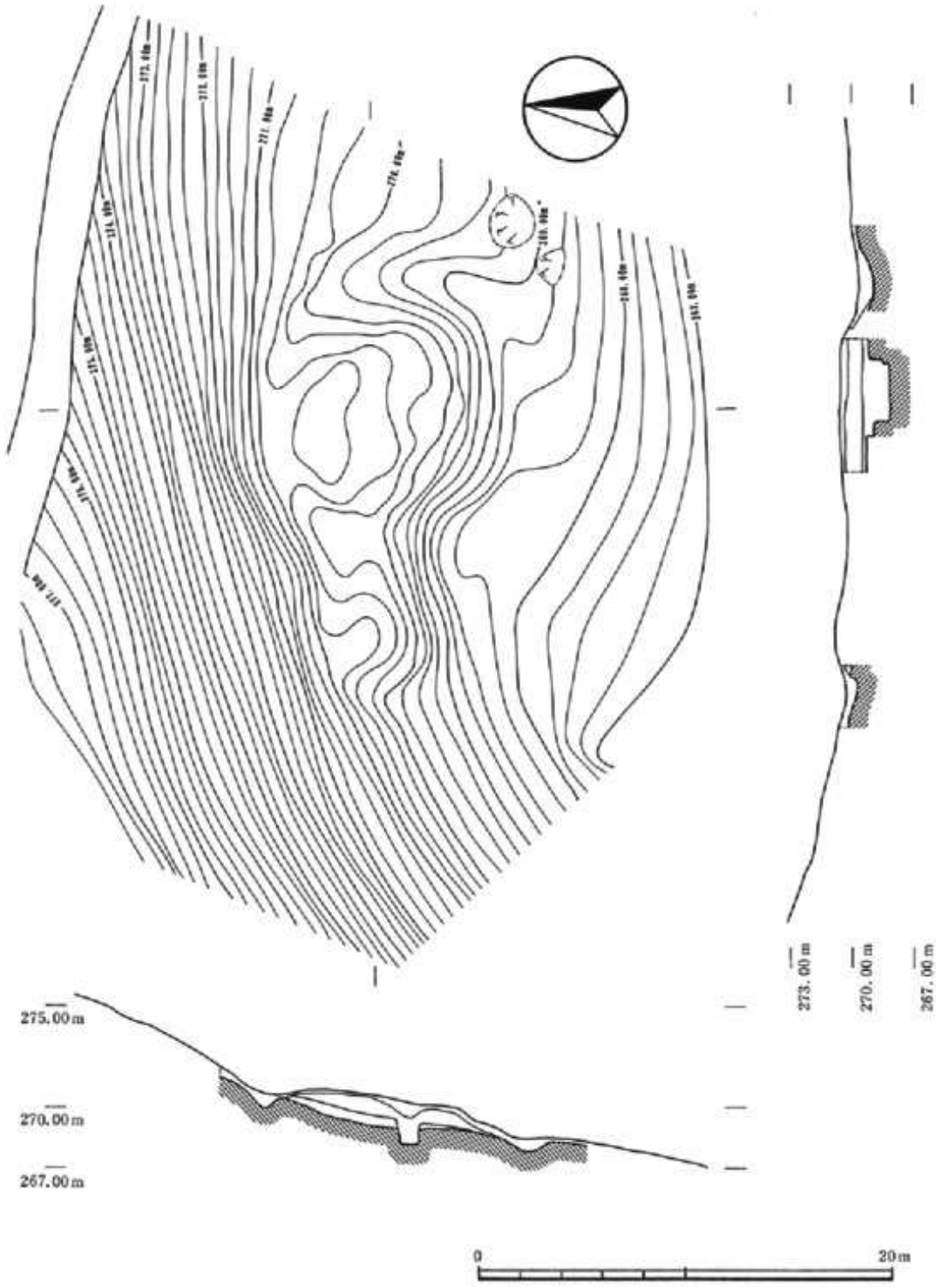
立　　地

T－9号墳は、古墳が尾根筋に集中している地点の、とりわけT－1・2・3・4・5・6・7・8号墳が所在するあたりの南側斜面にわずかに形成された平坦面に位置する。このような、尾根筋に方墳・円墳群が立地しその斜面に前方後円墳が築造されるという景観は小森山支群においてもK－16・17・18・19・20・21号墳付近にみられる（K－21号墳は前方後円墳）。

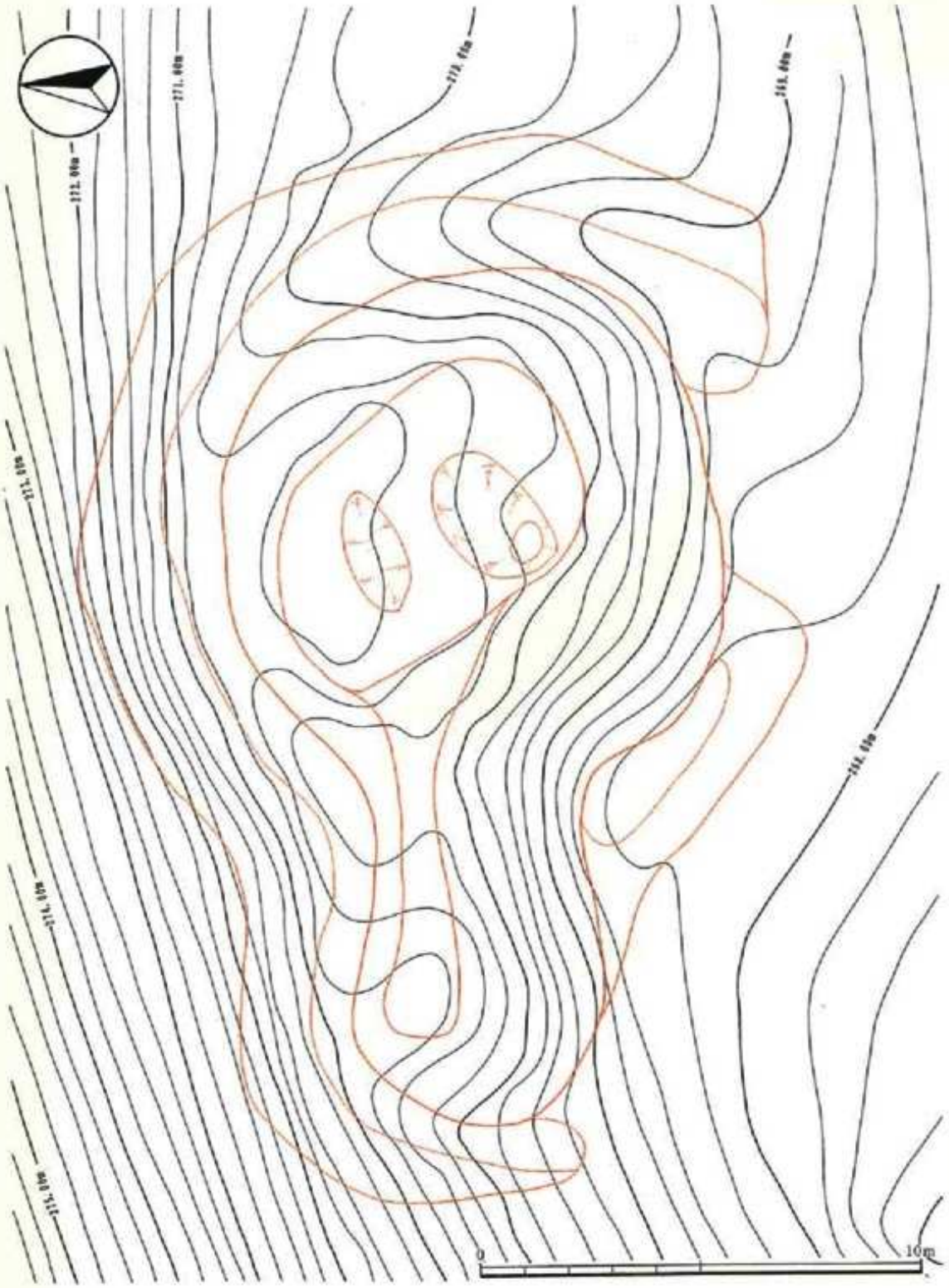
墳　　丘

T－9号墳は、尾根筋の高まりに所在するT－1・2・3・4・5・6・7・8号墳から南側に下降した斜面の中腹にわずかに形成された、標高269.00 m付近の平坦面に、墳丘主軸を斜面の等高線に並行させて立地する前方後円墳である。この平坦面の幅が狭いことは確かであるが、現地を観察するとT－9号墳の規模の前方後円墳であれば築造可能の面積を有しているにもかかわらず、祭祀のための空間を南側に必要としたのかあるいは墳丘築造の労力の省略をはかったのか、墳丘を山側に寄せて築造されている。

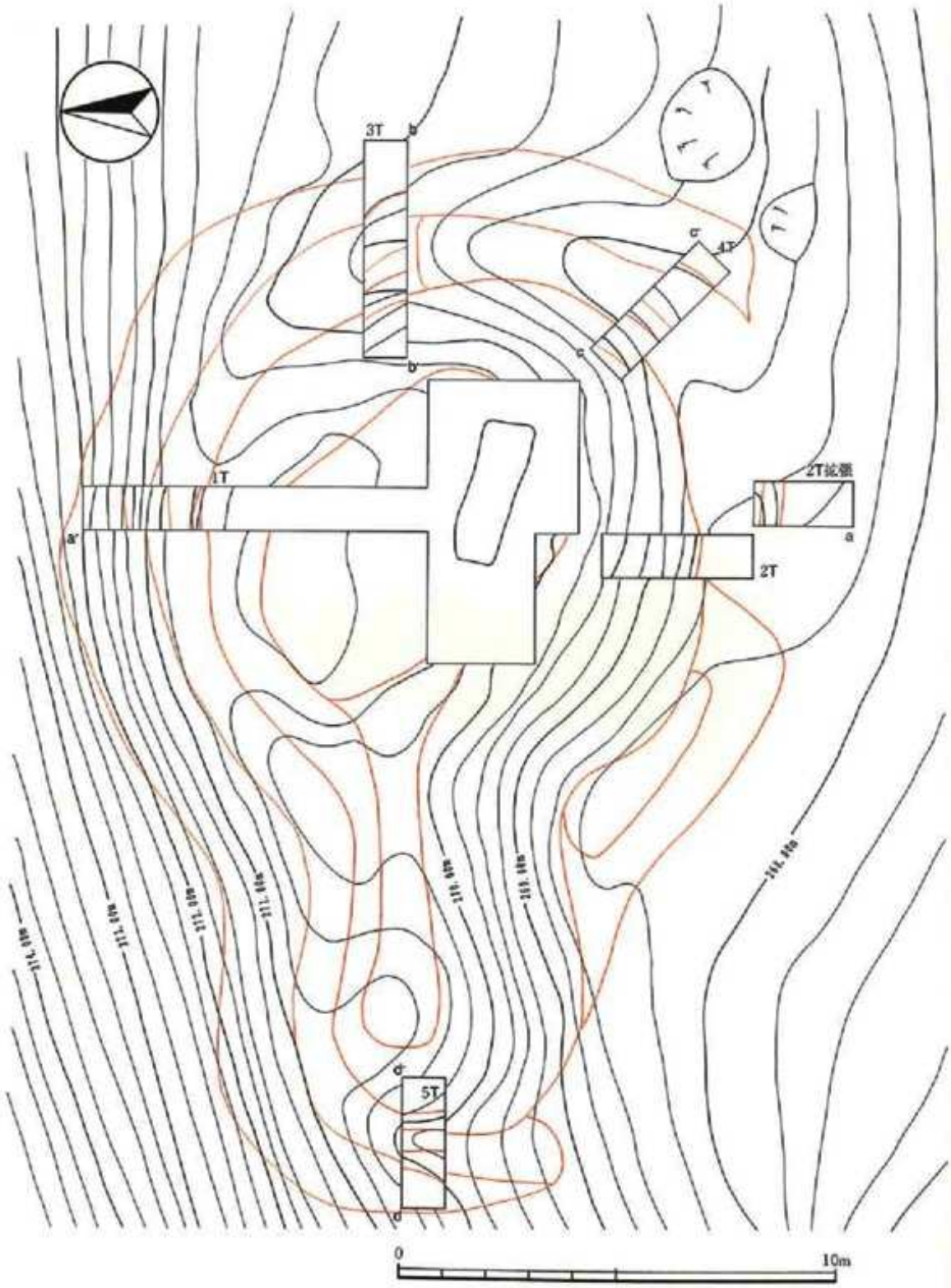
調査前の墳丘の状態は、このような条件のもとにあったために、特異な例ではあるが山寄せの前方後円墳とみてとれた。したがって、下小松古墳群の前方後円墳に通常備わっている全周形の周溝も表面観察からはみてとれなかった。墳丘の北側では斜面と墳丘との間



第18図　T－9号墳墳丘周辺地形測量図及びエレベーション図



第19図　T－9号墳墳丘測量図



第20図　T－9号墳トレンチ配置図

を画する周溝がみられたが、墳丘の南側では周溝は明瞭ではなく、むしろ墳丘北側を半周した周溝が後円部の後端と前方部の前端以南は自然地形に吸収されている状態であった。南側で唯一周溝の痕跡が明瞭であったのは、くびれ部付近のみであった。また墳丘は、前方部に関しては墳頂平坦面および稜線が比較的明瞭に観察できた。しかし、後円部については墳頂平坦面に少なくとも2つの大きな陥没がみられ、そのうちの南側の陥没は墳頂平坦面自体を南側に傾斜させ、墳頂平坦面南側の周縁の稜線を乱している状態であった。これまでの下小松古墳群における調査の経験から、これは主体部の天井の腐朽による土層の陥没であることが推測できた。

墳丘の規模を確定することを目的として、以下のようにトレンチを設定した（第20図）。

後円部の径を確定するために、主軸に直交して、北側の周溝部分を中心として自然地形の傾斜面と墳丘裾・盛土開始面の検出を目的として1×4mの1トレンチを、また南側の墳裾・盛土開始面の検出および周溝の有無の確認を目的として1×3.5mの2トレンチを設定した。また2トレンチは調査の途中に周溝の有無の確認に万全を期すために拡張トレンチを再設定した。また、後円部の南東方向に墳裾の検出および周溝の有無の確認を目的として4トレンチを設定した。

墳丘の全長を確定するために、主軸上の後円部後端に墳裾・盛土開始面および周溝の検出を目的として1×5mの3トレンチを、前方部前端に墳裾・盛土開始面および周溝の検出を目的として1×3mの5トレンチを設定した。

1･2トレンチについては主体部の検出の都合から、両者をほぼ連続させた後円部の横断面のセクションが得られたので、この2つのトレンチの所見とあわせて後円部の盛土の仕方も観察できた。

以下に、各トレンチの所見を順に記述してゆき、まとめを行なう。

1トレンチでは、地山を削り込んで周溝をつくっている様子が観察された（第21図）。墳裾の立ち上がりも地山を整形しているので明瞭である。周溝下端の幅は約0.8m、上端は標高270.30m付近で計測すると約1.25mである。また墳裾は傾斜変換の様子から標高約270.00mに求められ、盛土開始面は標高270.44mである。ちなみに、2層はその分布状態から本来的には自然地形である北側斜面の崩落土・墳丘崩落土・盛土の3種に分層することが可能なはずであるが、表土化がすすみそれができなかった。

2トレンチもまた、地山を削り込んで周溝をつくっている様子が観察された（第21図）。

地表面からの観察ではその確認に困難を伴うことはさきに述べたが、調査の結果は明瞭であった。周溝下端の幅は、約1.3 mであり、上端は標高268.3付近で計測すると約2.1 mである。また、墳裾は地山整形の傾斜変換点から標高267.90 m付近に求められる。盛土開始面は標高268.45 mである。

後円部の横断面図をみると、本古墳においてはその他の古墳でみられた土手状の施設をもちいた盛土を行なっていなかった。おそらく自然傾斜面の表土を取りのぞいて整形したあと（地山表土と観察できる面の遺存は全くなかった）、45・48層を水平にもり、層の上面から地山まで穿って墓壙をつくり埋葬を行い、また水平に盛土を行なう方法で墳丘を完成させたとみられる。

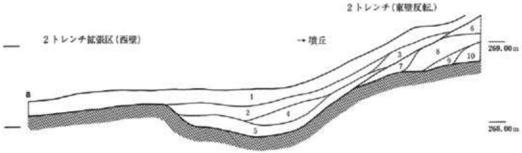
3トレンチでもまた地山の整形によって周溝および墳裾を作り出していた（第22図）。ただし墳丘側のセクションをみると、地山を削り込んだ外側に、9・11層の東側端部がつくる斜面がある。この面を墳丘の表面として捉える考え方をとりたい。この所見にたって周溝の規模を計測すると、下端の幅が約0.9 m、上端は標高269.50 m付近で計測すると約2.3 mである。また墳裾は標高268.94 m付近に求められ、盛土開始面も同様である。

4トレンチでも地山整形による周溝・墳裾の作り出しをおこなっていた（第22図）。周溝の下端の幅は約1.1 m、上端は標高268.75 m付近で計測すると約2.0 mであった。墳裾は地山の傾斜変換点から標高268.60 m付近に求められ盛土開始面は標高268.75 m付近である。

5トレンチでも、周溝・墳裾が地山整形であることは同じである（第22図）。周溝の下端の幅は約0.3 mであり、上端は標高270.00 m付近で計測すると約0.85 mである。墳裾は地山の傾斜変換点から標高269.75 m付近に求められ、盛土開始面は約270.00 m付近である。

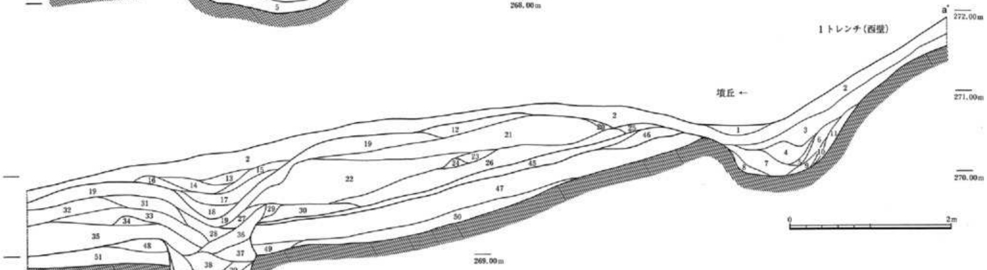
以上みてきたところを総合すると、墳裾は山側から1トレンチで標高270.00 m、5トレンチで標高269.75 m、3トレンチで標高268.94 m、4トレンチで標高268.60 m、2トレンチで標高267.90 mである。このように墳丘の各所で墳裾のレベルは一様ではない。地山の傾斜にそって墳裾を決めているというのが妥当であろう。これらの墳丘各所に設けたトレンチのデータから墳丘の規模が確定できた。以下に記す。

墳丘規模	全　長	19.64 m	後円部径	11.80 m
	後円部高	約2.00 m（3トレンチ墳裾から計測）		
	前方部高	約1.20 m（5トレンチ墳裾から計測）		
	主軸方位	N－86°－E		



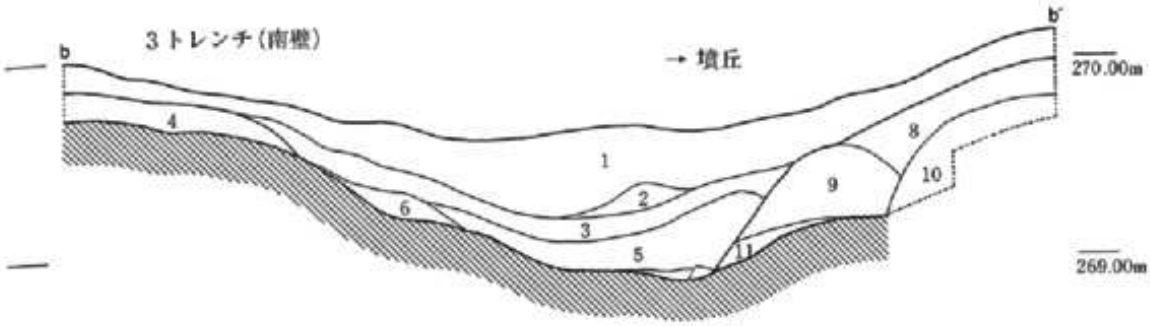
2トレンチ

		しまり	粘性	混入物
1	褐色土層	有り	無し	φ3㎜の小礫を少量含む
2	暗黄褐色土層	有り	無し	φ30㎜の小礫を含む
3	淡橙褐色土層	有り	無し	φ3㎜の小礫・φ2㎜の黒色粒子を少量含む
4	橙褐色土層	有り	やや有り	φ20㎜の白色・橙色粒子を少量含む　φ5㎜の炭化粒子を微量含む
5	暗褐色土層	やや有り	無し	φ40㎜の礫・炭化物を含む　φ5㎜の炭化粒子を微量含む
6	橙褐色土層	有り	やや有り	φ15㎜の白色粒子・φ5㎜の橙色・黒色粒子を少量含む
7	暗褐色土層	有り	無し	φ20㎜の小礫を少量含む　φ3㎜の白色・橙色・濃緑色粒子を少量含む
8	黄褐色土層	有り	やや有り	φ10㎜の白色粒子・φ2㎜の橙色・黒色粒子を少量含む
9	赤褐色土層	やや有り	やや有り	φ5㎜の礫を微量含む
10	暗赤褐色土層	無し	有り	φ20㎜の礫を少量含む



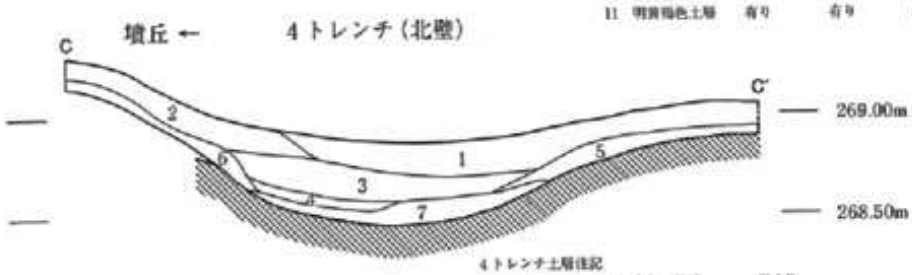
		しまり	粘性	混入物
1	褐色土層	有り	無し	小礫を少量含む
2	黄褐色土層	有り	やや有り	φ30㎜の炭化粒子・小礫を少量含む
3	赤褐色土層	有り	有り	φ2㎜の炭化粒子を微量含む
4	暗褐色土層	やや有り	やや有り	φ10～30㎜の小礫を少量含む　φ3～20㎜の炭化物を含む
5	暗茶褐色土層	無し	やや有り	φ5㎜の炭化粒子を少量含む
6	赤褐色シルト層	無し	やや有り	φ5㎜の小礫を微量含む
7	暗褐色土層	無し	やや有り	φ40㎜の炭化物を多量含む
8	淡橙褐色シルト層	無し	やや有り	φ10㎜の小礫を少量含む
9	浅橙褐色シルト層	やや有り	やや有り	φ2㎜の黒色粒子・φ3㎜の黄色粒子を含む
10	淡橙褐色シルト層	やや有り	やや有り	φ20㎜の小礫を少量含む
11	暗橙白色シルト層	やや有り	有り	φ30㎜の腐れ礫を少量・φ10㎜の黄色・白色粘土ブロックを多量含む
12	明褐色土層	有り	無し	φ30㎜の白色・濃緑色の腐れ礫を含む　φ5㎜の小礫を少量含む
13	暗黄褐色土層	有り	やや有り	φ10～20㎜の炭化物を含む
14	暗黄褐色土層	有り	やや有り	φ5㎜の炭化粒子・φ2㎜の白色粒子を少量含む
15	暗黄褐色土層	やや有り	やや有り	φ10～30㎜の炭化物多量含む
16	黄褐色土層	有り	若干有り	φ3㎜の白色・橙色粒子を少量含む
17	黄褐色土層	やや有り	有り	φ10㎜の炭化粒子・小礫を少量含む
18	暗黄褐色土層	やや有り	有り	φ3㎜の白色粒子を微量含む
19	黄褐色土層	有り	有り	φ10㎜の炭化物・白色粒子・φ50㎜の礫を少量含む
20	明褐色土層	有り	やや有り	φ10㎜の白色ブロックを少量含む
21	浅赤褐色シルト層	無し	無し	φ50㎜の白色・淡緑色・橙色の腐れ礫を多量含む 赤褐色・黄褐色・白色シルトの混合層
22	浅赤褐色シルト層	無し	無し	φ30㎜の白色粘土ブロックをやや多く含む φ50㎜の腐れ礫を少量含む
23	橙褐色シルト層	やや有り	無し	φ10㎜の小礫を少量含む　φ5㎜の炭化粒子を微量含む
24	赤褐色土層	やや有り	無し	φ5㎜の炭化粒子を少量含む
25	橙褐色土層	やや有り	やや有り	φ10㎜の小礫を少量含む
26	赤褐色土層	無し	無し	φ10㎜の小礫を少量含む
27	暗黄褐色土層	やや有り	やや有り	φ20㎜の炭化粒子を含む　小礫を少量含む
28	淡橙褐色土層	やや有り	やや有り	φ5㎜の炭化粒子を少量含む　φ30㎜の黄色粘土ブロックを多量含む
29	淡橙褐色土層	有り	有り	φ3㎜の炭化粒子を少量含む
30	浅赤褐色土層	無し	無し	φ50㎜の腐れ礫・φ30㎜の炭化粒子を少量含む
31	淡橙褐色シルト層	やや有り	やや有り	φ10㎜の白色粒子・φ40㎜の橙色ブロック・礫を少量含む
32	黄褐色土層	有り	やや有り	φ50㎜の腐れ礫を含む　φ10㎜の炭化物・白色粒子を少量含む
33	浅赤褐色シルト層	無し	やや有り	φ30㎜の白色粒子・φ40㎜の腐れ礫を少量含む
34	明黄褐色土層	やや有り	有り	φ50㎜の黄色・橙色粘土ブロックを多量含む　炭化粒子を微量含む
35	明黄褐色土層	有り	有り	φ2㎜の炭化粒子を微量含む
36	黄褐色土層	やや有り	やや有り	φ30㎜の白色粒子を少量含む　φ5㎜の小礫を微量含む
37	淡橙褐色土層	無し	有り	φ5㎜の白色・橙色粒子を含む
38	浅赤褐色シルト層	無し	やや有り	φ10㎜の小礫を微量含む
39	淡橙褐色シルト層	若干有り	やや有り	φ10㎜の白色粘土ブロックを少量含む　φ3㎜の橙色粒子を少量含む
40	浅赤褐色土層	無し	やや有り	φ2㎜の白色・橙色粒子を多量含む
41	暗浅赤褐色土層	無し	無し	φ30㎜の炭化物を微量含む　暗黄色ブロックを多量含む
42	明黄褐色土層	有り	有り	φ15㎜の小礫を微量含む
43	暗橙褐色土層	無し	やや有り	φ50㎜の礫を微量含む　φ5㎜の小礫を含む
44	明黄褐色土層	やや有り	若干有り	φ3㎜の炭化粒子を微量含む
45	赤褐色シルト層	無し	無し	φ100㎜の炭化物を多量含む
46	赤褐色シルト層	無し	無し	φ30㎜の小礫を少量含む
47	暗赤褐色シルト層	無し	有り	φ30㎜の小礫を含む
48	暗赤褐色土層	やや有り	やや有り	φ15㎜の小礫を含む　φ20～50㎜の礫を少量含む
49	暗浅赤褐色土層	有り	やや有り	φ15㎜の小礫を少量含む
50	暗黄褐色シルト層	無し	無し	φ40㎜の礫を少量含む
51	暗浅赤褐色土層	やや有り	有り	φ15㎜の小礫を少量含む

第21図　T－9号墳セクション図（1）



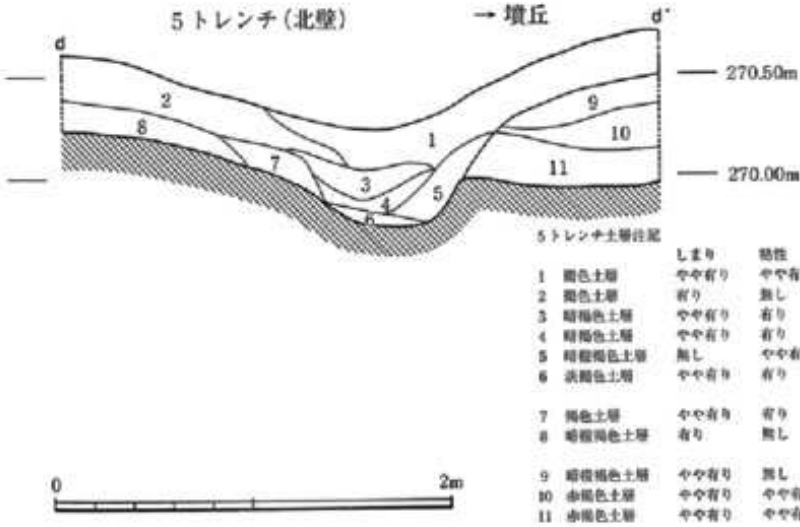
3トレンチ土層注記

		しまり	粘性	混入物
1	褐色土層	有り	無し	φ 10～100㎜の礫を少量含む
2	暗黄褐色土層	やや有り	無し	φ 30㎜の礫・炭化物を少量含む
3	黄褐色土層	やや有り	やや有り	φ 30㎜の礫を微量含む
4	明褐色土層	有り	無し	φ 5㎜の小礫を少量含む
5	暗褐色土層	無し	有り	φ 15㎜の炭化粒子を多量含む
6	黄褐色土層	有り	やや有り	φ 2㎜の黒色粒子を微量含む
7	明褐色土層	やや有り	有り	φ 70㎜の礫を少量含む
8	暗黄褐色土層	やや有り	やや有り	φ 2㎜の炭化粒子を微量含む
9	黄褐色土層	やや有り	やや有り	φ 30㎜の礫を少量含む
10	赤褐色土層	無し	有り	混入物はほとんど無い
11	明黄褐色土層	有り	有り	φ 5㎜の小礫を微量含む



4トレンチ土層注記

		しまり	粘性	混入物
1	黄褐色土層	有り	無し	φ 1㎜の炭化粒子を微量含む　φ 50㎜の小礫を少量含む
2	黄褐色土層	有り	無し	φ 20㎜の小礫を少量含む
3	暗黄褐色土層	有り	無し	φ 5㎜の炭化粒子を少量含む
4	暗黄褐色土層	有り	やや有り	φ 20㎜の橙色粘土ブロックを少量含む
5	黄褐色土層	有り	無し	φ 5㎜の橙色・炭色ブロックを微量含む
6	褐色土層	有り	無し	φ 5㎜の焼れ礫を少量含む
7	明黄褐色土層	有り	有り	φ 50㎜の黄色・橙色粘土ブロックを少量含む



5トレンチ土層注記

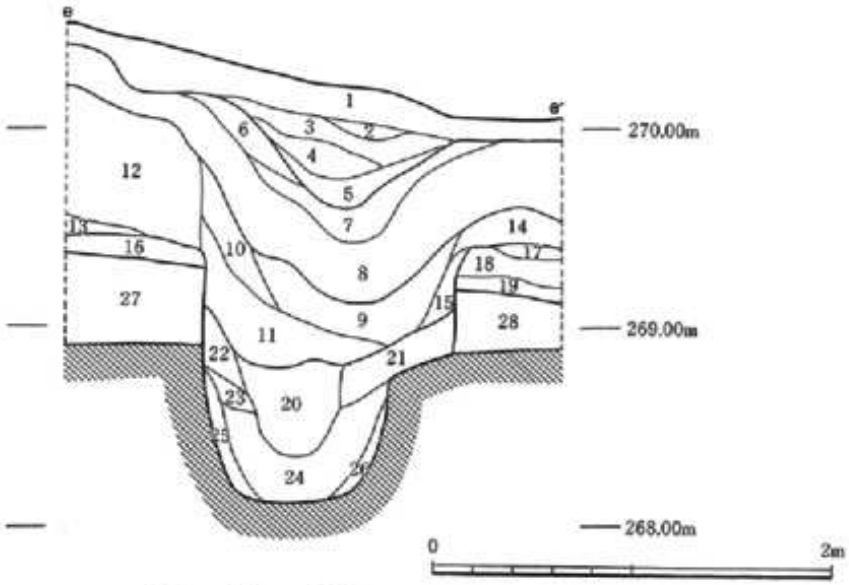
		しまり	粘性	混入物
1	褐色土層	やや有り	やや有り	φ 10㎜の小礫を少量含む
2	褐色土層	有り	無し	φ 40㎜の礫・φ 5㎜の黒色粒子を少量含む
3	暗褐色土層	やや有り	有り	φ 10㎜の小礫を含む
4	暗褐色土層	やや有り	有り	φ 20㎜の炭化物を多量含む
5	暗橙褐色土層	無し	やや有り	φ 40㎜の礫を含む
6	淡褐色土層	やや有り	有り	φ 30㎜の礫を含む φ 100㎜の白色粘土ブロックを少量含む
7	褐色土層	やや有り	有り	φ 5㎜の小礫を微量含む
8	暗橙褐色土層	有り	無し	φ 50㎜の礫を少量含む φ 5㎜の炭化粒子を微量含む
9	暗橙褐色土層	やや有り	無し	φ 15㎜の小礫を少量含む
10	赤褐色土層	やや有り	やや有り	φ 15㎜の炭化粒子を微量含む
11	赤褐色土層	やや有り	やや有り	φ 30㎜の礫を少量含む

第22図　T－9号墳セクション図（2）

主体部

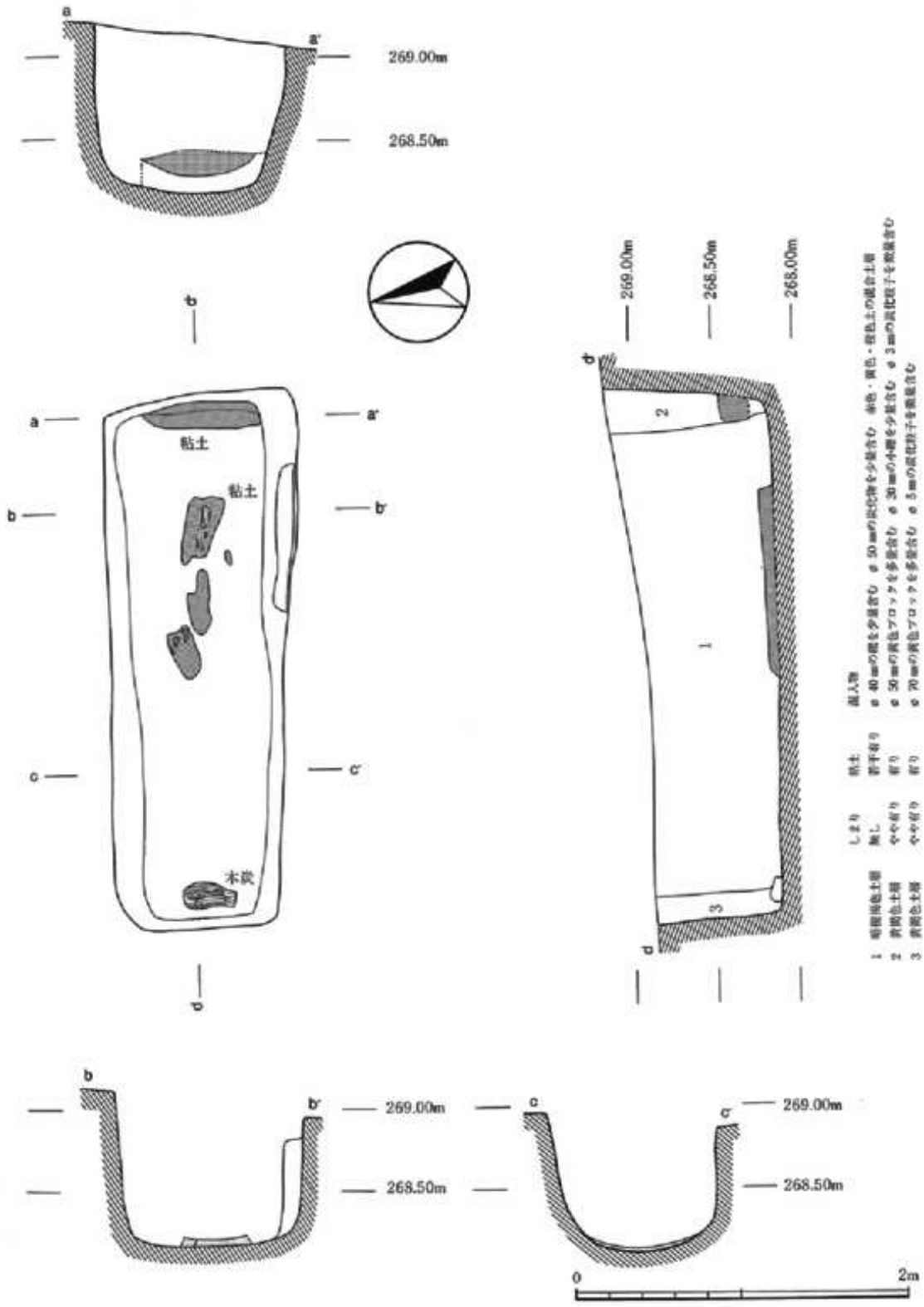
墳丘の項で触れたとおり、本古墳の主体部は墳丘の盛土過程の途中で墓壙を穿ち、埋葬を行なったものである。その後、再び盛土を施して墳丘を完成する仕方をとる。

墓壙の掘り込み面は、主軸直交の東側セクションの45·48層上面、主軸直交の西側セクションの16·17·18層上面であると判断している。したがって、この解釈にのっとって墓壙の規模を記述するのが最良であるが、記録に残せた墓壙の確認面は地山上面の掘り込み面であるから、以下にそれを示しておく（第23図）。本来的な墓壙の上端の規模はこれよ



		しまり	粘性	混入物
1	黄褐色土層	有り	やや有り	φ 15㎜の小礫を含む
2	黄褐色土層	有り	やや有り	φ 3㎜の橙色・黒色粒子を少量含む
3	暗黄褐色土層	有り	やや有り	φ 2～10㎜の炭化粒子を少量含む
4	黄褐色土層	有り	やや有り	φ 30㎜の炭化物を少量含む
5	暗黄褐色土層	やや有り	有り	φ 30㎜の炭化物を多量含む
6	暗黄褐色ヒ	有り	やや有り	φ 10㎜の炭化粒子を微量含む　φ 5㎜の白色・橙色粒子を少量含む
7	黄褐色土層	やや有り	有り	φ 5㎜の炭化粒子を微量含む　φ 15㎜の小礫を少量含む
8	明黄褐色土層	有り	有り	φ 15㎜の崩れ礫を少量含む
9	淡橙褐色土層	やや有り	やや有り	φ 15㎜の崩れ礫・白色・黄色粘土ブロックを含む
10	淡橙褐色シルト層	無し	やや有り	φ 3㎜の白色粒子を微量含む
11	淡赤褐色シルト層	無し	やや有り	φ 15㎜の小礫を少量含む　φ 3㎜の白色粒子を微量含む
12	淡赤褐色シルト層	無し	やや有り	φ 30㎜の黄色・白色ブロック・崩れ礫を多量含む
13	赤褐色土層	無し	有り	φ 3㎜の炭化粒子を微量含む
14	淡赤褐色シルト層	無し	やや有り	φ 40㎜の橙色粘土ブロックを多量含む　φ 2㎜の白色粒子を少量含む
15	橙褐色土層	やや有り	有り	φ 2㎜の白色粒子を少量含む
16	明黄褐色粘土層	有り	強	黄色粘土ブロックを多量含む
17	黄褐色土層	有り	やや有り	小礫を微量含む　多少ホルが強い
18	明黄色褐色土層	強	有り	黄色粘土ブロックを多量含む　小礫を少量含む
19	黄褐色土層	強	やや有り	φ 3㎜の炭化粒子を少量含む　小礫を少量含む
20	暗橙褐色土層	無し	やや有り	φ 30㎜の礫を少量含む　暗赤褐色・暗黄褐色の土がブロック状に混合
21	暗褐色土層	やや有り	有り	φ 10㎜の白色・黄色ブロックを少量含む
22	暗赤褐色土層	無し	やや有り	φ 20㎜の炭化物・小礫を少量含む
23	暗黄褐色土層	無し	やや有り	暗赤褐色土を少量含む
24	暗橙褐色土層	無し	無し	暗赤褐色・暗黄褐色の土がブロック状に混合
25	明黄褐色土層	無し	やや有り	φ 50㎜の礫を微量含む　φ 5㎜の小礫を含む
26	明黄褐色土層	有り	有り	φ 15㎜の小礫を微量含む
27	暗赤褐色土層	無し	有り	上面に炭化物を多量含む
28	暗赤褐色土層	無し	有り	φ 40㎜の礫を少量含む

第23図　T－9号墳セクション図（3）



第24図　T－9号墳主体部平面図及びエレベーション図

り少し大きめであると認識していただきたい。墓壙の上端は、長軸が3.24 m、短軸が東端から0.72 m西のところで1.17 m、西端から0.94 m東のところで1.03 mである。墓壙の下端は、長軸が3.12 m、短軸が東端から0.72 m西のところで0.84 m、西端から1.03 m東のところで0.75 mである。また主軸方位はN－101°－Eであり、頭位は墓壙の形状から東方向と考えるのが適当だろう。

墓壙は、平面形が東側でやや広い隅丸の長方形であり、四方の壁はほぼ垂直に掘り込まれている。また底部もほとんど平らである。このなかに木棺を設置する。

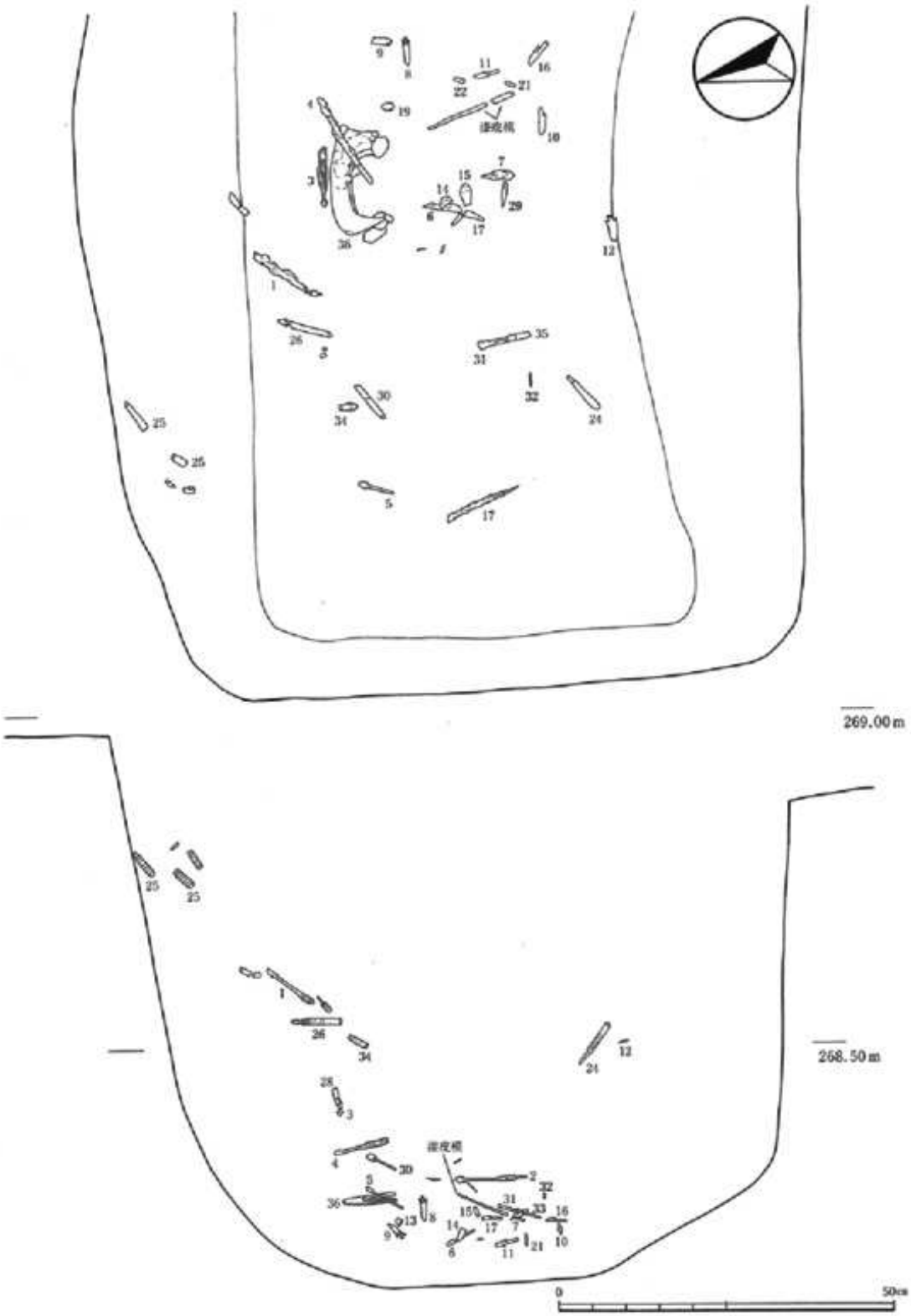
墓壙の主軸セクションをみると、墓壙の両端部に垂直にたちあがる黄褐色土層がある。これは1層とした陥没した土層群と明瞭に区別される。また2層下部の粘土の西側端部も平らな面をもつ。この土層については、木棺を設置したあとに墓壙と木棺の間隙に生じた隙間を埋めた詰め土であると解釈した。これと同様な詰め土は側面にも施されていて、b－b'のエレベーション図に示した南側の墓壙壁と並行して垂直に立ち上がる土層もまた詰め土である。また、詰め土の残り方かたからみて、木棺の形状は箱形の木棺であると想定される。 また墓壙底部の東側に寄ったところには部分的に粘土が敷かれていた。これと同レベルのその他の部分は陥没土であった。底部一面に別種類の粘土などの土を入れて床をつくっていないところをみると、粘土は木棺の安定をはかって入れたものであると解釈した。

したがって木棺の設置の仕方を復原すると、墓壙底部に若干の粘土を敷いて木棺を置き、その段階で、墓壙と木棺との間にできた間隙に詰め土をいれるという方法が考えられる。

しかし、墓壙の掘り込み面と考えたレベルまで木棺の蓋の上面が達していたとは考えられない。したがって、この掘り込み面に木の板などをならべた天井があったと考えるのが妥当であろう。木棺の高さ自体の復原をする材料はほとんど残されていないが、b－b'エレベーションに記録した詰め土の上面付近に求めるのも一案かと考えている。

副葬品の出土状況

T－9号墳の主体部においては棺内遺物とみられるものは出土しなかった。主軸直交東側セクションの40層、主軸直交西側セクションの24層の陥没土層から鉄鏃・U字形の鋤先が流れ込んだ状態で出土した。この出土状態からみてこれらの遺物は墓壙掘り込み面の天井部におかれた遺物であると考えられる。



第25図　T－9号墳主体部副葬品出土状況図

副　葬　品（第26図）

T－9号墳からは以下のものが出土した。

鉄鏃 －17～19　　U字形鋤先 －1

鉄鏃は鏃身部の数から17～19本存在したと考えられる。確認出来るものは全て長頸鏃である。鏃身部の形態は長三角形（1～3、6～15）、三角形（5）、片刃形（4、16～17）、片逆刺（19）の4種が見られる(1)。長三角形のものは深い逆刺を持つが、逆刺が直線的なものと外側へわずかに開くものがある。また、12、15は鏃身先端部が張り出し、柳葉形に近い。断面形は全て片丸造である。三角形のものは逆刺を持たない角関であり、断面形は片丸造である。片刃形のものは深い逆刺を持ち、断面形は片切刃造に近い片丸造である。19は片逆刺を有し、その逆刺は深い。逆刺の反対側は撫関である。断面形は片丸造である。

確認できる頸部の長さは5.0～6.9㎝である。断面形は長方形が多いが、片刃形の鏃身部を持つものは刃側が狭い台形をなす。24、25の断面形はわずかに台形を為し、片刃形の鏃身部に接続していた可能性がある。長三角形の鏃身部を持つものには、鏃身部付近の断面形が上辺が狭く、若干丸い台形をなすもの（8、9）が見られる。関部の形態は全て台形関である。

茎部は方形もしくは長方形の断面形である。32では斜めに有機質の繊維が見られ、茎部は矢柄に捻り込んだ痕跡が確認できる。

矢柄は残りの良いもので7.6㎝残存している。径は0.75～0.9㎝で、大きなばらつきは無い。鏃側から4㎝前後の範囲に、幅2、3㎜の樹皮を巻いて、鏃を固定している。鏃側から巻いていくものが多いが、2、24では下から鏃方向へ巻いている。（個々の法量は一覧表にまとめた(2)。）

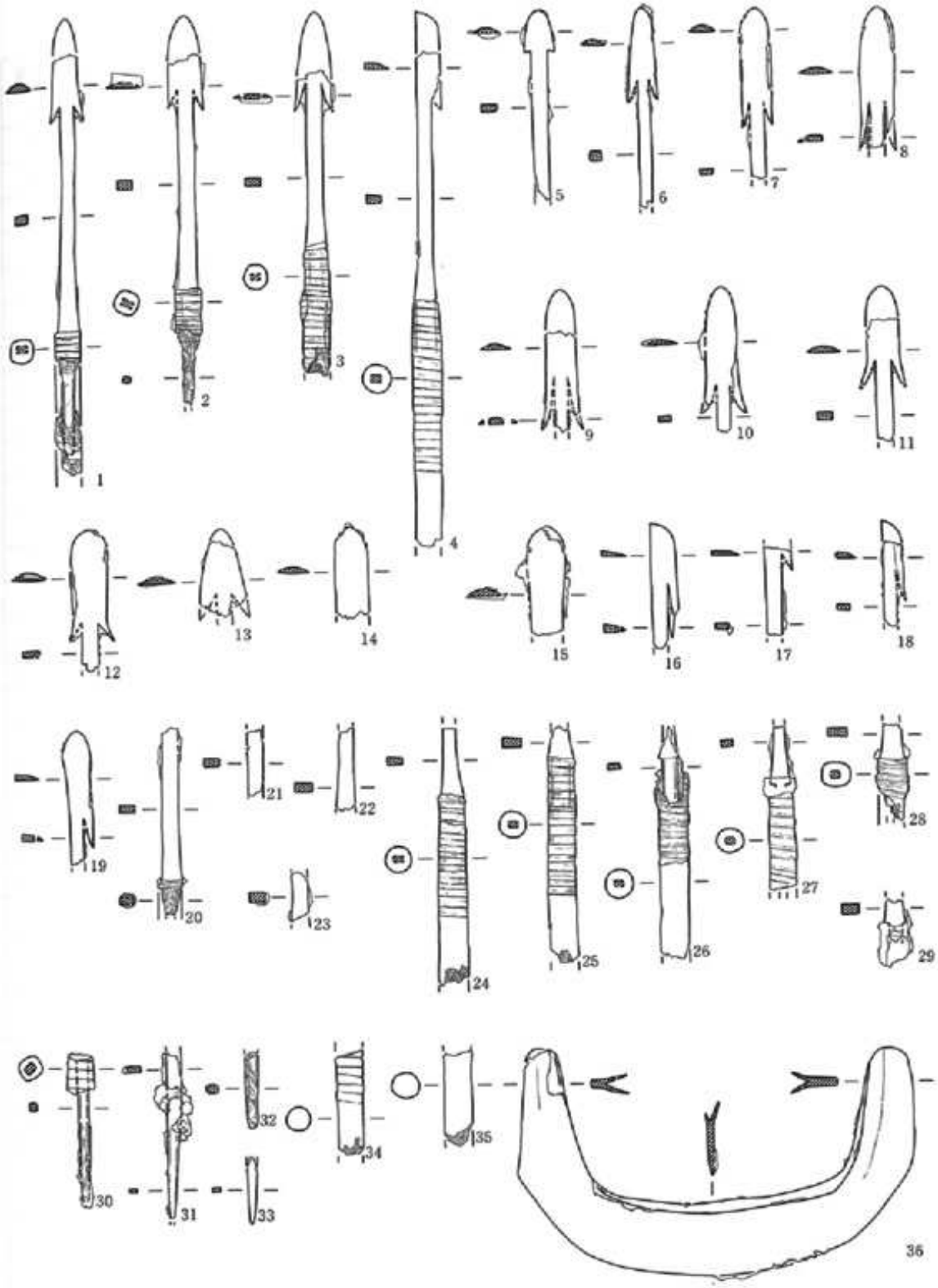
U字形鋤先は幅12.1㎝、長さ6.9㎝、刃部の厚さ0.2㎝、重量17ｇである。受部の平面形はやや開いたコ字形で、断面はＹ字形をなす。刃は下辺の浅いU字形の部分のみで、側辺には至っていない。使い減りした感があり、現状は製作時の形態を留めていないと思われる。出土時には、左端部に木質が付着しており、木目の方向は刃に平行していた。Ｙ字形の受部内面に木質は見られない。

(1) 鉄鏃の名称及び分類は、杉山秀宏「古墳時代の鉄鏃について」『橿原考古学研究所論集8』1988を参考とした。

(2) 表中の単位は重量がｇ、それ以外は㎝である。（ ）付きの数値は残存値もしくは復元値である。

時　　期

T－9号墳は、副葬品のセットから5世紀後半以降の築造と考えられる。



第26図　T－9号墳出土遺物実測図（S＝1／2）

T－9　鉄鏃計測値一覧表

No.	残存長	鏃身部長	鏃身部幅	頸部長	頸部幅	関部幅	茎部長	茎部幅	矢柄長	矢柄径	重量
1	12.9	(2.10)	1.05	6.90	0.45	0.70	3.80	0.35	(4.40)	0.80	6
2	10.8	(1.70)	1.05	(6.10)	0.45	0.65	(3.60)	(0.25)	(1.50)	0.75	5
3	9.40	(1.30)	1.20	5.00	0.45	0.60	(3.70)	—	(4.00)	0.75	4
4	15.2	(1.50)	0.70	6.10	0.45	0.65	—	—	(7.60)	0.90	8
5	5.85	1.30	0.95	(4.60)	0.45	—	—	—	—	—	2
6	6.10	2.90	0.95	(3.90)	0.40	—	—	—	—	—	1
7	5.25	3.65	0.90	(2.35)	0.45	—	—	—	—	—	1
8	4.35	(2.90)	1.05	(1.45)	(0.45)	—	—	—	—	—	1
9	3.10	(2.85)	(1.10)	(1.70)	(0.45)	—	—	—	—	—	1
10	4.50	(3.60)	(1.00)	(1.50)	0.40	—	—	—	—	—	—
11	3.75	(2.00)	(1.30)	(2.50)	0.50	—	—	—	—	—	1
12	4.40	3.45	1.40	(1.50)	0.50	—	—	—	—	—	—
13	2.30	(2.10)	(1.90)	(0.60)	(0.45)	—	—	—	—	—	—
14	2.80	(2.80)	(1.05)	—	—	—	—	—	—	—	—
15	3.25	(3.25)	(1.15)	—	—	—	—	—	—	—	1
16	3.85	(3.65)	(0.90)	(2.00)	0.45	—	—	—	—	—	1
17	2.70	(0.70)	0.85	(2.40)	0.50	—	—	—	—	—	—
18	2.60	(1.70)	0.70	(1.65)	0.40	—	—	—	—	—	—
19	4.15	3.60	0.80	(1.40)	0.40	—	—	—	—	—	1
20	5.70	—	—	(4.80)	0.50	—	(0.90)	—	—	—	2
21	2.00	—	—	(2.00)	0.45	—	—	—	—	—	—
22	2.55	—	—	(2.55)	0.45	—	—	—	—	—	—
23	1.50	—	—	(1.50)	0.50	—	—	—	—	—	—
24	7.90	—	—	(2.10)	0.40	0.65	—	—	(6.80)	0.90	4
25	7.20	—	—	(1.00)	(0.55)	0.80	—	—	(6.20)	0.80	3
26	7.10	—	—	(1.00)	—	—	—	—	(6.10)	0.90	4
27	5.05	—	—	(1.80)	0.35	(0.70)	(3.25)	0.30	(3.25)	0.80	3
28	2.90	—	—	(1.10)	(0.50)	(0.75)	(1.40)	0.30	(1.80)	0.90	1
29	2.10	—	—	(0.75)	0.55	0.65	(0.60)	—	(1.30)	—	—
30	4.80	—	—	—	—	—	(4.40)	0.40	(1.30)	0.80	1
31	5.10	—	—	—	—	—	(5.10)	0.45	—	—	1
32	2.35	—	—	—	—	—	(2.35)	0.40	—	—	—
33	2.05	—	—	—	—	—	(2.05)	0.30	—	—	—
34	3.20	—	—	—	—	—	—	—	(3.20)	0.80	1
35	3.00	—	—	—	—	—	—	—	(3.00)	0.80	—

第4節　T－1号墳

T－1号墳の調査は、1998年7月26日～8月9日に明治大学と川西町教育委員会とによって行われた。

調査の目的

T－9号墳の調査によって、T－1号墳周辺に所在する前方後円墳の内容が把握できた。先述したこの一見特異な位置関係をしめす群を考察するためには、尾根筋に分布する古墳のデータが必要となってきた。調査対象の候補としてT－1・T－4・T－6号墳が挙がったが、立地や墳丘の規模を考慮して、T－1号墳を調査することに決定した。

立　　地

T－33号墳から東に延びた尾根筋はほとんど標高を変化させず、T－1号墳にまで至っている。そしてT－1号墳の東側墳裾から急激に傾斜を変えて下降がはじまる。このような尾根筋にところどころできた高まり部分の突端にT－1号墳は立地している。

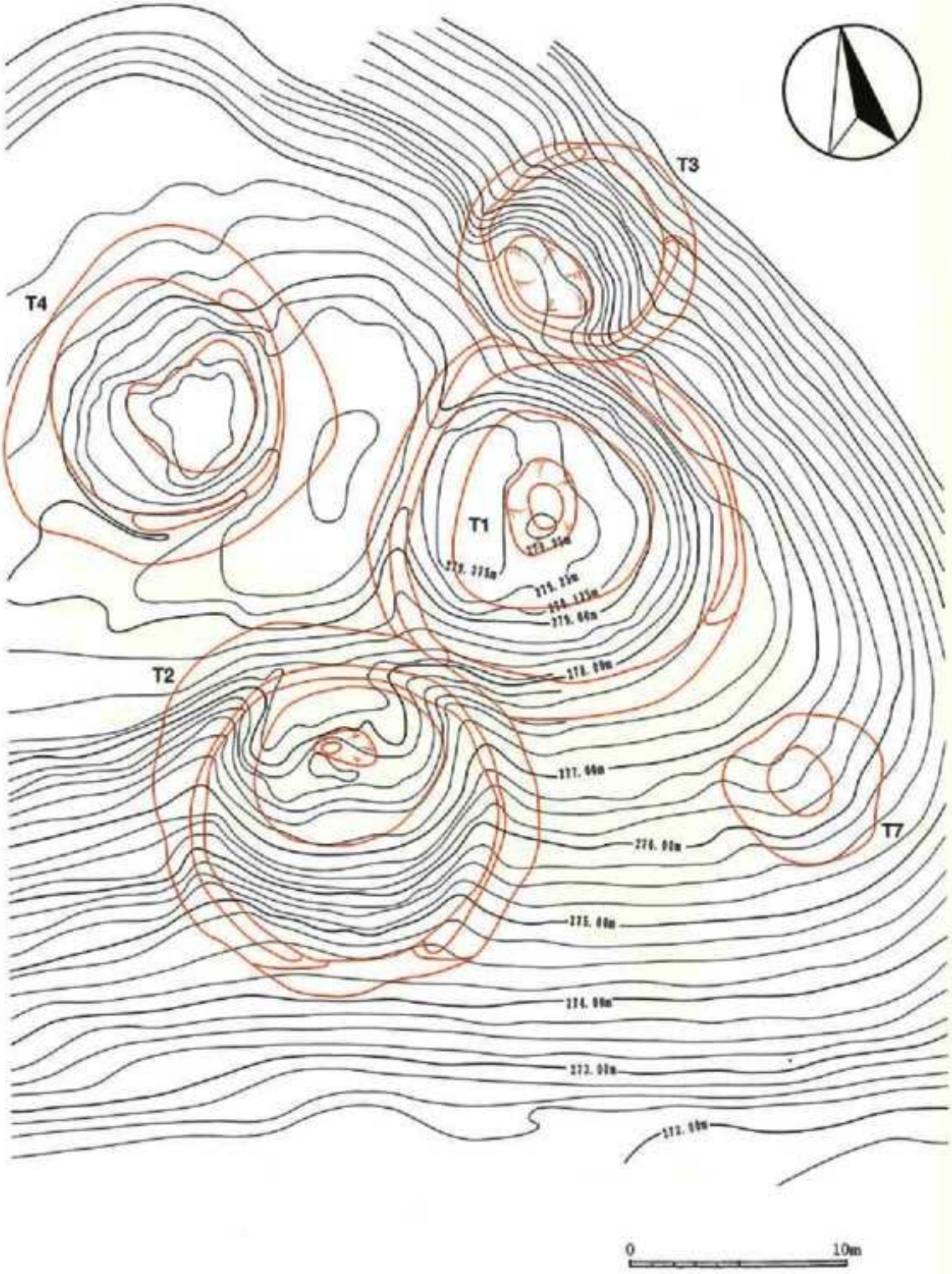
墳　　丘

調査前の墳丘の状態は、西側からつづいてくる尾根を切断して墳丘を整形しているように観察された。またT－1号墳の南側にはT－2号墳が、北側にはT－3号墳が立地していて、T－2・3号墳の周溝がT－1号墳の周溝を切断している様子がみてとれた。墳頂平坦面の周縁の傾斜変換線は比較的明瞭に残っていた。墳裾の傾斜変換線と合わせ考えて、地山の地形に制約された、不整形な方墳であると判断した。

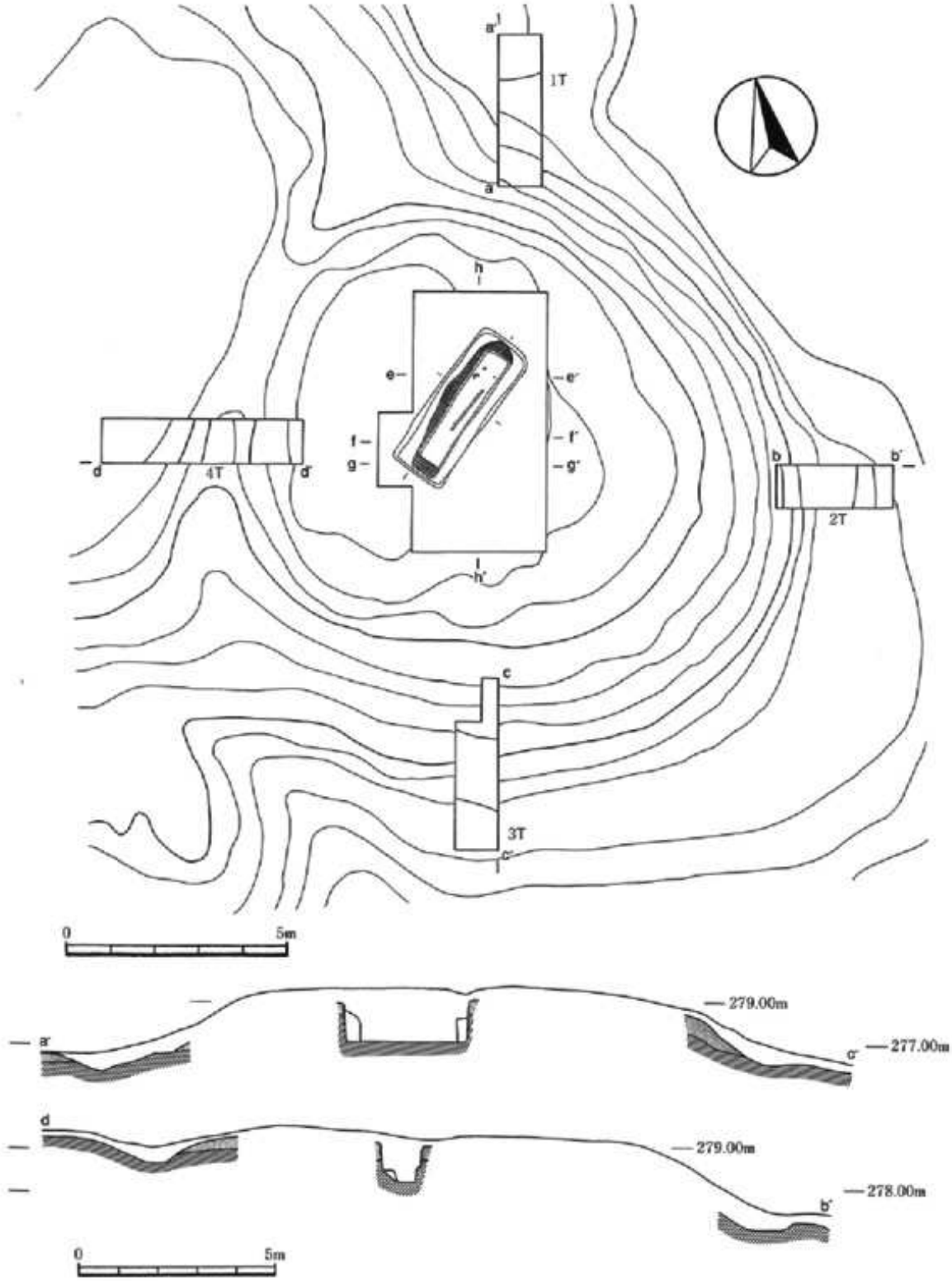
墳頂平坦面の中央には浅いくぼみがあった。ただし後述するように、これは主体部の腐朽に伴う土層の陥没によるものではなく、墳頂中央部に存在した性格不明のピットによるものであった。

墳丘の規模を確定することを目的として4本のトレンチを設定した。この設定は、墳頂の平坦面の中心を原点とし、四方に軸を設定して行なった（第28図）。

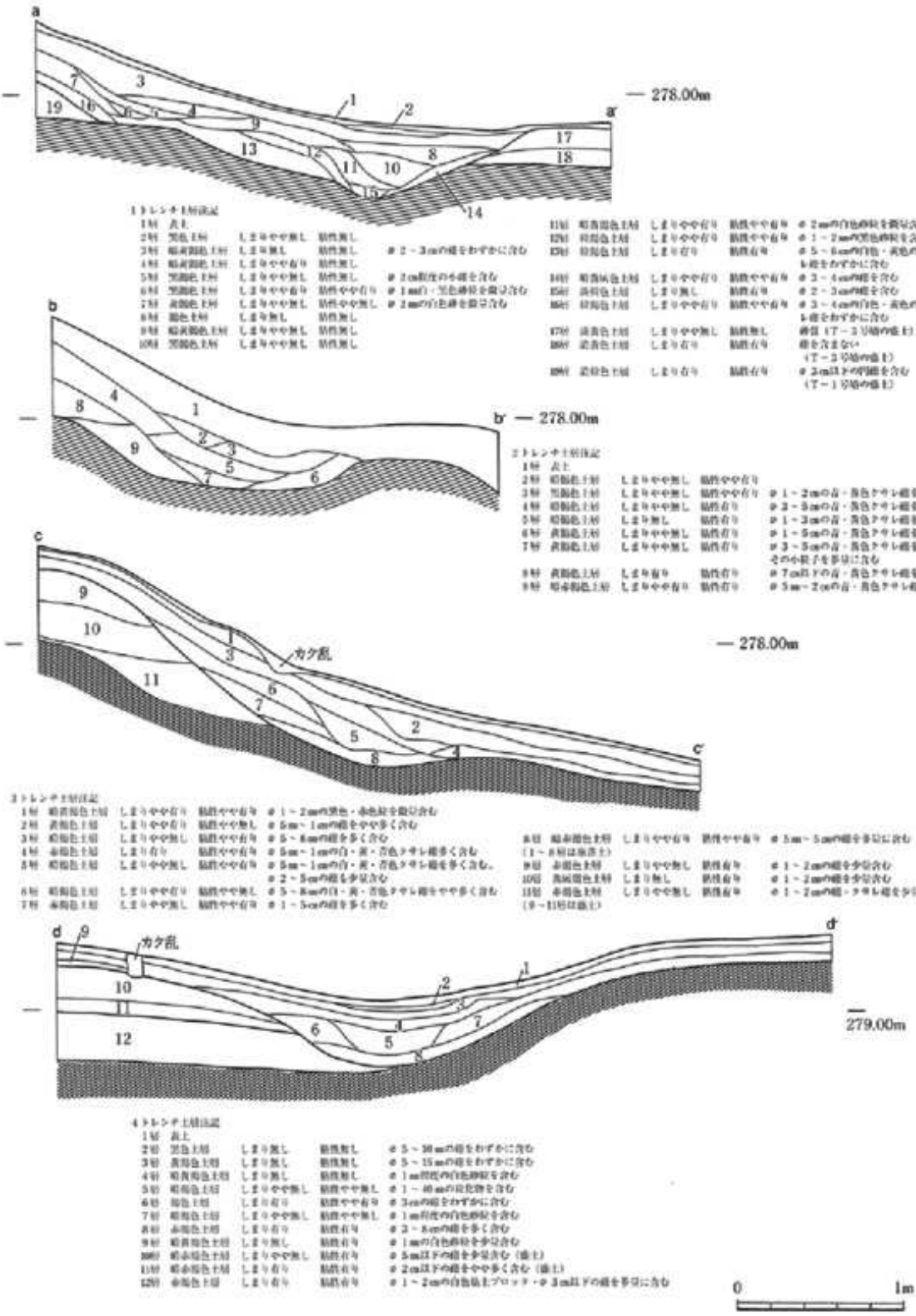
1トレンチは、墳丘の北側にT－1号墳の墳裾・盛土開始面および周溝の検出、表面観察によってみてとれたT－3号墳との周溝の切り合い関係の検証を目的として設定した。



第27図　T－1号墳墳丘周辺地形測量図



第28図　T－1号墳トレンチ配置図及び墳丘エレベーション図



第29図　Ｔ－１号墳セクション図（1）

調査の結果、周溝は地山を掘り込んでつくられていた。第19層は盛土である。そこから北側に0.45 mほど地山を整形したテラスが伸び、周溝が切られている。第13がT－1号墳の周溝の覆土である。また、第14・12・15・11・10層はT－3号墳の周溝に覆土である。セクション図からは地表の観察と同じ結果が得られた。T－1号墳の周溝の幅はこのような理由から測定できないが、墳裾は標高277.48 m付近に求められ、盛土開始面は、標高277.84 m付近である。

2トレンチは、墳丘の東側に墳裾・盛土開始面および周溝の検出を目的として設定した。

調査の結果、周溝は地山を掘り込んでつくられていた。周溝の規模は、下端が約1.0 m、上端は標高277.80 m付近で約1.35 mである。墳裾は277.66 mに求められ、盛土開始面はトレンチ内では確認できなかった。

3トレンチは、墳丘の南側に墳裾・盛土開始面および周溝の検出を目的として設定した。

調査の結果、周溝は地山を掘り込んでつくられていた。周溝の規模は、下端が約0.4 m、上端は標高277.30 m付近で約0.7 mであった。墳裾は標高277.30 m付近に求められ、盛土開始面は標高277.50 mである。第11・10・9層は盛土である。

4トレンチは、墳丘の西側に墳裾・盛土開始面および周溝の検出を目的として設定した。

調査の結果、周溝は地山を掘り込んでつくられていた。第12・11・10層は自然地形の堆積土である。周溝の規模は、下端が約0.6 m、上端は標高278.00 m付近で約1.70 mである。墳裾は標高277.78 m付近に求められる。盛土開始面は明瞭には認識できなかった。

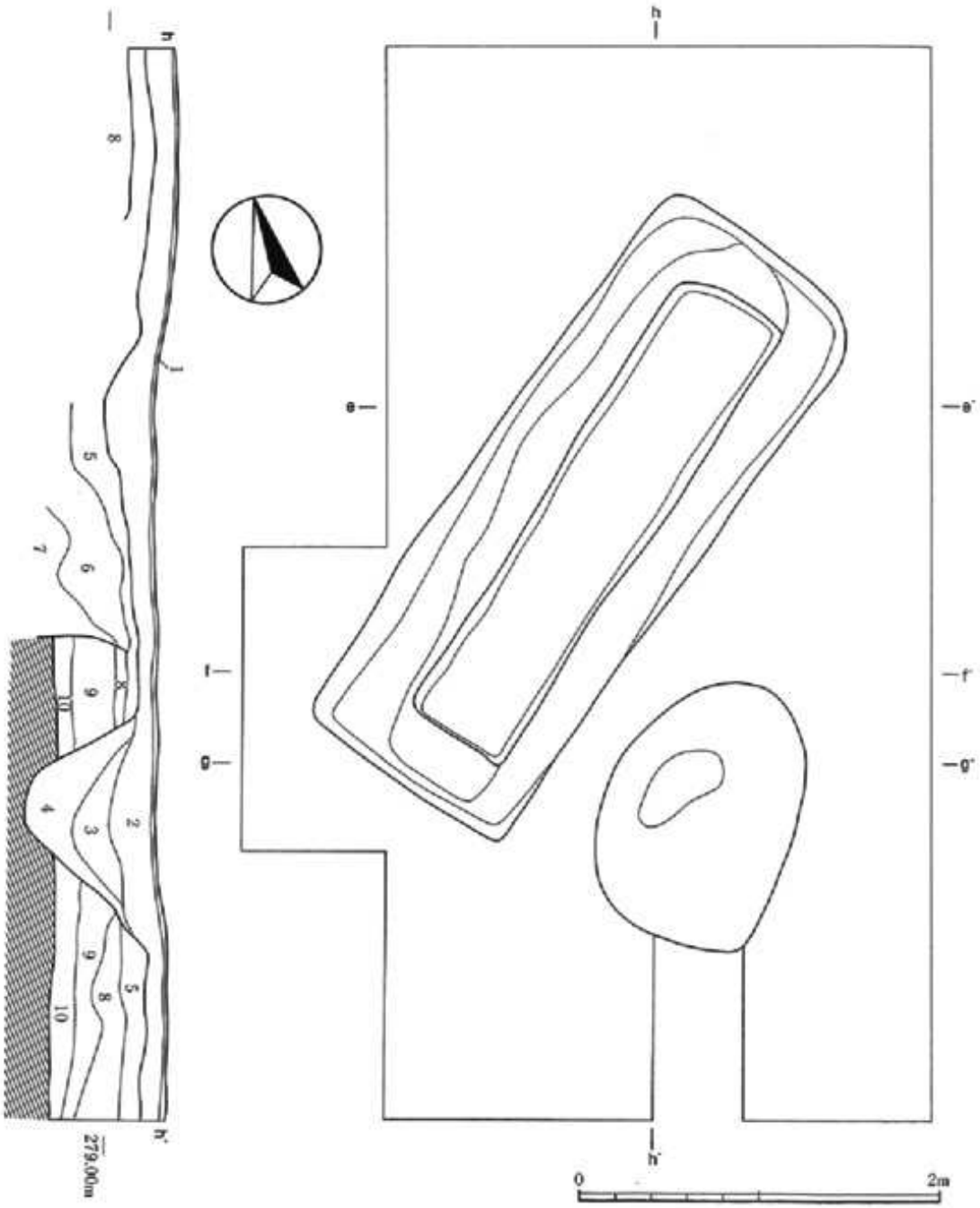
盛土の方法については、墳頂調査区のセクションでは水平に積まれている状態を確認したにとどまる。

以上みてきたところを総合すると、墳裾は1トレンチで標高277.48 m、2トレンチで277.66 m、3トレンチで277.30 m、4トレンチで277.78 mである。レベルは一様ではなく、自然傾斜にそっていると考えるのが妥当デあろう。

これらの墳丘各所に設定したトレンチのデータから墳丘の規模が確定できた。以下に記す。

墳丘規模　　南　北　15.9 m　　東　西　14.7 m

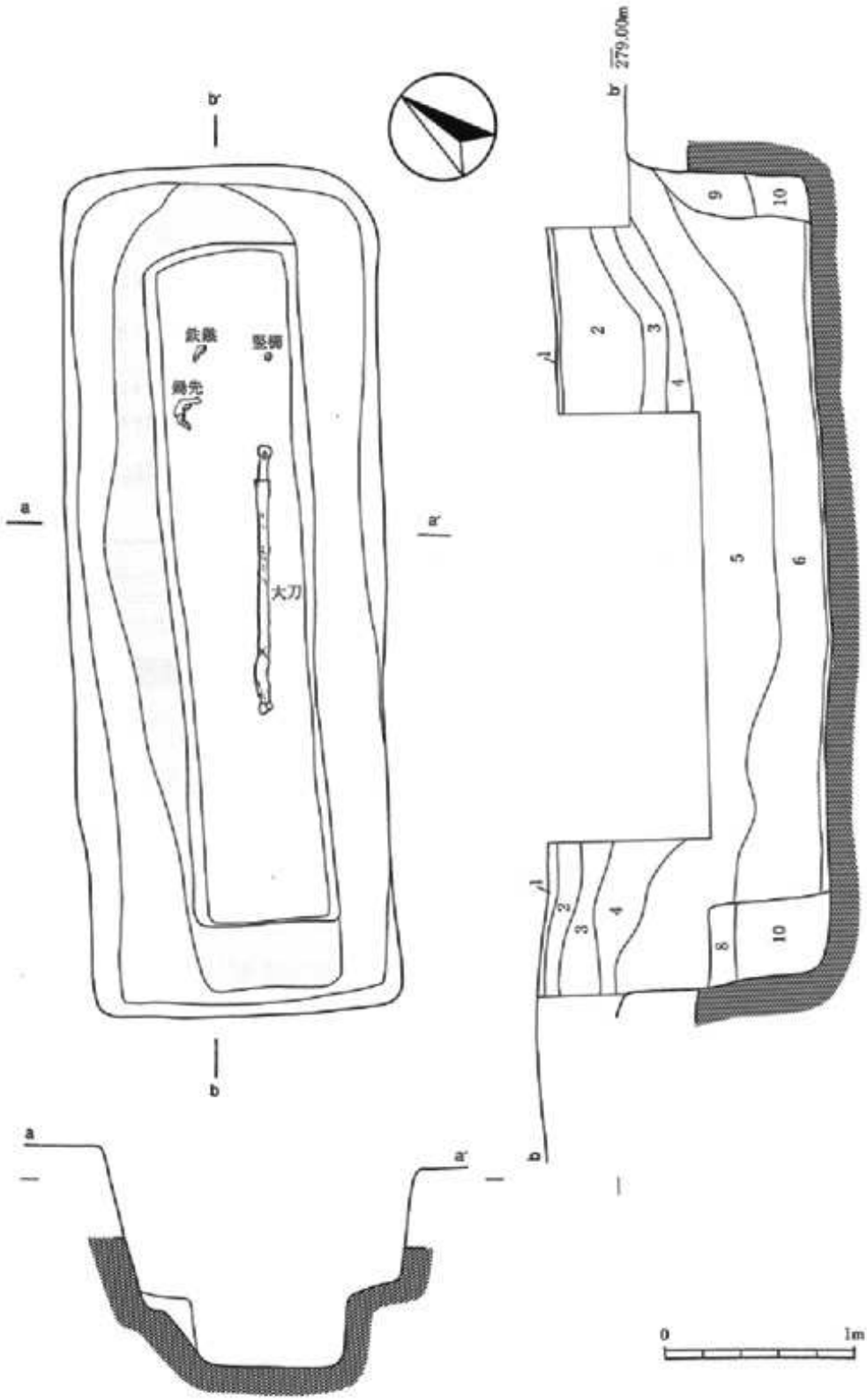
墳丘高　1.8 m（2トレンチ墳裾から計測）



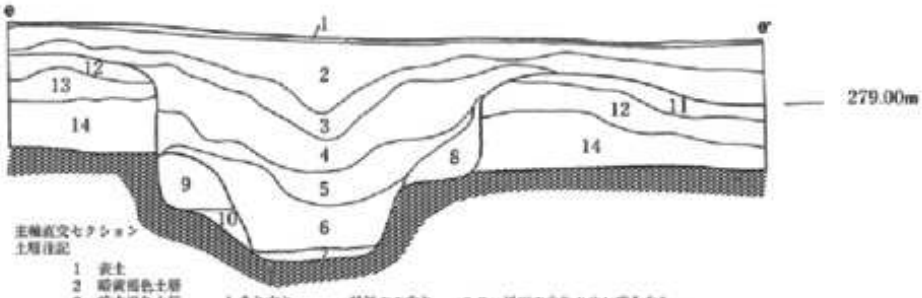
墳丘主軸セクション

1層	表土			
2層	暗黄褐色土層			
3層	黒褐色土層	しまりやや有り	粘性無し	φ3cm以下の白色・黒色粒子を微量含む　ピット内自然堆積土
4層	暗赤褐色土層	しまりやや有り	粘性有り	φ1－3cmの白色・黄色クサレ礫を含む　ピット内埋土
5層	暗赤褐色土層	しまり有り	粘性無し	φ2cm以下の白色クサレ礫を少量含む
6層	赤褐色土層	しまり有り	粘性やや有り	φ3cm以下の白色・黄色・濃緑色クサレ礫を含む（基盤粘土）
7層	橙褐色土層	しまり無し	粘性有り	φ2cm以下の白色・黄色・濃緑色・赤色クサレ礫を多量に含む（基盤粘土）
8層	淡黄白色土層	しまり有り	粘性無し	φ5mm以下の濃緑色クサレ礫を少量含む（盛土）
9層	赤褐色土層	しまり有り	粘性やや有り	φ3mm以下の黄・白色のクサレ礫を少量含む（盛土）
10層	淡赤褐色土層	しまりやや有り	粘性有り	φ5cm以下の白色・濃緑色・橙褐色のクサレ礫を多量に含む（盛土）

第30図　T－1号墳墳頂平面図及び主軸セクション図

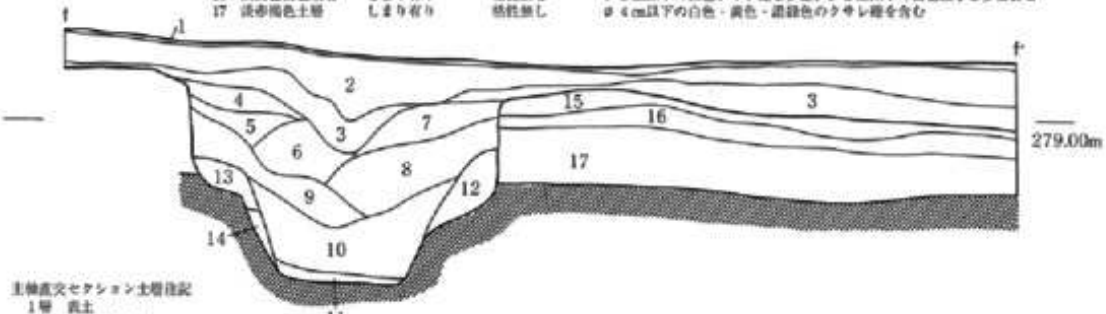


第31図　T－1号墳主体部平面図及びエレベーション図



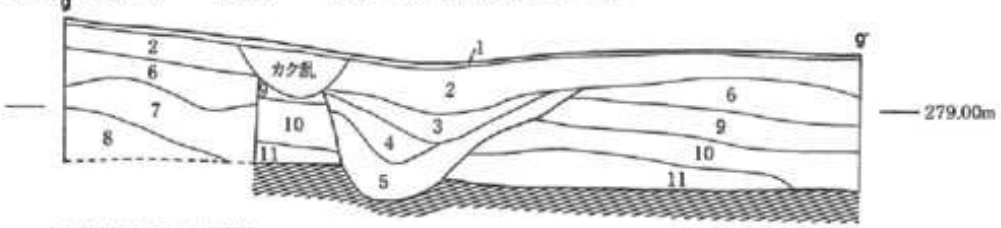
主軸直交セクション
土層注記

1	表土				
2	暗黄褐色土層				
3	暗赤褐色土層	しまり有り	粘性やや有り	φ 2cm以下の白色クサレ礫を含む	
4	赤褐色土層	しまり有り	粘性やや有り	φ 3cm以下の白色・黄色クサレ礫含む	
5	淡赤褐色土層	しまりやや有り	粘性有り	φ 3cm以下の白色クサレ礫を含む	
6	淡赤褐色土層	しまり無し	粘性有り	φ 3cm以下の白色粒子を少量、まれにφ 5cm以下の礫を少量含む	
7	赤褐色土層	しまり有り	粘性やや有り	φ 2cm以下の白色・黄色・濃緑色クサレ礫を含む	
8	赤褐色土層	しまりやや有り	粘性有り	φ 3cm以下の白色・黄色・濃緑色クサレ礫を多量含む	
9	淡赤褐色土層	しまりやや有り	粘性有り	φ 3cm以下の白色・黄色・濃緑色クサレ塊を含む	
10	暗褐色土層	しまり無し	粘性やや有り	φ 5cm以下の礫、φ 2cm以下の白色・黄色クサレ礫を多量含む	
11	暗褐色土層	しまり弱	粘性有り	φ 2cm以下の小礫を少量含む	
12	褐褐色土層	しまり有り	粘性やや有り	φ 2cm以下の白色・黄色・濃緑色、赤色のクサレ礫を多量含む	
13	赤褐色土層	しまり有り	粘性有り	φ 3cm以下の白色・黄色クサレ礫を多量含む	
14	赤褐色土層	しまり有り	粘性有り	φ 5cm以下の黄色・濃緑色のクサレ礫を少量含む	
15	赤褐色土層	しまり有り	粘性やや有り	φ 5cm以下の白色・黄色・濃緑色のクサレ礫を多量含む	
16	淡黄色白色土層	しまり有り	粘性無し	φ 3cm以下の白色クサレ礫を少量、φ 3mm以下の白色粒子を多量含む	
17	淡赤褐色土層	しまり有り	粘性無し	φ 4cm以下の白色・黄色・濃緑色のクサレ礫を含む	



主軸直交セクション土層注記

1号	表土			
2号	暗黄褐色土層			
3号	暗赤褐色土層	しまり有り	粘性やや有り	φ 2cm以下の白色クサレ礫を含む
4号	赤褐色土層	しまり有り	粘性やや有り	φ 3cm以下の白色・黄色クサレ礫を含む
5号	淡赤褐色土層	しまりやや有り	粘性有り	φ 3cm以下の白色クサレ礫を含む
6号	淡赤褐色土層	しまり無し	粘性有り	φ 3mm以下の白色粒子を少量・まれに5、以下の礫を少量含む
7号	赤褐色土層	しまり有り	粘性やや有り	φ 2cm以下の白・黄・濃緑色のクサレ礫を含む
8号	赤褐色土層	しまり有り	粘性有り	φ 3cm以下の白・黄・濃緑色のクサレ礫を含む
9号	淡赤褐色土層	しまりやや有り	粘性有り	φ 3cm以下の白・黄・濃緑色のクサレ礫を含む
10号	暗褐色土層	しまり無し	粘性やや有り	φ 5cm以下の礫・φ 2cm以下の白・黄クサレ礫を多量に含む
11号	暗褐色土層	しまりやや無し	粘性有り	φ 2cm以下の小礫を少量含む
12号	褐褐色土層	しまり有り	粘性やや有り	φ 2cm以下の白・黄・赤・濃緑色のクサレ礫を含む
13号	赤褐色土層	しまり有り	粘性有り	φ 3cm以下の白・黄色クサレ礫を多量に含む
14号	赤褐色土層	しまり有り	粘性有り	
15号	赤褐色土層	しまり有り	粘性やや有り	φ 5cm以下の黄・濃緑色のクサレ礫を少量・5mm以下の白・黄・濃緑色のクサレ礫を含む
16号	淡黄白色土層	しまり有り	粘性無し	φ 3cm以下の白色クサレ礫を少量・3mm以下の白色粒子を多量に含む
17号	淡赤褐色土層	しまり有り	粘性有り	φ 4cm以下の白・黄・濃緑色のクサレ礫を含む



墳丘主軸直交セクション土層注記

1号	表土			
2号	暗黄褐色土層			
3号	黒褐色土層	しまりやや有り	粘性無し	φ 3mm以下の白色粒子・炭化物粒子を含む
4号	暗茶褐色土層	しまりやや有り	粘性やや有り	φ 5mm以下の白色粒子・φ 1cm炭化物粒子を少量含む
5号	暗赤褐色土層	しまりやや有り	粘性有り	φ 2cm以下の白色・黄色のクサレ礫を含む
6号	暗赤褐色土層	しまり有り	粘性無し	φ 2cm以下の白色・黄色、濃緑色クサレ礫を含む
7号	淡赤褐色土層	しまりやや有り	粘性やや有り	φ 3cm以下の白色・黄色・赤色クサレ礫を多量に含む・砂質土を含む
8号	褐褐色土層	しまり無し	粘性有り	φ 3cm以下の白色・黄色・濃緑色のクサレ礫を多量に含む。砂質土多し。

第32図　T－1号墳セクション図 (2)

主体部

T－1号墳の主体部は、墳丘表土直下の盛土を掘り込んでつくっていた（第31・32図）。e－e′セクションの第12・11層、f－f′セクションの第15層がその掘り込み面である。墓壙の形状の平面形は隅丸長方形で、両側面には段をもつ。上端で長軸4.82 m、短軸は1.82 mであった。

木棺は、この墓壙の南側の側面に押し付けられていたようである。墓壙の段の上面のレベルで精査を行なうと、南側は地山が検出されるが、残る3方向では、非常にやわらかい陥没土の周辺に、粘性のある締まった土層が検出された。これは墓壙の南側側面の段に接して木棺を設置したときに生じた間隙をうめる詰め土である。主体部主軸セクションの第10・9・8層がそれであり（第31図）、主軸直交セクションの第14・13層がそれである（第32図）。

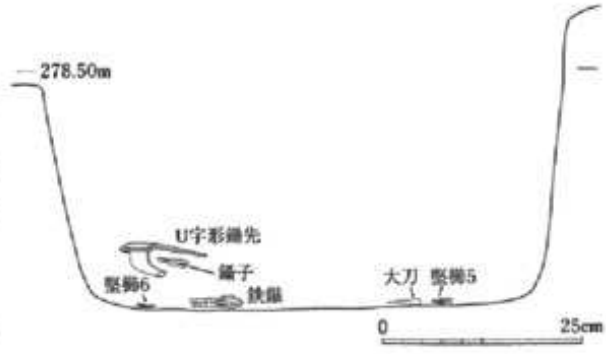
これらの状況から、木棺は全く遺存していないが、この陥没土を除去した状況を木棺痕として解釈した場合、木棺の規模は長軸約3.80 m、短軸約0.80 mである。高さに関しては復原の材料を得られなかったが、墓壙の段の付近に蓋がくると推定すると、約0.40 mとなる。実際にはもう少し高かったと考えるのが適当だろう。

墓壙の主軸はN－58°－Eである。木棺痕の短軸の東側が若干広いこと、副葬品の置き方などから、頭位は東方向と考えるのが妥当であろう。

副葬品の出土状況

T－1号墳の副葬品は、棺内遺物と棺上遺物に分かれる。棺内遺物は大刀・鉄鏃・竪櫛である。棺上遺物はU字形鋤先と鑷子である（第33図）。

大刀は木棺痕内の南側側壁にそって出土した。竪櫛は東端付近、鉄鏃も同様で



第33図　T－1号墳主体部副葬品出土状況図

ある。これらの遺物と木棺痕の底部である地山面との間には2cm程度の間層が均一に存在した。木棺の底部の腐朽した層と考えるのが妥当だろうか。また、これとは逆に木棺の東端から出土したU字形鋤先とその下部にあった鑿子と棺床との間には6～8cm程度の間層があった。土層を精査すると第33図の第6層の範疇にはいるものであった。U字形鋤先を棺上遺物としてとらえた理由である。

副　葬　品（第34図）

T－1号墳からの副葬品として確認できたものに大刀、U字形鋤先、鉄鏃、鑿子（じょうし）、竪櫛、不明鹿角製品がある。

大刀は平造りの鉄刀である。刀身は比較的良く残存しているが、茎は大部分がフレーク状に砕けており原形を復元することができず、茎尻だけが辛うじて形を保っている。

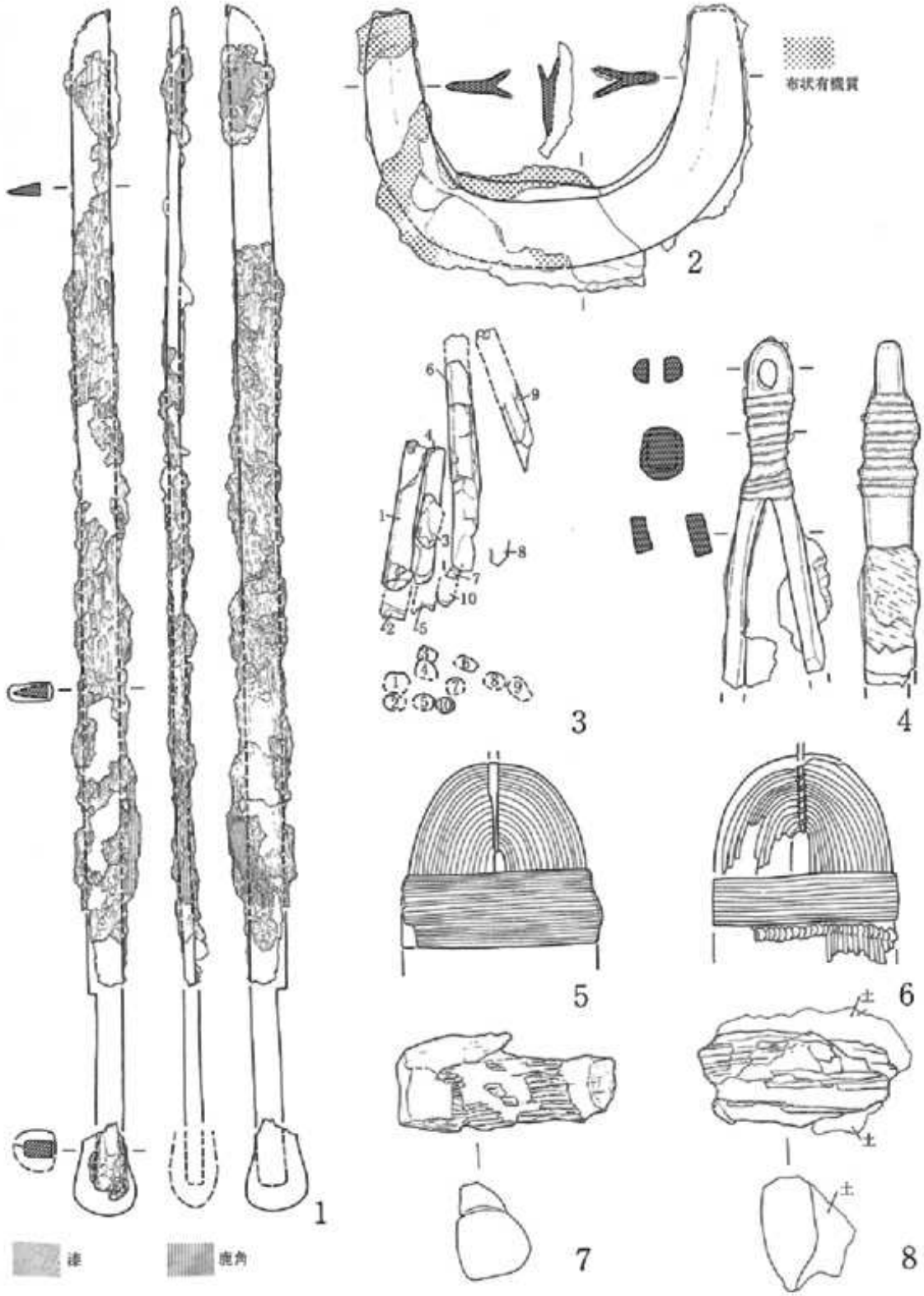
棺内遺物であり出土時の状況はほぼ副葬時の位置を保っていると考えられる。鋒から茎尻までの全長は出土状況からの推定で106.8cmである。表面とX線の観察では残存部で関を確認することができなかったので、関はフレーク状に砕けた部分に収まると思われる。この場合刀身長は87.7cm以上となる。身幅は身元で3.3cm、最大で3.5cmである。茎長は19.1cm以下で茎幅は確認できる部分の最大で3.3cm、茎厚は同様で1.6cmである。各部の形態についても推定の域を出ないが、茎尻については栗尻になるのであろうか。

鞘は、樹種は不明だが、表面で部分的に漆が観察できる。柄は木製の簡素な作りであったと考えられる。腐朽により木部は殆ど残存しないが、茎尻の周囲で頭椎形に土質の違う土が観察でき、これが柄頭に相当すると考えられる。

U字形鋤先は全長7.7cm、全幅12.3cmである。刃部は先端に近いほど鋭利で側面に至っては鈍になる。断面はU字の内側が二股に分かれるY字形を呈する。U字の内側には木質が観察でき、木目は刃に平行している。また、刃部を包み込むように布が付着している箇所がある。

鉄鏃は、劣化が著しい棒状の鉄が束になった状態で出土したもので、最低10個体が確認できる。刃部は認められないが、断面の観察で鉄の周囲に矢柄と思われる有機質が確認できるので、鉄鏃の茎と判断した。1本1本が近接しており、副葬時は束ねられた状態であったことが想像できる。

鑿子（じょうし）は毛抜き状の鉄製品で、1個体が出土した。細い棒状の鉄を中央で折



第34図　T－1号墳出土遺物実測図（1、S＝1/6　2～3、S＝1/2　4～8、S＝1/1）

り返し、輪環を残しながら折り返し部を針金状の鉄で丹念に巻き付けたもので、端部は平板に整形しているようだ。先端の形態は欠損しているので不明である。

竪櫛は2個体が確認できた。第35図の5に示したものは結縛頭部の表面の漆膜だけが残存したものである。16本の細く裂いた竹と思われる材を中央で結縛し、U字形に曲げたうえでさらに糸で1.1cmの幅を巻き付けたものであり、歯は計32本と考えられる。中央の結縛方法は不明である。法量は全幅が3.0cmである。6に示したものは部分的に竹材が残っていた。中央の結縛は軸を設けており、この軸と竹材を糸で縛っている。U字に曲げたうえで、横方向に糸を巻く点は5と同様で、巻き付けの幅は0.7cmである。さらにこの糸の歯寄りに横木を当てていたことが遺存した漆膜の形状から想像できる。歯は5と同様に32本で、全体の幅は、2.8cmである。

この他に、鹿角と思われる有機物が確認されているが、用途等は不明である。

時　　期

T－1号墳の築造年代は、副葬品のセットから5世紀後半以降であると推測される。

第4章　下小松古墳群分布調査

第1節　下小松古墳群分布調査報告

1　調査に至る経緯

下小松古墳群については、川西町教育委員会によって1985年に分布調査が行なわれており、前方後円墳15基を含む約200基の古墳が確認されていた。しかし、その後未確認の古墳が新たに数基確認されたことなどから、再度古墳群全体の分布調査を実施することとなった。

2　調査内容

調査は1998年11月4日～11月7日にわたって、下小松古墳群において現在確認されている3つの支群（小森山支群・鷹待場支群・薬師沢支群）を対象として実施した。墳丘は墳頂部に顕著な陥没が見られるものが多いが、これらは発掘調査の結果から、木棺直葬の主体部が木棺の腐朽にともなって陥没したものである可能性が高いことが分かっており、今回の調査ではこのような陥没の有無・陥没の規模の計測も併せて行なった。さらに、墳丘の築造に際し、尾根の斜面に土を盛り、斜面上方から見るとほとんど土を盛っていないようにみえる、いわゆる山寄せによる墳丘築造がなされている古墳が数多くみられたため、このような築造方法についても確認した。なお、前回の川西町による分布調査での古墳名称との整合については凡例に示した通りである。

3　結　果

調査の結果、下小松古墳群は総数179基で、前方後円墳19基、円墳122基、方墳38基であることが判明した。古墳の規模についてみてみると、前方後円墳は33mのK－50（第78）号墳が最大であるが、これ以外は全長が20～25mで、後円部直径が23m内外に収まるものがほとんどであり、規模にほとんど差がないという点が指摘できる。円墳・方墳についても、直径（一辺）5～20mであり、その規模はさまざまであるが、8～13m程度のものが大多数である。

小森山支群では、前方後円墳17基、円墳58基、方墳9基の計84基が確認された。小森

山支群は他の2支群と比較して、前方後円墳の比率が高い点が注目される。前方後円墳は尾根に平行して築造されており、いずれも後円部を東あるいは北東にむけている。ほとんどの古墳は尾根の主脈とそこから派生する尾根上の周辺にまんべんなく築造されているが、K－1～K－5号墳が存在する尾根では、これら5基は斜面に築造され、尾根上には古墳は存在していない。

鷹待場支群では前方後円墳2基、円墳23基、方墳17基の計42基が確認された。この支群では、方墳の比率が高い点が特徴として挙げられる。また、この支群では尾根ごとに集中して古墳が築造されており、そこから派生する尾根には古墳は築造されておらず、いくつかのグループとしてまとめうる。まず、いちばん南側に位置するT－40号とT－41号墳のグループ、その北に位置するT－19～23、T－42号墳のグループ、T－1～T－7号墳のグループ、T－26～T－33のグループ、東側に位置するT－10～T－17のグループ、西側に位置するT－10～T－17のグループの5グループである。これらのグループには必ず方墳が含まれている。なお、T－9、T－24、T－25号墳は位置的にはT－1～T－6号墳の存在する尾根に近いが、やや降りた場所に築造されており、同じグループに含めて考えることは難しい。また、T－18号墳とT－34号墳は単独で尾根から離れた斜面に存在している。

薬師沢支群には前方後円墳が存在せず、円墳40基と方墳12基の計52基で構成されている。尾根の最高所に大型の方墳が2基築造され、その東側に派生する尾根の先端に下小松古墳群中最大の円墳であるY－51（第145）号墳（直径23 m）が存在する。

4　ま と め

今回の調査の結果、下小松古墳群は円墳を主体とし、方墳・前方後円墳を含む古墳群であることが判明したが、支群ごとに墳形の構成は大きく異なっている。小森山支群では円墳が69%、方墳が11%に対し、前方後円墳が20%を占めている。鷹待場支群では、円墳が55%、方墳が40%、前方後円墳が5%という構成である。薬師沢支群では、先に指摘したように、前方後円墳が存在せず、円墳77%、方墳23%である。さらに小森山支群では、前方後円墳が尾根上の好条件の位置に築造され、中心的な存在になっているのに対し、鷹待場支群では、前方後円墳であるT－9号墳は、尾根上ではなくそれよりも低い位置に築造されており、規模も小さい。この支群では、むしろ方墳が尾根の先端などの好立地に築

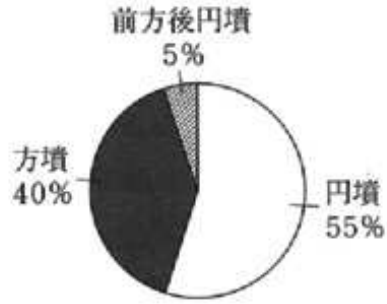
造されている。薬師沢支群でも尾根上の中心には大型の方墳が位置し、大型円墳は尾根の斜面下部に立地する。このように下小松古墳群はさまざまな特色をもつ古墳群であり、今後古墳の年代なども含めその内容についてさらに調査をしていく必要があるといえるだろう。

下小松古墳群墳形構成

円　墳	方　墳	前方後円墳	計
122	38	19	179

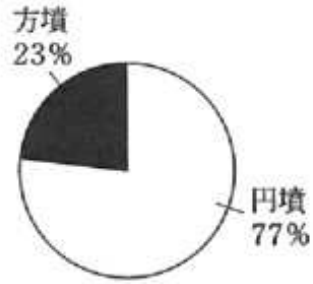
小森山支群

円　墳	方　墳	前方後円墳	計
58	9	17	84



鷹待場支群

円　墳	方　墳	前方後円墳	計
24	17	2	43



薬師沢支群

円　墳	方　墳	前方後円墳	計
40	12	0	52

第1表　下小松古墳群墳形構成表

凡　　例

1　本調査は、明治大学考古学研究室と川西町教育委員会とが1998年11月4日～11月7日にわたって実施した、下小松古墳群分布調査の成果である。

2　本報告以後、古墳の呼称法は原則として以下のとおりとする。

各支群の頭文字の大文字アルファベット－各支群内での古墳の通し番号

現在までのところ認識されている支群には、小森山支群・鷹待場支群・薬師沢支群があり、それぞれの略称をK・T・Yとする。したがって、例えば、薬師沢支群の古墳の通し番号11番目の古墳であるならば、Y－11号墳と表記する。

ただし、以下に述べる理由から、この原則を採らないものがある。

3　上の原則に従わない場合がある。以下にその全体的な理由を示したあと、個別の理由および呼称法を記す。

眺山丘陵における墳丘群を古墳群として認め、その調査を行なってきた経緯のなかで公刊された報告書には以下のものがある。

文献1　川西町教育委員会　1984『山形県川西町　分布調査報告書』
川西町埋蔵文化財調査報告書第7集

文献2　川西町教育委員会　1986『山形県川西町下小松墳丘群小森山支群　第61・64号墳調査報告書』
川西町埋蔵文化財調査報告書第10集

文献3　川西町教育委員会　1987『山形県川西町下小松墳丘群鷹待場支群　第105・106・186号墳調査報告書』
川西町埋蔵文化財調査報告書

文献4　川西町教育委員会　1988『山形県川西町下小松墳丘群薬師沢支群　第143・145号墳調査報告書』
川西町埋蔵文化財調査報告書第12集

文献5　川西町教育委員会　1989『山形県川西町下小松古墳群小森山支群　第65号

前方後円墳調査報告書』
川西町埋蔵文化財調査報告書第13集
文献6　大塚初重・小林三郎編　1995『山形県川西町下小松古墳群（1）』
東京堂出版

このうち、文献6は、文献2～5を再録するとともに新たに発掘した古墳の報告を加えて全体的な整理を行なったものである。

問題はこれらの報告書を刊行している間に、古墳番号に齟齬が生じてしまったことである。同一の墳丘に異なった番号を与えてしまったり、同一の番号を異なった墳丘に与えてしまったり、という事態がおこった。今、言い訳の言辞を重ねることはしないが、今後の混乱を避けるために以下の措置を採ることにした。その際の原則は、文献1の古墳番号は今後使用しないということである。

A　1997年までに発掘調査した古墳および文献2～6において発表した分布図に古墳番号を付与した古墳については基本的に新番号を採用するが、記録および学術利用上の混乱がおこることを避けるために、参考として括弧をつけて旧番号を示すことにした。例えば、鷹待場支群第106号墳であるなら、T－41（第106）号墳と表記する。ただし、前方後円墳にはこの方法を適用しない。

この場合に相当するのは以下の古墳である。

小森山支群

K－66(第33)号墳　K－38(第62)号墳　K－34(第63)号墳　K－37(第64)号墳
K－44(第66)号墳　K－45(第67)号墳　K－41(第68)号墳　K－39(第69)号墳
K－43(第71)号墳　K－35(第77)号墳　K－11(第96)号墳　K－10(第97)号墳
K－8（第99)号墳

鷹待場支群

T－40(第105)号墳　T－41(第106)号墳　T－42(第186)号墳

薬師沢支群

Y－48(第143)号墳　Y－51(第145)号墳

B　前方後円墳については、近藤義郎編『前方後円墳集成』東北・関東編（1994年　山川

出版社）において加藤稔氏が文献1の「下小松山古墳群一覧表」を引用して下小松古墳群の記述を行なっている。全国的な古墳研究の基本図書としての性格を考慮すると上記同様混乱を避けたい。古墳名をそのまま採用できればよいのだが、種々の理由により、それができない。したがって、できるだけ旧番号を採るようにして以下のように変更した。その対照表は以下のとおりである。

『集成』とは上記『前方後円墳集成』のことである。

文献1	文献2～5	文献6	新番号	今後の表記法
『集成』				
30号墳		40号墳	K－68号墳	K－68（第40）号墳
48号墳			K－75号墳	K－75（第48）号墳
50号墳			K－77号墳	K－77（第50）号墳
53号墳			K－61号墳	K－61（第53）号墳
58号墳			K－55号墳	K－55（第58）号墳
61号墳	61号墳	61号墳	K－36号墳	K－36（第61）号墳
62号墳	63号墳	63号墳	K－34号墳	K－34（第63）号墳
65号墳	65号墳	65号墳	K－42号墳	K－42（第65）号墳
67号墳	※1		K－53号墳	K－53号墳
69号墳	※2	72号墳	K－46号墳	K－46（第72）号墳
73号墳			K－31号墳	K－31（第73）号墳
75号墳			K－29号墳	K－29（第75）号墳
78号墳			K－50号墳	K－50（第78）号墳
87号墳			K－21号墳	K－21（第87）号墳
98号墳		98号墳	K－7号墳	K－7（第98）号墳
100号墳		100号墳	K－9号墳	K－9（第100）号墳

※1　文献5において、K－42（第65）号墳の後円部東側の円墳について文献1で前方後円墳に与えた番号を誤って使用している。

※2　文献2において、K－36（第61）号墳の後円部南東側の円墳について文献1

で前方後円墳に与えた番号を誤って使用している。

4　上記3の措置によって、文献1はその利用に著しい困難を伴うことになった。

本報告書刊行以後は、本報告の表記法・記載データに従っていただくことを要請するとともに、当時の台帳管理の不全から無用の混乱を引き起こしたことを深くお詫びしたい。

1. 小森山支群

古墳名	下小松古墳群　小森山支群　K－1号墳		
墳形	円墳	規模	11.3 m× 11 m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ 2.8 m（山寄せ）　陥没あり		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　小森山支群　K－2号墳		
墳形	円墳	規模	11.6 m× 11.2 m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ 1.6 m		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　小森山支群　K－3号墳		
墳形	円墳	規模	11.3 m× 12.2 m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ 2.9 m（山寄せ）　周溝あり		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　小森山支群　K－4号墳		
墳形	円墳	規模	径 12.3 m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ 3.1 m（山寄せ）　陥没あり　周溝あり		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　小森山支群　K－5号墳		
墳形	前方後円墳	規模	全長24.4m　後円部11m×14.5m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ3.3m　周溝あり		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　小森山支群　K－6号墳		
墳形	円墳	規模	7.9m×8m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ1.7m		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　小森山支群　K－7（第98）号墳		
墳形	前方後円墳	規模	全長26.5m　後円部径18m 前方部幅6.5m　くびれ部幅5.5m
主体部	木棺直葬	主体部規模	6.5m×2m
特徴	後円部高さ3m、前方部高さ1.5m　周溝あり		
出土遺物	土師器（杯2・甕）　須恵器（壷・高杯）　鞍		
調査歴	1990～1992年	備考	
参考文献	大塚初重・小林三郎編『山形県川西町　下小松古墳群(1)』1995年		

古墳名	下小松古墳群　小森山支群　K－8号墳		
墳形	方墳	規模	11.3m×11.7m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ1.3m　周溝あり		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　小森山支群　K－9（第100）号墳		
墳形	前方後円墳	規模	全長22 m（東西）　後円部15.3 m×16 m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ3.9 m　周溝あり		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　小森山支群　K－10号墳		
墳形	円墳	規模	14.7 m×13.4 m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ3.1 m　陥没あり　周溝あり		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　小森山支群　K－11号墳		
墳形	円墳	規模	径13 m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ3.0 m　周溝あり		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　小森山支群　K－12号墳		
墳形	円墳	規模	12.7 m×13.2 m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ2.6 m　陥没あり　周溝あり		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　小森山支群　K－13号墳		
墳形	円墳	規模	11.7 m×11.9 m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ3.7 m　陥没あり　周溝あり		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　小森山支群　K－14号墳		
墳形	方墳	規模	11.4 m×10.7 m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ1.6 m		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　小森山支群　K－15号墳		
墳形	円墳	規模	11.3 m×11.4 m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ2.0 m　陥没あり		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　小森山支群　K－16号墳		
墳形	円墳	規模	11.2 m×11.7 m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ1.2 m		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　小森山支群　K－17号墳		
墳形	円墳	規模	7.5 m×8.9 m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ2.1 m（山寄せ）　陥没あり　周溝あり		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　小森山支群　K－18号墳		
墳形	円墳	規模	径12.4 m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ2.4 m（山寄せ）　陥没あり（2カ所）　周溝あり		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　小森山支群　K－19号墳		
墳形	円墳	規模	11.3 m×12.2 m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ2.9 m（山寄せ）　周溝あり		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　小森山支群　K－20号墳		
墳形	円墳	規模	10.6×11.6
主体部		主体部規模	
特徴	高さ1.9 m　周溝あり		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　小森山支群　K－21（第87）号墳		
墳形	前方後円墳	規模	全長21.2m（東西） 後円部13.1m×15.3m　前方部幅7.8m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ3.61m（山寄せ）　陥没あり　周溝あり		
出土遺物			
調査歴		備考	山側の造りがT－9号墳と類似
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　小森山支群　K－22号墳		
墳形	円墳	規模	11.7m×12.0m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ1.9m（山寄せ）　陥没あり　周溝あり		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　小森山支群　K－23号墳		
墳形	円墳	規模	16m×16.3m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ3.0m　陥没あり　周溝あり		
出土遺物			
調査歴		備考	昭和初期に盗掘。鉄製品出土の伝承あり
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　小森山支群　K－24号墳		
墳形	円墳	規模	8.5m×7.5m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ1.5m（山寄せ）　陥没あり　周溝あり		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古　墳　名	下小松古墳群　小森山支群　K－25号墳		
墳　　形	円墳	規　　模	10.4 m× 10.2 m
主　体　部		主体部規模	
特　　徴	高さ2.4 m（山寄せ）　陥没あり　周溝あり		
出土遺物			
調　査　歴		備　　考	
参考文献			

古　墳　名	下小松古墳群　小森山支群　K－26号墳		
墳　　形	円墳	規　　模	9.6 m× 9.3 m
主　体　部		主体部規模	
特　　徴	高さ1.5 m（山寄せ）　陥没あり　周溝あり		
出土遺物			
調　査　歴		備　　考	
参考文献			

古　墳　名	下小松古墳群　小森山支群　K－27号墳		
墳　　形	円墳	規　　模	8.8 m× 8.3 m
主　体　部		主体部規模	
特　　徴	高さ2.3 m　陥没あり　周溝あり		
出土遺物			
調　査　歴		備　　考	
参考文献			

古　墳　名	下小松古墳群　小森山支群　K－28号墳		
墳　　形	円墳	規　　模	11 m× 11.8 m
主　体　部		主体部規模	
特　　徴	高さ2.0 m（山寄せ）　陥没あり		
出土遺物			
調　査　歴		備　　考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　小森山支群　K－29（第75）号墳		
墳形	前方後円墳	規模	全長21.4ｍ（東西）　後円部径12.5ｍ 前方部
主体部		主体部規模	
特徴	高さ2.8ｍ　陥没あり　周溝あり		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　小森山支群　K－30号墳		
墳形	円墳	規模	8.3ｍ×7.7ｍ
主体部		主体部規模	
特徴	高さ1.0ｍ　陥没あり　周溝あり		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　小森山支群　K－31（第73）号墳		
墳形	前方後円墳	規模	全長21ｍ（東西） 後円部径13.6ｍ×14ｍ　前方部幅5.2ｍ
主体部		主体部規模	
特徴	高さ1.9ｍ　陥没あり　周溝あり		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　小森山支群　K－32号墳		
墳形	円墳	規模	9.4ｍ×9.3ｍ
主体部		主体部規模	
特徴	高さ1.3ｍ　周溝なし		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　小森山支群　K－33号墳		
墳形	円墳	規模	5.5m×5.6m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ0.7m		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　小森山支群　K－34（第63）号墳		
墳形	前方後円墳	規模	全長22.2m（東西） 後円部径13.5m×14.4m　前方部幅6.5m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ2.5m　陥没あり　周溝あり		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　小森山支群　K－35（第77）号墳		
墳形	円墳	規模	直径6～6.5m
主体部	木棺直葬	主体部規模	2.7m×1.1m
特徴	高さ0.6m　周溝あり		
出土遺物	刀子1		
調査歴	1989年	備考	
参考文献	大塚初重・小林三郎編『山形県川西町　下小松古墳群(1)』1995年		

古墳名	下小松古墳群　小森山支群　K－36（第61）号墳		
墳形	前方後円墳	規模	全長25.5m（東西）　後円部径15m 前方部幅9m
主体部	木棺直葬2基	主体部規模	第1主体:3.5m×1.0m　第2主体:4.2m×1.0m
特徴	後円部高さ2m　前方部高さ1.4m　周溝あり		
出土遺物	周溝内：土師器杯・甕　第1主体：大刀1・環状鉄製品1・鉄鏃3 第2主体：鉇1・刀子1・鉄鏃1		
調査歴	1985年	備考	
参考文献	大塚初重・小林三郎編『山形県川西町　下小松古墳群(1)』1995年		

古墳名	下小松古墳群　小森山支群　K－37（第64）号墳		
墳形	円墳	規模	径7.5m
主体部	木棺直葬	主体部規模	2.5m×0.8m
特徴	高さ1.2m　周溝あり		
出土遺物	刀子1		
調査歴	1985年	備考	
参考文献	大塚初重・小林三郎編『山形県川西町　下小松古墳群(1)』1995年		

古墳名	下小松古墳群　小森山支群　K－38（第62）号墳		
墳形	円墳	規模	5.4m×4.5m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ1.7m		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　小森山支群　K－39（第69）号墳		
墳形	円墳	規模	9m×9.5m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ1.7m　周溝あり		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　小森山支群　K－40号墳		
墳形	円墳	規模	11.3m×11.9m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ3.2m（山寄せ）　陥没あり		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　小森山支群　K－41（第68）号墳		
墳形	円墳	規模	9.2 m×8.9 m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ1.5 m　陥没あり　周溝あり		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　小森山支群　K－42（第65）号墳		
墳形	前方後円墳	規模	全長22.3 m（東西）　後円部径14.5 m 前方部幅8.5 m　くびれ部幅6.9 m
主体部		主体部規模	
特徴	後円部高さ2.1 m　前方部高さ1.2 m　周溝あり		
出土遺物	周溝内：土師器壷・甕・杯		
調査歴	1988年	備考	主体部の調査せず
参考文献	大塚初重・小林三郎編『山形県川西町 下小松古墳群(1)』1995年		

古墳名	下小松古墳群　小森山支群　K－43（第71）号墳		
墳形	円墳	規模	9.3 m×9.5 m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ1.8 m		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　小森山支群　K－44（第66）号墳		
墳形	方墳	規模	9.1 m×9.4 m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ1.5 m　陥没あり　周溝あり		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　小森山支群　K－45（第67）号墳		
墳形	円墳	規模	11.8m×11.6m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ1.7m　陥没あり　周溝あり		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　小森山支群　K－46（第72）号墳		
墳形	前方後円墳	規模	全長22.4m（東西） 後円部径12.3m×14m　前方部幅10.1m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ2.4m　陥没あり　周溝あり		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　小森山支群　K－47号墳		
墳形	円墳	規模	8.7m×7.9m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ1.5m　周溝あり		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　小森山支群　K－48号墳		
墳形	円墳	規模	9.9m×9.2m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ3.1m（山寄せ）　陥没あり　周溝あり		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　小森山支群　K－49号墳		
墳形	方墳	規模	10.8 m× 10.4 m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ2.7 m（山寄せ）　陥没あり　周溝あり		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　小森山支群　K－50（第78）号墳		
墳形	前方後円墳	規模	全長33.8 m（南北） 後円部径22m× 17.3m　前方部幅14.5m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ4.4 m　陥没あり　周溝あり		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　小森山支群　K－51号墳		
墳形	円墳	規模	10 m× 10.9 m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ1.1 m		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　小森山支群　K－52号墳		
墳形	円墳	規模	9.3 m× 8.3 m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ0.9 m　周溝あり		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　小森山支群　K－53（第67）号墳		
墳形	前方後円墳	規模	全長21.7m（南北） 後円部径16m×14.3m　前方部幅7.5m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ2.8m　陥没あり		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　小森山支群　K－54号墳		
墳形	円墳	規模	8.6m×7.9m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ1.0m　陥没あり		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　小森山支群　K－55（第58）号墳		
墳形	前方後円墳	規模	全長20.8m（南北） 後円部径13m×11.6m　前方部幅6.2m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ1.6m　陥没あり　周溝あり		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　小森山支群　K－56号墳		
墳形	円墳	規模	12.8m×13.3m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ1.3m　陥没あり　周溝あり		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　小森山支群　K－57号墳		
墳形	円墳	規模	9.1 m× 10.0 m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ1.7 m　陥没あり　周溝あり		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　小森山支群　K－58号墳		
墳形	円墳	規模	径10.5 m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ2.1 m　周溝あり		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　小森山支群　K－59号墳		
墳形	円墳	規模	9.3 m× 9.5 m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ2.4 m　周溝あり		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　小森山支群　K－60号墳		
墳形	円墳	規模	14 m× 13.7 m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ2.2 m　周溝あり		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　小森山支群　K－61（第53）号墳		
墳形	前方後円墳	規模	全長23.3 m（東西） 後円部径14.8 m×15 m　前方部幅6.5 m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ2.6 m　陥没あり　周溝あり		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　小森山支群　K－62号墳		
墳形	方墳	規模	12.5 m×12.3 m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ1.5 m　陥没あり　周溝あり		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　小森山支群　K－63号墳		
墳形	円墳	規模	11.2 m×10.5 m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ3.0 m		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　小森山支群　K－64号墳		
墳形	円墳	規模	10.8 m×10.4 m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ2.7 m（山寄せ）　陥没あり		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　小森山支群　K－65号墳		
墳形	円墳	規模	11.6 m× 12.3 m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ 1.6 m		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　小森山支群　K－66（第33）号墳		
墳形	円墳	規模	10.1 m× 9.7 m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ 1.5 m		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　小森山支群　K－67号墳		
墳形	円墳	規模	15.7 m× 14.2 m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ 2.5 m　陥没あり　周溝あり		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　小森山支群　K－68（第40）号墳		
墳形	前方後円墳	規模	全長 21.9 m（南北）　後円部径 14 m 前方部幅 5 m　くびれ部幅 3.3 m
主体部	木棺直葬 2 基	主体部規模	西：6 m× 1.8 m　東：4.7 m× 1.1 m
特徴	後円部高さ 0.4 m　前方部高さ 0.2 m　周溝あり		
出土遺物	西側主体部：刀子 1　東側主体部：鉄刀 1・土師器（椀または杯）		
調査歴	1993 ～ 1994 年	備考	
参考文献	大塚初重・小林三郎編『山形県川西町 下小松古墳群(1)』1995 年		

古墳名	下小松古墳群　小森山支群　K－69号墳		
墳形	円墳	規模	9.9 m× 9.1 m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ 1.9 m		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　小森山支群　K－70号墳		
墳形	円墳	規模	11.3 m× 12.4 m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ 1.6 m　陥没あり		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　小森山支群　K－71号墳		
墳形	円墳	規模	11 m× 11.6 m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ 1.7 m　陥没あり　周溝あり		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　小森山支群　K－72号墳		
墳形	方墳	規模	9.9 m× 8.2 m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ 1.2 m　周溝あり		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古　墳　名	下小松古墳群　小森山支群　K－73号墳		
墳　　形	円墳	規　　模	7.7 m× 8.8 m
主　体　部		主体部規模	
特　　徴	高さ 0.93 m		
出土遺物			
調　査　歴		備　　考	
参考文献			

古　墳　名	下小松古墳群　小森山支群　K－74号墳		
墳　　形	円墳	規　　模	8.8 m× 9.2 m
主　体　部		主体部規模	
特　　徴	高さ 1.4 m		
出土遺物			
調　査　歴		備　　考	
参考文献			

古　墳　名	下小松古墳群　小森山支群　K－75（第48）号墳		
墳　　形	前方後円墳	規　　模	全長 18.5 m（南北） 後円部径 11.9 m× 10.5 m　前方部幅 5.1 m
主　体　部		主体部規模	
特　　徴	高さ 2.8 m　周溝あり		
出土遺物			
調　査　歴		備　　考	
参考文献			

古　墳　名	下小松古墳群　小森山支群　K－76号墳		
墳　　形	円墳	規　　模	10.5 m× 10.6 m
主　体　部		主体部規模	
特　　徴	高さ 1.5 m　陥没あり		
出土遺物			
調　査　歴		備　　考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　小森山支群　K－77（第50）号墳		
墳形	前方後円墳	規模	全長17.7m（南北） 後円部径12m×13.7m　前方部幅4.8m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ3.5m（山寄せ）　陥没あり　周溝あり		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　小森山支群　K－78号墳		
墳形	円墳	規模	7.6m×7.9m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ2.1m（山寄せ）　周溝あり		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　小森山支群　K－79号墳		
墳形	円墳	規模	7.1m×6.9m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ1.4m		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　小森山支群　K－80号墳		
墳形	円墳	規模	8.0m×8.6m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ1.5m（山寄せ）		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古　墳　名	下小松古墳群　小森山支群　K－81号墳		
墳　　形	方墳	規　　模	11.9 m× 12.9 m
主　体　部		主体部規模	
特　　徴	高さ 1.4 m　陥没あり		
出土遺物			
調　査　歴		備　　考	
参考文献			

古　墳　名	下小松古墳群　小森山支群　K－82号墳		
墳　　形	方墳	規　　模	11.6 m× 11.2 m
主　体　部		主体部規模	
特　　徴	高さ 1.9 m　陥没あり　周溝あり		
出土遺物			
調　査　歴		備　　考	
参考文献			

古　墳　名	下小松古墳群　小森山支群　K－83号墳		
墳　　形	方墳	規　　模	9.2 m× 9.8 m
主　体　部		主体部規模	
特　　徴	高さ 1.6 m（山寄せ）		
出土遺物			
調　査　歴		備　　考	
参考文献			

古　墳　名	下小松古墳群　小森山支群　K－84号墳		
墳　　形	円墳	規　　模	10.3 m× 10.8 m
主　体　部		主体部規模	
特　　徴	高さ 1.7 m（山寄せ）　陥没あり　周溝あり		
出土遺物			
調　査　歴		備　　考	
参考文献			

2. 鷹待場支群

古墳名	下小松古墳群　鷹待場支群　T－1号墳		
墳形	方墳	規模	14.7 m（東西）× 15.9 m（南北）
主体部	木棺直葬	主体部規模	3.8 m× 0.8 m
特徴	高さ 1.8 m		
出土遺物	大刀1・U字形鍬先1・竪櫛2・鏃子1・鉄鏃		
調査歴	1998年	備考	
参考文献	本書		

古墳名	下小松古墳群　鷹待場支群　T－2号墳		
墳形	円墳	規模	13.9 m× 13.5 m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ 0.5 m（山寄せ）　陥没あり　周溝あり		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　鷹待場支群　T－3号墳		
墳形	円墳	規模	7.6 m× 7.7 m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ 3.1 m（山寄せ）　周溝あり		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　鷹待場支群　T－4号墳		
墳形	方墳	規模	12.4 m× 12 m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ 1.5 m　陥没あり　周溝あり		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古　墳　名	下小松古墳群　鷹待場支群　T－5号墳		
墳　　形	円墳	規　　模	13.4 m× 13.6 m
主　体　部		主体部規模	
特　　徴	高さ 2.7 m（山寄せ）　陥没あり　周溝あり		
出土遺物			
調　査　歴		備　　考	
参考文献			

古　墳　名	下小松古墳群　鷹待場支群　T－6号墳		
墳　　形	円墳	規　　模	10.1 m× 10.4 m
主　体　部		主体部規模	
特　　徴	高さ 1.0 m		
出土遺物			
調　査　歴		備　　考	
参考文献			

古　墳　名	下小松古墳群　鷹待場支群　T－7号墳		
墳　　形	円墳	規　　模	6.7 m× 7.4 m
主　体　部		主体部規模	
特　　徴	高さ 1.3 m（山寄せ）		
出土遺物			
調　査　歴		備　　考	
参考文献			

古　墳　名	下小松古墳群　鷹待場支群　T－8号墳		
墳　　形	円墳	規　　模	7.2 m× 8.5 m
主　体　部		主体部規模	
特　　徴	高さ 1.9 m（山寄せ）　陥没あり　周溝あり		
出土遺物			
調　査　歴		備　　考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　鷹待場支群　T－9号墳		
墳形	前方後円墳	規模	全長19.7m　後円部径11.8m
主体部	木棺直葬	主体部規模	3.24m×0.72m
特徴	後円部高さ2m　前方部高さ1.2m（山寄せ）　陥没あり　周溝あり		
出土遺物	U字形鋤先1　鉄鏃多数		
調査歴	1997年	備考	
参考文献	本書		

古墳名	下小松古墳群　鷹待場支群　T－10号墳		
墳形	方墳	規模	14m×11.4m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ2.4m		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　鷹待場支群　T－11号墳		
墳形	方墳	規模	12m×11.5m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ2.2m（山寄せ）		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　鷹待場支群　T－12号墳		
墳形	円墳	規模	7.6m×8m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ2.5m（山寄せ）		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古　墳　名	下小松古墳群　鷹待場支群　T－13号墳		
墳　　形	方墳	規　　模	12.3 m× 11.5 m
主　体　部		主体部規模	
特　　徴	高さ 2.5 m（山寄せ）		
出土遺物			
調　査　歴		備　　考	
参考文献			

古　墳　名	下小松古墳群　鷹待場支群　T－14号墳		
墳　　形	方墳	規　　模	8.4 m× 10.1 m
主　体　部		主体部規模	
特　　徴	高さ 2.4 m（山寄せ）		
出土遺物			
調　査　歴		備　　考	
参考文献			

古　墳　名	下小松古墳群　鷹待場支群　T－15号墳		
墳　　形	円墳	規　　模	10.1 m× 8.1 m
主　体　部		主体部規模	
特　　徴	高さ 1.6 m（山寄せ）　周溝あり		
出土遺物			
調　査　歴		備　　考	
参考文献			

古　墳　名	下小松古墳群　鷹待場支群　T－16号墳		
墳　　形	円墳	規　　模	9.6 m× 4.8 m（現状削平のため）
主　体　部		主体部規模	
特　　徴	高さ 1.7 m（山寄せ）		
出土遺物			
調　査　歴		備　　考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　鷹待場支群　T－17号墳		
墳形	方墳	規模	12.9 m× 10.1 m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ2.5 m（山寄せ）		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　鷹待場支群　T－18号墳		
墳形	円墳	規模	7.4 m× 7.7 m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ1.8 m（山寄せ）　周溝あり		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　鷹待場支群　T－19号墳		
墳形	円墳（かなり不整形）	規模	9.4 m× 12.8 m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ0.9 m		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　鷹待場支群　T－20号墳		
墳形	方墳	規模	10.4 m× 8.3 m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ0.9 m		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古　墳　名	下小松古墳群　鷹待場支群　T－21号墳		
墳　　形	方墳	規　　模	12.3 m× 14.3 m
主　体　部		主体部規模	
特　　徴	高さ 1.1 m		
出土遺物			
調　査　歴		備　　考	
参考文献			

古　墳　名	下小松古墳群　鷹待場支群　T－22号墳		
墳　　形	方墳	規　　模	12.5 m× 13 m
主　体　部		主体部規模	
特　　徴	高さ 0.8 m（山寄せ）　周溝あり		
出土遺物			
調　査　歴		備　　考	
参考文献			

古　墳　名	下小松古墳群　鷹待場支群　T－23号墳		
墳　　形	円墳	規　　模	8.4 m× 10.5 m
主　体　部		主体部規模	
特　　徴	高さ 3.0 m（山寄せ）　陥没あり		
出土遺物			
調　査　歴		備　　考	
参考文献			

古　墳　名	下小松古墳群　鷹待場支群　T－24号墳		
墳　　形	円墳	規　　模	6.3 m× 7.2 m
主　体　部		主体部規模	
特　　徴	高さ 1.3 m		
出土遺物			
調　査　歴		備　　考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　鷹待場支群　T－25号墳		
墳形	円墳	規模	8.1m×9.1m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ2.5m（山寄せ）　周溝あり		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　鷹待場支群　T－26号墳		
墳形	方墳	規模	7m×10m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ1.8m		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　鷹待場支群　T－27号墳		
墳形	円墳	規模	径11m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ2.7m（山寄せ）　陥没あり　周溝あり		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　鷹待場支群　T－28号墳		
墳形	方墳	規模	5.4m×8.5m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ1.0m		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古　墳　名	下小松古墳群　鷹待場支群　T－29号墳		
墳　　形	円墳	規　　模	14.6 m× 17.1 m
主　体　部		主体部規模	
特　　徴	高さ 2.5 m　周溝あり		
出土遺物			
調　査　歴		備　　考	
参考文献			

古　墳　名	下小松古墳群　鷹待場支群　T－30号墳		
墳　　形	円墳	規　　模	9 m× 8.5 m
主　体　部		主体部規模	
特　　徴	高さ 0.9 m　陥没あり		
出土遺物			
調　査　歴		備　　考	
参考文献			

古　墳　名	下小松古墳群　鷹待場支群　T－31号墳		
墳　　形	円墳	規　　模	8.3 m× 8.9 m
主　体　部		主体部規模	
特　　徴	高さ 1.1 m　陥没あり		
出土遺物			
調　査　歴		備　　考	
参考文献			

古　墳　名	下小松古墳群　鷹待場支群　T－32号墳		
墳　　形	円墳に造り出し状の施設を持つ	規　　模	全長 11 m（東西）　円部 8 m× 11.4 m
主　体　部		主体部規模	
特　　徴	高さ 3.0 m		
出土遺物			
調　査　歴		備　　考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　鷹待場支群　T－33号墳		
墳形	方墳	規模	10.5 m× 9.5 m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ1.6 m　陥没あり		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　鷹待場支群　T－34号墳		
墳形	円墳	規模	径11.3 m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ1.9 m（山寄せ）　陥没あり　周溝あり		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　鷹待場支群　T－35号墳		
墳形	円墳	規模	11.6 m× 13.7 m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ1.1 m		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　鷹待場支群　T－36号墳		
墳形	方墳（東側に一辺1 mの張り出し）	規模	15 m× 16 m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ2.0 m		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　鷹待場支群　T－37号墳		
墳形	前方後円墳	規模	全長25.6 m　後円部径17×17.5 m 前方部幅9.9 m
主体部		主体部規模	
特徴	後円部高さ1.1 m　前方部高さ1.6 m		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　鷹待場支群　T－38号墳		
墳形	円墳	規模	13 m×12.6 m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ0.9 m　周溝は不明瞭		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　鷹待場支群　T－39号墳		
墳形	円墳	規模	10.3 m×10.7 m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ0.9 m　陥没あり　周溝あり		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　鷹待場支群　T－40（第105）号墳		
墳形	方墳	規模	11.5 m×7 m
主体部	不明	主体部規模	
特徴	高さ1.0 m		
出土遺物			
調査歴	1986年	備考	
参考文献	大塚初重・小林三郎編『山形県川西町　下小松古墳群(1)』1995年		

古墳名	下小松古墳群　鷹待場支群　T－41（第106）号墳		
墳形	方墳	規模	24 m（東西）×19.4 m（南北）
主体部	木棺直葬	主体部規模	6.65 m×1.7 m
特徴	高さ3.8 m		
出土遺物	大刀1・刀子1・ガラス小玉4・竪櫛1		
調査歴	1986・1995年	備考	
参考文献	大塚初重・小林三郎編『山形県川西町 下小松古墳群(1)』1995年、本書		

古墳名	下小松古墳群　鷹待場支群　T－42（第186）号墳		
墳形	方墳	規模	22 m（東西）×23 m（南北）
主体部	不明	主体部規模	
特徴	高さ5.15 m		
出土遺物	周溝内：土師器壷・甕・杯		
調査歴	1986・1996年	備考	
参考文献	大塚初重・小林三郎編『山形県川西町 下小松古墳群(1)』1995年、本書		

古墳名	下小松古墳群　鷹待場支群　T－43号墳		
墳形	円墳	規模	直径10 m以下（現状削平）
主体部		主体部規模	
特徴	削平をうけている		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

3. 薬師沢支群

古墳名	下小松古墳群　薬師沢支群　Y－1号墳		
墳形	方墳	規模	16.4 m× 18.8 m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ3.4 m　周溝あり		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　薬師沢支群　Y－2号墳		
墳形	方墳	規模	17.2 m× 18.7 m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ4.2 m　周溝あり		
出土遺物	須恵器甕（平安末～鎌倉）		
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　薬師沢支群　Y－3号墳		
墳形	方墳	規模	13.9 m× 14.9 m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ3.5 m　周溝あり		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　薬師沢支群　Y－4号墳		
墳形	円墳	規模	8.7 m× 8.8 m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ2.7 m（山寄せ）		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　薬師沢支群　Y－5号墳		
墳形	円墳	規模	11 m× 10.4 m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ2.7 m（山寄せ）　陥没あり　周溝あり		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　薬師沢支群　Y－6号墳		
墳形	円墳	規模	10.3 m× 9.4 m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ2.5 m（山寄せ）		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　薬師沢支群　Y－7号墳		
墳形	円墳	規模	10 m× 11.3 m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ2.0 m　周溝あり		
出土遺物			
調査歴		備考	東側縁辺に大きな撹乱
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　薬師沢支群　Y－8号墳		
墳形	円墳	規模	10.8 m× 14.5 m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ3.6 m（山寄せ）		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古　墳　名	下小松古墳群　薬師沢支群　Y－9号墳		
墳　　形	円墳	規　　模	9.6 m× 11.2 m
主　体　部		主体部規模	
特　　徴	高さ 2.1 m（山寄せ）		
出土遺物			
調　査　歴		備　　考	
参考文献			

古　墳　名	下小松古墳群　薬師沢支群　Y－10号墳		
墳　　形	円墳	規　　模	11.1 m× 9.8 m
主　体　部		主体部規模	
特　　徴	高さ 3.3 m（山寄せ）　周溝あり		
出土遺物			
調　査　歴		備　　考	
参考文献			

古　墳　名	下小松古墳群　薬師沢支群　Y－11号墳		
墳　　形	円墳	規　　模	8.8 m× 8.0 m
主　体　部		主体部規模	
特　　徴	高さ 1.9 m（山寄せ）　周溝あり		
出土遺物			
調　査　歴		備　　考	
参考文献			

古　墳　名	下小松古墳群　薬師沢支群　Y－12号墳		
墳　　形	円墳	規　　模	10.5 m× 9.2 m
主　体　部		主体部規模	
特　　徴	高さ 2.7 m（山寄せ）　周溝あり		
出土遺物			
調　査　歴		備　　考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　薬師沢支群　Y－13号墳		
墳形	円墳	規模	8.4 m×7.4 m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ3.6 m（山寄せ）　陥没あり　周溝あり		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　薬師沢支群　Y－14号墳		
墳形	円墳	規模	9.5 m×8.0 m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ2.3 m（山寄せ）　陥没あり		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　薬師沢支群　Y－15号墳		
墳形	円墳	規模	6.8 m×6.4 m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ2.7 m（山寄せ）　周溝あり		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　薬師沢支群　Y－16号墳		
墳形	円墳	規模	6.5 m×5.6 m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ2.0 m（山寄せ）		
出土遺物			
調査歴		備考	南東部削平
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　薬師沢支群　Y－17号墳		
墳形	円墳	規模	8.6 m×7.8 m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ2.4 m（山寄せ）		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　薬師沢支群　Y－18号墳		
墳形	円墳	規模	径9.1 m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ2.8 m（山寄せ）		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　薬師沢支群　Y－19号墳		
墳形	円墳	規模	6.5 m×8.2 m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ2.4 m（山寄せ）		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　薬師沢支群　Y－20号墳		
墳形	円墳	規模	10.7 m×9.7 m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ3.7 m（山寄せ）		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　薬師沢支群　Y－21号墳		
墳形	円墳	規模	9.3 m× 7.8 m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ2.7 m（山寄せ）		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　薬師沢支群　Y－22号墳		
墳形	方墳	規模	10.5 m× 11 m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ2.1 m（山寄せ）　陥没あり　周溝あり		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　薬師沢支群　Y－23号墳		
墳形	方墳	規模	7.2 m× 10.4 m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ2.1 m（山寄せ）　周溝あり		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　薬師沢支群　Y－24号墳		
墳形	円墳	規模	10.5 m× 9.4 m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ2.8 m（山寄せ）　陥没あり　周溝あり		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古　墳　名	下小松古墳群　薬師沢支群　Y－25号墳		
墳　　形	円墳	規　　模	11.8 m× 10.9 m
主　体　部		主体部規模	
特　　徴	高さ 3.5 m（山寄せ）		
出土遺物			
調　査　歴		備　　考	
参考文献			

古　墳　名	下小松古墳群　薬師沢支群　Y－26号墳		
墳　　形	円墳	規　　模	12 m× 11.1 m
主　体　部		主体部規模	
特　　徴	高さ 3.4 m（山寄せ）　陥没あり（3カ所）　周溝あり		
出土遺物			
調　査　歴		備　　考	
参考文献			

古　墳　名	下小松古墳群　薬師沢支群　Y－27号墳		
墳　　形	方墳	規　　模	13.8 m× 14.4 m
主　体　部		主体部規模	
特　　徴	高さ 3.5 m　陥没あり　周溝あり		
出土遺物			
調　査　歴		備　　考	
参考文献			

古　墳　名	下小松古墳群　薬師沢支群　Y－28号墳		
墳　　形	方墳	規　　模	17 m× 18.3 m
主　体　部		主体部規模	
特　　徴	高さ 3.5 m　陥没あり　周溝あり		
出土遺物			
調　査　歴		備　　考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　薬師沢支群　Y－29号墳		
墳形	方墳	規模	8.6 m×8.8 m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ3.4 m（山寄せ）　周溝あり		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　薬師沢支群　Y－30号墳		
墳形	円墳	規模	7.7 m×9.7 m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ2.2 m（山寄せ）		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　薬師沢支群　Y－31号墳		
墳形	円墳	規模	9.3 m×11.4 m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ3.4 m（山寄せ）　周溝あり		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　薬師沢支群　Y－32号墳		
墳形	円墳	規模	12.6 m×12.4 m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ3.4 m（山寄せ）		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古　墳　名	下小松古墳群　薬師沢支群　Y－33号墳		
墳　　形	円墳	規　　模	10.7 m× 10.1 m
主　体　部		主体部規模	
特　　徴	高さ3.5 m（山寄せ）　周溝あり		
出土遺物			
調　査　歴		備　　考	
参考文献			

古　墳　名	下小松古墳群　薬師沢支群　Y－34号墳		
墳　　形	円墳	規　　模	7.3 m× 7.2 m
主　体　部		主体部規模	
特　　徴	高さ2.4 m（山寄せ）		
出土遺物			
調　査　歴		備　　考	
参考文献			

古　墳　名	下小松古墳群　薬師沢支群　Y－35号墳		
墳　　形	円墳	規　　模	8.6 m× 8.3 m
主　体　部		主体部規模	
特　　徴	高さ2.9 m（山寄せ）		
出土遺物			
調　査　歴		備　　考	
参考文献			

古　墳　名	下小松古墳群　薬師沢支群　Y－36号墳		
墳　　形	方墳	規　　模	13.9 m× 11.8 m
主　体　部		主体部規模	
特　　徴	高さ3.0 m（山寄せ）		
出土遺物			
調　査　歴		備　　考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　薬師沢支群　Y－37号墳		
墳形	円墳	規模	11.6 m×8.9 m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ3.3 m（山寄せ）		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　薬師沢支群　Y－38号墳		
墳形	円墳	規模	9.2 m×8.6 m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ2.3 m（山寄せ）		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　薬師沢支群　Y－39号墳		
墳形	円墳	規模	9.8 m×9.9 m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ3.7 m（山寄せ）		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　薬師沢支群　Y－40号墳		
墳形	円墳	規模	9.0 m×9.9 m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ3.9 m（山寄せ）　周溝あり		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古　墳　名	下小松古墳群　薬師沢支群　Y－41号墳		
墳　　形	円墳	規　　模	7.8 m×8.1 m
主　体　部		主体部規模	
特　　徴	高さ2.7 m（山寄せ）　周溝あり		
出土遺物			
調　査　歴		備　　考	
参考文献			

古　墳　名	下小松古墳群　薬師沢支群　Y－42号墳		
墳　　形	円墳	規　　模	13.0 m×12.4 m
主　体　部		主体部規模	
特　　徴	高さ3.9 m（山寄せ）　周溝あり		
出土遺物			
調　査　歴		備　　考	
参考文献			

古　墳　名	下小松古墳群　薬師沢支群　Y－43号墳		
墳　　形	方墳	規　　模	9.5 m×7.8 m
主　体　部		主体部規模	
特　　徴	高さ1.6 m　周溝あり		
出土遺物			
調　査　歴		備　　考	
参考文献			

古　墳　名	下小松古墳群　薬師沢支群　Y－44号墳		
墳　　形	方墳	規　　模	15.8 m×13.0 m
主　体　部		主体部規模	
特　　徴	高さ2.3 m　周溝あり		
出土遺物			
調　査　歴		備　　考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　薬師沢支群　Y－45号墳		
墳形	円墳	規模	10.6 m× 10.2 m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ3.1 m（山寄せ）　陥没あり　周溝あり		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　薬師沢支群　Y－46号墳		
墳形	円墳	規模	径6.6 m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ1.4 m（山寄せ）		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　薬師沢支群　Y－47号墳		
墳形	円墳	規模	13.0 m× 12.6 m
主体部		主体部規模	
特徴	高さ3.8 m（山寄せ）　陥没あり　周溝あり		
出土遺物			
調査歴		備考	
参考文献			

古墳名	下小松古墳群　薬師沢支群　Y－48（第143）号墳		
墳形	円墳	規模	径13.5 m
主体部	木棺直葬	主体部規模	2.5 m× 0.6 m
特徴	高さ3.4 m　周溝あり		
出土遺物	鏡・鉄剣・刀子・U字形鋤先・竪櫛・鉄鏃		
調査歴	1987年	備考	
参考文献	大塚初重・小林三郎編『山形県川西町　下小松古墳群(1)』1995年		